

---

# 悪夢の降る町

漆目人鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪夢の降る町

### 【Nコード】

N8895S

### 【作者名】

漆目人鳥

### 【あらすじ】

破天荒！

美貌の隻眼、超級符術師『ネモ・レンレン』の、  
奇想天外！痛快無比な退魔伝！

狙われた町で、今！

祭りが始まる！

ACT 1 後日談！(前書き)

おついで！竜宮町へ！

## ACT 1 後日談！

「おおたあああああー！どうしたああ！おおたあああああー！」  
廢墟となつて十数年以上は経つていと思われ病院の一室……。  
背の高いメガネ面の男が、目の前での太田の急変に声を張り上げて  
いる！

「ヴ、ヴヴヴ……ガあああああー！」

太田と呼ばれた若い男は、床材が剥がれ、埃の厚く積もつた地べ  
たに尻を着き、まるで、駄々をこねる子供が何者をも寄せ付けまい  
とするがの如く、狂つたように身体を振り回していた。

「ヴううううががががが……」

そのおぞましい叫び声は、最早、人のものでも獣のものでもなか  
つた！

突然の成り行きに恐れおののき、後ずさる五人ほどの一団の中か  
ら、『すい』と、前に出る一人の大柄な人影があつた。

「大禍時の黄金に輝く太陽の気配が私に力を与え始める……」

群青色の紋付き袴姿。退魔師……。生川・ルークは太田の前まで  
来ると、彼を見下し、厳しい目つきで呟いた……。

只一人、この状況を正しくみつめていであろう彼の目に映るの  
は、迫る闇に心奪われ浮かれ出た、禍々しき魔物達の蠢きだす姿か  
……。 ……。

漂う何者かの気配を読み取るうかと言つかのよう、時折目を伏  
せ、何事かを唱えるように呟きながら……。白いサテンの手袋を着  
けた左手の掌を前に突き出し、辺りを探るように巡らせると、手袋  
の甲に金糸で刺繍された生川の家紋、『輝かす六芒星』が、彼の眼  
前を……。 さ迷うように異動する。

同じく白い手袋を着けた右手には、乳飲み子程の大きさの、赤い  
和装の球体間接人形が抱かれていた。

「あつろいやるれんめれりそわか……」

少しの間黙り込んでいた生川が、意を決したように切れ長の瞳で宙を睨み、短いヒゲをたくわえた口を開いて静かに呪文を唱え、人形の額のあたりに印を切り出す……。

「タルト！覚醒！」

生川が叫ぶと、生前は中世ヨーロッパの貴族『タルト姫』だった少女の霊が宿るといふ、球体関節人形『タルト』の瞳に怪しい光が宿り出し、廃墟の一室が、真夏だと言うのに急激に冷たい空気で満ちていくのが感じられた。

この人形のタルトは、生川が作った和装の球体関節人形に、彼が注ぎこんだ神にも等しい霊力に魅せられたタルト姫の霊が精霊となつて宿り、その見返りとして生川の退魔師としての仕事を手伝う式神となつたものだと言ふ……。

「あつろいやるれんめれりそわか・あつろいやるれんめれりそわか！」

タルトの前で印を切りつづける生川の指の動きが、速さを増して行く！

『ううううううががが、ぎぎぎぎぎぎ……』

咽喉を掻きむしり、憎憎しげに生川を睨みつけながら太田が悶え苦しみ出す。

「見たか！見たか！見たか！高貴なる我が魂、逃れられぬ、逃れられぬ！人を呪わば転生七代遅れ、人を殺めれば輪廻みちの途は無し！癒しはタルトにあり！懺悔し、悔い改めよ！癒しはタルトにあり！救いはタルトにあり！」

生川はそう言うとき「えいつ！」とばかりに手刀を太田の首筋に叩き込んだ！

太田は驚いたように跳ね上がり、辺りをきよろきよろと眺めていたが、唐突に、ぱつたりと床に倒れてしまった。

その様子を見ていたスタッフが、口々に太田の名前を叫びながら、倒れている彼に駆け寄って行く。

揺り動かしたり、介抱しようと抱き上げたりしている一団の中から、先ほどのメガネ面の男が立ち上がり。静かにたたずみ、労をねぎらうかのように人形をみつめる生川に歩み寄った。

「これは、いったい……」

男がひどくやつれた表情で生川に尋ねる。

「悪霊です……」

静かに、目を閉じながら生川が呟いた言葉を聞いて、スタッフ達がざわめき出した……。

「今のは、もとより此処に居た、戦国時代の武士の悪霊に取り憑かれ、暴漢になった男に殺された妊婦の霊です。悪霊に殺された彼女もまた、悪霊になってしまったのです。この恐ろしい祟りの連鎖を断ち切らなければなりません」

生川は、重々しい口調でそう言い放つと続けた。

「この廃墟は、長い間のうちに『そういうもの』を引き寄せるようになってしまっています。ここに居る怨霊を払い、ここに他の霊を引き寄せないようにしなくてはなりません」

そう言って、つかつかと部屋の奥の壁に近づいて行ったかと思うと、懐より一枚の短冊形の御符ふだを出し。それを、壁紙が剥がれ、コンクリートが剥き出しになっている壁にぴしゃりと貼り付けた。

「もう大丈夫です。この御符より霊界への聖門が開かれ、悪霊は浄化されます」

生川の堂々とした終結宣言に、スタッフの間から大きな歓声が上がった！

その時……、確かに……。確かに。生川に抱えられた腕の中で、タルトが無邪気に笑ったのである。

## ACT2 きつと！運命の邂逅！

そこは、広い範囲にアスファルトが敷かれ、昔はかなり大きな駐車場だったことを伺わせる敷地だった。

だが今は、地上に出ようと足掻いた雑草達で盛り上がり、舗装が砕かれ亀裂を縦横に走らせて、その裂け目よりそこに、人の背丈よりもまだ高い雑草が生い茂る、成れの果てへと化していた。

しかし、いかに荒れ果てているとは言え、明らかにそこはかつての駐車場であり、雑草の隙間からのぞく黒いタールの塊は、盛夏の燦燦と降り注ぐ太陽の輝きを照り返すことなく吸収し、生い茂る雑草達を干上がらせる勢いで、地上近くの大気の温度を上昇させている。

熱くなった空気が不規則に光を屈折させ、生気を失ってしぼんだ雑草たちがまるで蒼い炎のように揺らいで見えた。

そんな、生き物の生存限界のような環境の中で、色とりどりのポロやTシャツを身に着けた、数人の男女が悪戦苦闘しながら何やら機材をセッティングしている。

労苦をいとわずよく勤めようとはするが、一向にはかどらない彼らの仕事ぶりは、傍から見れば、不満があつて自棄な振る舞いをする奴隷の群れのようだった。

「オオタちゃあ、くん。もっとテキパキやってよお。暑いのはみんない緒だからねえ……」

麓の海の家から借りて来た、大きなパラソルで作った日陰に、折りたたみ椅子を二つ並べ、団扇を扇ぎ涼みながら目をくばっていた監督者らしき人物が、作業をしている者達に、そんな報われない指図をすると、隣の椅子に座るでっぷりと太った髭面の男……『生川・ルーク』に視線を移す。

紺色の安っぽい紋付羽織袴にぶよぶよと白い身を包み、赤ん坊のように短い指の生えた両手にはサテンの白い手袋と言う、趣味の悪

いで立ちが……。非常に鬱陶しい……。

「センセえ……。まだ随分かかりますよお。車の中で待っててください、よお……。冷房効いてますからあ……。」

監督者が愛想笑いをしながらそう言うと、生川はぷくぷくとした口を蓄<sup>つぼ</sup>ませて、そのまわりにチヨボチヨボと生やした、お世辞にも清潔とは言いがたい髭をモゾモゾと動かしながらしゃべりだした。

「いやでち！だって、ここ幽霊出るんでちよ？一人で車の中にいて出たらどうするのち！」

生川は、拗<sup>す</sup>ねるようにそう言うと、左手に抱いている赤い和装の球体間接人形『タルト』の長い黒髪を愛おしげに撫でて、己の顔の肉に埋もれて細くなつた目を一層細めた。

「幽霊出たら被えばいいじゃないですか！」

監督者が声を荒げる。

「何言つてんのよ、被えるわけ無いじゃないのち！」

「あ、っ、やつぱ無理ですか？」

監督者はそう言うと、後ろ頭を右手で抑え、乾いた愛想笑いを浮かべた。

「当たり前でち！被え無いでち！相手は幽霊なのよ、被える訳無いじゃないのでち！余計なことをして、もし、崇られでもしたらどうするつもりなのち！」

生川はそう言うと、抱いている人形に「ねえー、無理でちよねー、タルトお」と言って人形の顔ギリギリまで唇を寄せてキスをする真似をした。

「のぶちやあ、ーん『センセえ』に何か冷たいもの持って来てえ、！」

見るに耐えない醜態を目の当たりにして、気分の悪くなった監督員がそう叫んで視線を後ろにそらす。

と、その時、「チーフう！セット完了しましたあ」と言う声が上がり、作業員の男の一人が大きく手を振った。

「ナイス・タイミンヴう、ー！オオたちや、くん」

やっとこの居心地の悪い雰囲気から逃れられると言う喜びの気持ちだが、思わず言葉の響きになって出てしまう。気取られたかと生川を見るが、彼は何やら人形との意味不明な会話に夢中で気づいていない様子だった。

すぐにその場を離れることに思い及び、手を振っていたスタッフへ駆け寄っていき行く。

「オオタちゃん、くん！オオタちゃん、くん！」

チーフと呼ばれた男はオオタの名を繰り返し呼びながら近寄ると彼の首に手を回し、フツフツと汗のにじんでいる顔を近づけ、たばこ臭い口臭を漂わせながら、声を潜めて語り出した。

「さあ、じゃ、さつさとやつつけちゃおうよ、オオタちゃん。日が高いうちに病院の中の撮影終わらせないとねえ。日がちよつとでも傾いちゃったら、あのデブ言うこと聞かなくなっちゃうんだからね。解ってるう？オオタちゃん、くん」

オオタの首を伝わりダラダラと流れる汗が、チーフの回した腕にせき止められ、胸の方へとこぼれて来る。オオタは、そのあまりの不快さに顔をしかめた。

「そんな顔しないの。オオタちゃん。しょうがないだろう？だってあのデブ、明るいうちでないと怖くて幽霊病院の中に入りたくないって言うんだからあ……」

オオタの顔つきや身振りを、仕事に対する不満の表情だと思いつ込んだチーフが、彼をなつかせる様に当たり柔らかいダミ声で言い聞かせる。

「ささーっと病院の内のシーンとってさ！あと、夕方、日が傾くまでは自由時間にするから、昼に冷たいビールでもきゅつとあおって！一寝入りして、後は涼しくお仕事って事で。そんな風に、ひとつ、よろしく！」

そんな風には絶対行かない事が常の慣わしである事を知りつつも、自分の首にまわり付く鬱陶しいチーフの腕を離してもらいたい一心で、オオタは「はあ……」と気の無い返事を返していた。

チーフはニタニタと上機嫌の表情を作り、オオタから離れると、朽ちた病院の前で立ったまま干からびたように散開するスタッフ達に向かつて叫んだ。

「さあー！じゃ、カメラ八行くよー！」

「ちつと、ちよつと待つでち！」

突然、後方から薄気味悪い赤ちゃん言葉の男声がして、チーフがギョツとして振り返ると、そこには、紋付きに包んだ巨体をぶよぶよと揺らしながら、こちらにやって来る生川の姿があった。

顔中から溢れ出る大粒の汗が、次々こぼれる様にだらだらとしたり落ちるのを拭おうともせず。目の周りをのぼせた様に赤くて、ふごふごと荒い息をしながらこちらに向かつて来る姿は、まるで発情した豚そのものだった。

その、あまりの威圧感にチーフが辟易する。<sup>へきえき</sup>

「そんなに怖がらなくてもいいでち。別に捕って喰ったりはしないでっ」

チーフの目前まで来ると、生川はそう言って、両手で抱えていた人形を片手に抱き直し、ピンクのハンカチを懐から取り出してべたべたと顔中の汗を拭った……。その時初めてチーフは、生川が人形を落とさないようにと大事に抱えていたために、ハンカチを取り出せないでいたのだと言うことを悟った。

ハンカチはあつという間にびしょびしょになって紫色に変色していく。

「チーフさん、あたし、またまたいいこと考えたのでっ」

ふうふうと息を切らしながら、生川がチーフに詰め寄って続けた。「こないだの放送で、この病院に取り憑いているのは『病院で流産して殺された』妊婦の霊だつて事にしたでしょう？」

「『流産して死んだ』妊婦だつたんじゃ……」

オオタが口を挟むと、チーフが鋭い目つきで彼を一瞥し黙らせる。「はいはい、そうでしたねえ……。アレは生川さんのアイディアでしたよねー。いやー、視聴者の意表を突くナイスなアイディアでし

たよねー。プロの私もビックリでしたよ！」

「あらあら、何を甘ちゃんな事をいつてるでち」

生川はそう嘲るこたように言うと、わざとらしく手を口に当てて、つぶぶと含み笑いをして見せた。

「どんなに、優れた演出が私にしか出来ない演出だとしても、それに妥協しては『だ・め』……。いい物は出来ないでち。いいでつか？教えてあげるでち。一流の演出というものわあでつ、絶えず新鮮な『意外性』を視聴者に与えなければ飽きられていつてしまうものでち！だから駄目なあなた達に替わって私が考えたのでち」

提起と結果が微妙にズレて行く生川の俺様節に、軽い混乱を覚え、（普段から物考えて話した事ねえんだろうなあ……）などと思いながらも、チーフとオオタは小さく頷いた。

「やはり、私ほどのストーリーテラーの、私のエンターテイメントの王道といえば、日常から非日常へと変わる瞬間の一瞬の醍醐味！それが私のエンターテイメントの王道と言えるでち！」

興奮しながら悦に入り、天を仰ぐ勢いの生川に、チーフとオオタが（国語習えよ……）と言いたげな、げっそりした顔つきで応じる。「いいでちか？意外性でち。主婦を殺した殺人者はじつは、悪霊に操られていたと言うことにするでち」

「だから……殺人者なんて前回言って……」

「しっ！」

「この病院のあるこの場所は、江戸時代、戦で戦った場所で、この時殺された武者のお侍が、無念の悔しい念を抱いて悪霊になって彷徨っていたのでつ！妊婦は悪霊に殺されてしまったので、成仏出来ずに彷徨っている！どうでち！」

「すば・らしいー！それ、行きましょう！それでさっさと行っちゃいましょう！」

大げさにジェスチャーをつけながら、チーフがオオタに目配せしながらそう言った。

「待つでち、待つでち……。それだけじゃ、私と、タルトの活躍が

足りないでち」

「はあ？」

「悪霊が、スタッフに乗り移った事にするでち。それを私が、私のタルトを使ってお祓いするでち！」

「あ……。ちよつといいかも……」

人形を振りかざしながら熱弁する生川の圧迫する姿に、思わずオオタが口を滑らす。

「イイ！いいよなあ！いいだろう、オオタちゃ〜ん」

そう言いいながらチーフがオオタをヘッドロックで固めた。

「凄くイイから、お前が取り憑かれる役やれ！これ、決定事項！」

「ええーっ！」

頭を締め付けられ、もがきながらオオタが非常に間の抜けた叫びをあげた。

「駄目ですよおう。俺、理数系だから演技なんか出来ませんよう！」

じたばたと足掻きながら、許しを求めるオオタの耳元にチーフが顔を近づけて囁いた。

「いいんだよ……。俯うつむいて、大きさに体ぶるぶる震わせながら、『

ギギギ』とか『ヴヴヴ』とか『アアア』とか喉震わせとけば

！後は、あのデブの調子に合わせとけ！」

「でも……」

「時間がねえーんだよっ！お日様がちよつとでも傾いたら、あの臆病虫のデブが動かなくなるんだよっ！いい加減に大人になれよ！オオタっちゃん！」

チーフの腕の中でオオタの抵抗が途切れた。

「放送の時はモザイクかけて、音声変えてやつから！ほれ！」

そう言つて、チーフがオオタを前に突き放すと、彼はしぶしぶと建物に向かって歩き始めた。

「せんせえー！さっ！行きましょー！」

チーフはそう言つと誘うように右手を建物の方へ突き出し、生川を手招く。

「まったく！ワタチが居ないと何にも出来ないのぢね、あんたたちは！」

ニタニタと満足げな微笑みを浮かべながら、そう言って生川は人形を抱え直して歩き始めた……。

そのとき……。

突然、草むらから、蒼に近い灰色の小さな固まりが飛び出し、生川の後方から飛びかかった！

だがしかし、その直前に、生川は抱え直したはずの人形を取り落としそうになって体勢を崩しており、間一髪！結果的にその固まりの襲撃を回避する！

固まりは、生川を超えて向こう側に落ち、「フーっ！」と威嚇の声を上げると、大きなグリーンの目で彼を睨んだ。

「な、何だこの『ネコ』！」

言うが早いのか、チーフが目の前に飛び出した蒼灰色のネコの横っ腹を思い切り蹴り飛ばす。生川に気を取られていたためか、ネコは呆気なく蹴りを食らい、再び生川の前に転がった。

「こんの馬鹿ネコ！」

生川はそう叫んで、フラフラと立ち上がろうとするネコの頭をカウター気味に蹴り飛ばす！

「タルトに傷が付いたらどーする気でちか！」

その場でぐったりしたネコの腹を追い打ちをかけて蹴り飛ばすと、最早ネコは動かなかった。

「せんせえもうイイでしょう？さ、行きましょ、行きましょ！」

ネコの前で仁王立ちする生川の、ぷよぷよとした手をチーフが引いてせきたてる。

生川は憤慨した視線で、横たわるネコを一度睨むと、抱いている人形に微笑みかけ、チーフの誘いに従った。

「なあ、なあ！今のネコが飛びかかった瞬間！カメラで撮ったんだけど、どっかで使えないかなあ！」

ハンディカメラを持ったスタッフが興奮気味に同僚に叫ぶ。

「馬鹿！夕方ここで撮影したことにするんだぞ！こんな明るい真昼間の絵なんかつかえるかよ！」

「あ……。そうかあ……。あああ、折角撮ったのになあ……。いい絵になつてたのになあ……。」

同僚にたしなめられてもまだ、諦めきれない様子のハンディの男が、スタッフの一番最後からしぶしぶと建物に入っていった。

やがて、男達の喧噪がすっかり建物の中へと移動していき、あたりが騒々しい蝉の声と、陽炎とともに立ち上がる草いきれで満たされたとき。横たわっていたネコはようやく目を覚まし、ぴくぴくと耳を動かしながらゆつくりと起きあがると、耳を前に垂らしたままその場に座って毛繕いを始めた。

「ねえ……。」

突然人影が現れ、声をかける……。

ネコは、驚く風でもなく……。或いは、それすらも出来ないほど打ちのめされていた為か……。自分の前に立つ声の主を見上げた。

そこには、白昼の太陽光よりもなお白いチャイナドレスに身を包み、放漫な胸を持ち上げるように腕組みする女性、ネモ・レンレンの姿があつた。

東洋的な透明さに輝く瞳に、セミロングの跳ねがかかったオレンジカラーの髪。タイトな白いチャイナドレスに詰め込まれた挑発的なまでに危険な姿態……。

彼女の容姿は、チャイニーズとフレンチの混血である事を告げられれば容易に納得できたし、そのナチュラルなメイクの醸し出す独特のエキゾチックさは、目元に入れられた紅系のアイラインの印象と相まって、紛れも無く『美女』と呼ぶにふさわしいそれであつた。が……。只一つ、その完璧に近い彼女は……。

隻眼だつた……。

いや……。正確には、彼女の右目は、繊細な銀の装飾に彩られたアイパッチに覆われていたと言う事だつた。

「派手にやられてたわねん……。」

そう言つて意地悪げに笑つてみせる。

ネコは煩わしそうに目を閉じると、腰を上げ、その場から立ち去ろうと歩き出した。

すると突然、その後ろ姿を眺めていたレンレンが、猫を指さし声高に笑い出す！彼女の視線の先には、猫の尻尾……。その尻尾は、先つちよから女性の手で一握りしたあたりで上を向いて折れ曲がり、その形状は『レ点』のように鋭角だった。

いかにも不自然で、意図したようなその造形は、あまりにばかばかしく、あまりに滑稽なのだった。

「な、何よんそれえ！変よ、変！」

指をさして大笑いをする。

「しつぱ、変！変な奴う！」

今の一連の騒動の際にそうなつてしまったものなのか……。それとも、生まれつきの有様なのか……。

「ねえ……」

我関せずといった様子で、その場を去ろうとする猫の後ろ姿に、ひとしきり笑っていたレンレンがぱたりと笑いを止め声をかける。

「ねえ、あんた、『焼き蛤』たべない？」

そう言つた彼女の口元が三日月をつくつた。

ACT3 巷説！『かごめかごめ』！

「あらよお？ハリガネじゃないの？ご馳走してもらってるのかい？よかつたねえ」

払いを済ませた客のテーブルの上を片付けに来た、海の家『源九浪』の女将とおぼしきパンチパーマの女性が目を細め、土間にあるテーブルの下で、皿の上に盛られた焼き蛤のむき身にかぶりつく猫に、濁声だみこえで語りかけた。

「ハリガネ？」

猫が潜り込んでいる、四人掛けの安っぽい木のテーブル席に一人で座るレンレンが、女将に尋ねると、彼女は足を止めて人当たりのいい顔を彼女に向けた。

「あらよお、このネコの名前だよ。ここから少し沢の方へ行つた所にある深山みやまさんって家の飼いネコだよ。去年亡くなったおじいちゃんおぢいの代からのネコだね。ほら、尻尾の先……。先つちよが面白い形に折れ曲がつてるだろう？それが、まるで『針金』が入っているよ。うだからって……。そんな名前を付けたらしいよ」

「ふーん、あんたやつぱりそれって生まれつきなんだ……」

レンレンがそう言つてテーブルの下をのぞき込むと、ハリガネは彼女を上目づかいで一瞥したが、すぐに意に介しなくても言うように、小さく音を立てながら剥き身を咀嚼する。

「ねえ！ハリガネにイワシを一匹焼いて頂戴！あと、どーんと刺身を舟盛りにして！コイツ気に入ったわん！私のおごりよん！おごつちやうう！」

「あらよお！ほんとにいいのかい？」

半信半疑と言うように、女将が尋た。

「とーぜん！いいのよん！」

レンレンがそう言つて、グラスに並々注がれた冷酒をあおると、女将は顔をほころばせてにつこり笑い、調理場へ注文を通しに向か

った。

「あんた、私の知ってる奴にそっくりだわよん」

くりくりとした緑色の瞳に縦長の瞳孔……。多少、愛想無しではあったが、その愛らしさから、レンレンは風小の面影を思い出していた。

「女将さん、ちょっとお願いがあるんだけどお……」

調理場から戻ってきた、『パンチの女将』を見とがめたレンレンが、その声をかけた途端、女将は調子つばずれな馬鹿笑いを始めた。「あらよお！アンタみたいなキレイな娘さんから『女将さん』なんて言われたら罰が当たっちゃうよ！『おばちゃん』でいいよ！おばちゃんです！」

『パンチ』が何を根拠として何の話をしているのか、レンレンにはまったく理解できなかったが、どうやら、自分を『おばちゃん』と呼んで貰う事を希望しているらしいと理解した。

「じゃ、『おばちゃん』。頼みがあるのよん」

レンレンはそう言うと、車の鍵の付いたキーホルダーを彼女の鼻先に突きつける。

「海岸への降り口が判らなくってえん……。この上の道路わきに私の車が止まってるのよん。チップはむから駐車場に移動して来てえん」

「あらよお、ここの道路は駄目だよ、すぐ駐車違反やられちゃうよん！」

おばちゃんはそう言うと、店の中を見渡し、別の席の注文を取っている青年に「しげちゃん」と声をかけ手招きした。

真っ黒に日焼けした、紫の海パン姿の青年が足早にやって来ると、おばちゃんはレンレンを指差して口を開いた。

「このお嬢さんが車を上の道に置いて来ちゃったんだと！ケーサツ来る前に動かしてあげな！今日はあんまり混んで無いから、駐車場も空いてんだらうから……。トシオちゃんとこの駐車場がいいかもしれんね」

おばちゃんがそう言うと、重ちゃんと呼ばれた青年は、爽やかな笑顔で「はい」と返事をし、レンレンに近づき鍵を受け取る。

「すぐわかると思うわん。赤のコルベット・スティングレーよん」  
レンレンの言葉に、しげちゃんが一瞬怯んだ表情をする。

「ホントっすか?!」

「ホントよん」

レンレンが応えると、しげちゃんの顔が見る見る輝いて行き、小躍りするように店を出て行った。

「あらよお、あんなにうれしそうに！お客さんの車はよっぽどいい車なのかい？」

しげちゃんの後姿を追いながらおばちゃんが言った。

「さあねえ……どうかしらねん」

グラスの酒に口を近づけながら、レンレンが気が無い返事を返す。安っぽいアルコール臭のする、悪い意味で非常に水っぽい酒だった……。が……。海の家で出される酒など、どこもこの程度のもんだろう。我慢するほど『不味』くは無いのがせめてもの救いか……。「いやいや、お客さんが知らないだけで、きつとその車はいい車だよ。何つつたって、しげちゃんはカーキチだからねえ。車にはくわしいんだよ！」

おばちゃんの言ってる事のほとんどは、レンレンには理解の範囲を超えていたが、自分の車を褒めて貰っているらしいと言う雰囲気は、気分の悪いものでは無かった。

ただ……。『カーキチ』が何なのか？それだけは後で聞いてみたいと思っていた。

「ねえ、まどろっこしいわん。日本酒、ビンごと持ってきてよん！」  
一息でグラスの酒を空にしたレンレンが気を吐いた。

「あらよお！飲みっぷりのいい娘さんだねえ惚れ惚れするよ！ちょっと待ってな！おばちゃんがとびつきりを持って来てあげっから！」

おばちゃんはそう言って奥に引っ込むと、ややあつて一升瓶と瀬戸物のお茶碗を持って再び現れた。



双方とも無知であることに変わりはないが、これは、あまりに愉快!

「嫌いじゃ無いわよん。こういうの……」

「気に入ったのかい? そいつは良かったねえ!」

盛大な勘違いと共におばちゃんが満足げに微笑み「お前のお客さんは気に入ってくれたってよお」と言っつてハリガネにウインクして見せた。

余興にはなかなかの思いがけない出来事だ。レンレンは上機嫌でビンの封を開けると、茶碗に並々と酒を注ぐ……。溢れるばかりに注がれた酒の表面に、波紋一つ立てずにスイと茶碗を持ち上げて、口に近づけようとしたその途端、彼女の手が止まる……。その忌まわしい味感口には含むまでも無くレンレンを襲った……。注がれた酒から立ち上る、度を過ぎて甘い珍妙な香りが、苦みとなって口の中に広がって行くのを感じる。……。あまりの不意打ちに、一時……、戸惑う。茶碗を持つ手が動揺し、縁から酒が零れる……。ふと、茶碗から視線を上げると、いつの間にか、ハリガネがテーブルの上に乗って置物のように座り、彼女を、まるで値踏みするかのような視線で眺めていた。

応えるように、レンレンは不敵に一笑すると、一気に茶碗をあおる……。

絶句……。全く酒の味とは違う味覚。風味と言うより嫌味……。香りと言うより臭い……。酸味に近い苦みが舌を痺れさせながら広がっていき、むせるようなアルコール臭がいらいらと刺激しながら喉に流れて来る……。が、それを良しとして一息に杯を空けた。

「ま、ますます、気に入ったわよん……」

そう言いながら、茶碗を持つ手でグイと口元を拭う。

その時初めて、ハリガネが『にゃあ』と鳴いて眼を細めた。

「お嬢ちゃんもテレビの人かい?」

オバちゃんがレンレンに声をかける。

「テレビ?」

懲りずに酒を注ごうとした手を止めて、レンレンが聞きなおした。  
「あらよお、違つのかい？おばちゃんまた、芸能人かと思ったよう……」

レンレンは、おばちゃんに自分の姿がどう捉えられているかを想像し、ニヤリと笑う。

「私、そんなに胡散臭いイ？」

「あらよう、そうじゃないよ。あんまりべっぴんさんだモンでだわ。今日来てるテレビの人と一緒に来たのかと思つたよお」

オバちゃんはそう言つてまた調子っぱずれに笑つた。

「テレビの取材ねえ……」

レンレンは、最早、前足を折りたたみ、その場に伏せて眼を細めているハリガネを眺めながら、先ほどの廃墟にたむろしていた一行を思い出していた。

「何かあつたのん？」

テレビと言う言葉に特別に反応して、尋ね返した訳ではなかつた。あの連中が何者かが解れば、或いは先ほどの騒動の『理由』<sup>わけ</sup>が解るかもしれないと、そんな好奇心が湧いたためだつた。

ハリガネを知るこのおばちゃんの反応や、自分に対するハリガネの態度を見る限りでは、少なくともレンレンには、今、ここにいるハリガネは、正直、無差別に人を襲う凶悪猫には感じられなかつた。(では、何かあつたのか……)

「あらよう、最近特別に何かあつたわけで来たんじゃないよ。この先の山の中腹に、大きな病院だつた廃墟があつてねえ。そこが……、ほら、なんてつたつけ？」

『なんだつたか』と聞かれたところでレンレンに解るわけが無かつた。

「うーん」と唸つて考え込んでしまつたおばちゃんを肴に、咳き込みながら茶碗酒をあおり、満足げなハリガネと共に答えが出るのを待つ。

「あれ、ほれ、『心霊ポット』とかいう奴だわ！」

物騒なポットもあつたものだ……。多分間違っている。話の前後から推察するに『心霊スポット』と言いたかつたのだらう。話には支障が無さそうだったので、面倒臭さも手伝つて、レンレンは特に指摘せず、聞き流すことにした。

「3年くらい前まではよく来てたんだわ、テレビ……。最近は何も聞かれたのか来なくなつてたんだけどねえ……。ほら、去年……。新聞に出たから……。知つてつかい？」

病院やホテルの廃屋が心霊スポットとなることは、まったくもつて珍しいことではない。テレビならぬレンレンにしてみても、最早、話の興味は消えかけていたが……。成り行き上で彼女は首を横に振つていた。

「あつたんだよ……。『崇り』が……」

もともとその病院は、この町には不釣り合いなほどの大きな総合病院として建てられたものだらう。

外科、内科は言うに及ばず、小児科から眼科、産婦人科に及ぶまでの多彩な部門が24時間体制と言う、正に町の要といえる『総合病院』だった。

だが、やがて、時代が医者不足と言う事態に陥いつた時。田舎と呼んで差し支えないこの港町への赴任を希望する医者達が年々減つていき、ついには、撤退と言う形で閉院してしまつたのだと言う事だった。

特に、因縁話があつたわけではない。まわりからは惜しまれつつの撤退であり、ささやかでは有つたが、閉院する前日にはセレモニーも行われたという。

ただ、建物に買い手が付かないだけ、だから建物も放置されている。それだけのこと……。ただ時間だけが過ぎて行き、未だ山の腹にある……。

くたびれた鉄筋3階建ての建物は、あつという間に、まわりをまるで人の侵入を拒むかの様な背の高い雑草の群れに覆われ、その建

物の壁の大半はさまざまな蔦が覆って行った。

そのロケーションをオカルト好きな者達が放って置かなかった。

「あらよう、病院だからねえ……。色々悪い噂、立てちゃえば何だってそれっぽくなっちゃうんだよねえ……。最初は、もとは病院の敷地は墓地があつて、その呪いで医院長が気が狂つて、入院患者とお医者さんを殺しちゃつたとかねえ……。」

中傷する噂は止まる事とどを知らなかったという。

もちろん、全て噂が一人歩きしたデタラメばかりだったのは言うまでも無いことだ。

「どこから噂を聞きつけたんだかねえ……。あちこちのテレビ局なんか色々な霊能力者の先生様を連れてたくさん来たよお。多分、有名な先生達は全部来たと思うよお。占いの先生なんかもねえ何人か来たねえ。」

そして、来るたびにその『先生』達は、各々に有りもしない因縁を語り、それがテレビや雑誌で流れる事により、噂は中傷を超えておどろおどろしい怪談へと変化していったのだった。

「三年前くらいがねえ、一番ピークだったかねえ……。最近ほほとんど来なかつただけでもねえ。」

話を聞けば、かなりの有名なスポットであつたようだが、もともとテレビと言うものを観ないレンレンにしてみればまったく縁の無い話ではあつた。

「だけどね……。」

おばちゃんが神妙な顔つきになる。

「だけどさ……。去年の冬……。あの『祟り』があつてからねえ……。」

……。おばちゃんが益々神妙な面持ちになり語りだす。

去年の冬。暮れも押し迫つた12月の或る日。

件の病院の荒れ果てた駐車場の敷地で、一組の若い男女が発見された。

二人の若者は、前日に港の観光市場で買い物をしている所を目撃

され、そのまま行方不明になっていた。

この街に遊びに行く事を聞いていた女性の両親が、連絡も無しに帰って来ない事を心配し、警察に届け出たことで捜索が始まり、すぐに山中の道路に止めてある車が発見される。

さらに捜索が進むと、二人は病院の敷地で発見されたのだった。

二人は駐車場にへたり込み、生きながら死んでいた。

「もう、正気が無くてね……。同じ言葉を繰り返すだけだったってさ……。」

「同じ言葉？」

レンレンが尋ね返すと、やっと観客が話しに乗ってきたことがうれしかったらしく、おばちゃんは雰囲気満点の低い声で答えた。

「あらよう、『かあこめ、かあこめ』って……ずーと繰り返してたんだよう。」

「困め、困め？」

二人は正気を失う前からずっとそこに居たのか……。それとも病院に入ったのか？……。

昼間の間からなのか、それとも夜半を過ぎてからなのか……。

さらに如何なる目的だったのか、今となっては知る由もないことだった。

「それで？何が『祟り』なのよん？」

「ほら、童謡の『かごめかごめ』って知ってるかい？」

『童謡』と言う言葉を聞いて、レンレンが顔をしかめた。

『とおりゃんせ、とおりゃんせ……』

戦慄の過去が蘇る……。

「な、なななな、なによん！童謡が何だって言うのよん！こ、こここここ、怖くなんか無いんだからねえ！」

「あらよお……。まだ怖がる所じゃないよお。」

レンレンのあまりの慌てぶりにおばちゃんが面喰らう。

「あらよお、そうか、アンタ外人さんだから童謡知らないんだねえ」  
おばちゃんは、レンレンが、『かごめかごめ』を知らないことを悟られることが恥ずかしくて慌てていると解釈した様子で、あからさまに哀れむような目で彼女を見つめている。

「な、何よん！何勘違いしてるのよん！違うわよん！別に私、知らない事を恥ずかしいと思ってるわけじゃないわよん！そりゃ、確かに知らないって事は事実だけど！」

耳たぶを真っ赤にして、尚も激しい口調で立ち向かってくるレンレンを、左手を開き盾にしてとどめながら、おばちゃんは伝票の用紙を前掛けの大きなポケットから取り出し、その裏に何やら走り書きする。それは、不気味な童謡の歌詞だった。

かごめかごめ

カゴの中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に

鶴と亀が滑った

後ろの正面だあれ？

書きあがったそれを満足げに眺めると、レンレンの前に差し出す。「この歌詞に合わせて子供がお遊戯するのさね。一人が屈かがんで、両手で目隠ししてね。まわりを手を繋いだ子供達が、この歌を歌いながら回って歩いて、最後、『後ろの正面だあれ？』で止まってね。目隠した子が自分の後ろにいる子を当てるってえ『げええーむ』だね」

おばちゃんはレンレンが『外人』と言う事を意識してか『ゲーム』と言う単語を使い、尚且つ、妙なアクセントをつけた。多分、それも『外人・レンレン』へのおばちゃんなりの思いやりだったのだろう。

つい最近、どこかで体験した事のある展開に、レンレンは軽い眩

暈を感じる。

「この『かごめかごめ』って言うのは、ある学者さんが言うには、『困め困め』って言葉から変わったもので……、ようは、周りを回っている子供達が互いに呼び合ってる掛け声なんだって言うのさ。それでね……、『カゴの中の鳥』って言うのは『お腹の中の赤ちゃん』って意味でね……、この歌はね、妊婦さんが『流産させられた』歌だっってことらしいよう」

何某かの学者が本当にそんなことを言っているとしたら、一体如何なる学問の如何なる解釈なのか……。レンレンは眩暈のうえに頭痛までし始めていた。

そんなレンレンにお構い無しに、おばちゃんは書き込んだ歌詞の脇に矢印を書いて、一つ一つ、文節の意味を書いく。

かごめかごめ      困め、困め

カゴの中の鳥は      お腹の中の赤ちゃんは  
いついつ出やる      いつ生まれるの？

夜明けの晩に      夜が明けても晩に（暗いの意）階段で

鶴と亀が滑った      メダタイ鶴と亀が滑った      悪いことが起こった  
（滑って転んで流産した）

後ろの正面だあれ？      後ろから押したのだあれ？

うなされそうな内容だった……。

「生川・ルークって、知ってつかい？」

「？」

「ほら、お人形さんで『悪魔払い』する人……。ほらあ、おかつぱ頭の紅い着物着たお人形さん抱いて……」

レンレンは再び廃墟での連中を思い出し「ああ、『あれ』か……」と、ハリガネを執念深く最後まで蹴りつけていた、薄らみつともない体裁のデブ男を思い出していたが……。ただ黙って首を横に振った。

「あれよう、知らないかい？最近よくテレビに出てるんだけどねえ」  
「その、なんとらルークがどうしたって言うのよん？」

要領を得ないおばちゃんの話に、不機嫌そうにレンレンが尋ねた。

「そうそう……。その生川・ルークが先週スタジオで霊視したんだよ。気が触れた二人が口走っていた『困め、困め』って言うのは『かごめ、かごめ』の事で、病院で流産して死んだ女性の霊の祟りなんだってさあ！おっかないねえー！そんなモンがずっとあそこに居たなんて、おばちゃん知らなかったよあ」

おばちゃんはそう言うつと、手を合わせて拝む仕種をした。

「つまり……。そのルークが今日来てるってことあ？」

「あらよう、そうなんだよあ！幽霊退治するつてその時テレビで言うつてね。今日来たつてわけさあ」

「ふーん……」

レンレンは鼻を鳴らすと、クイと茶碗酒をあおった。

生川・ルークが如何なる術を使う何者なのか？そんなものに興味は無かったが、テーブルの上にいるハリガネへの興味はさらに膨らんだ。

(何があんたの気に障ったのお……？)

ハリガネは、唯、眼を細め、うずくまっている。

「えーつとお、『かーきち』と、『かごめかごめ』……は後で確認するとしてえ……」

そんな事を考えていると、先ほどの『しげちゃん』と呼ばれた青年に勝るとも劣らない日焼けつぷりの青年が、舟盛りを持って現れた。

「おばちゃん！舟盛り、コツチラさんっすかー」

「あらよあ、お客さん、おまちどうさんだよあ！」

おばちゃんは元気よくそう言うつて青年から舟盛りを受け取り、レンレンの前に差し出す。

「あらよあ、うちの父ちゃん、ハリガネのお客さんだからサービス

しろって言ったからって！いくらなんでも盛り過ぎだよ！」

色とりどりの魚介類を、絢爛に盛りつけられた舟盛りを眺めながら、おばちゃんはそう言って威勢良く笑った。

ACT 4 放浪！ほつといてよ！

すっかり日が沈み、白い月の光が輝く海岸で……、レンレンは砂浜に立ち、海を見ていた……。沖から吹いてくる潮風が、アルコールで上気した頬に心地よい……。

昼間の喧噪……。

破裂するような子供達の叫び声。成り行きと本能でうるつく水着姿の老若男女……。

そんな、いらいらするほど無節操で品の無い風景は、最早そこには無く……。

昼はそれらにかき消され、冴えない呟きを繰り返していた潮騒が、天空にかかる眉月の狂喜に目覚めたがごとく、夜のとばりの降りた空間に鳴り満ちていた。

「あなた……付き合いのいい猫ねえ……」

足下に寄り添うハリガネに、レンレンが声をかけて、「ククク……」と小さく笑った。

ハリガネは答える風でもなく、辺りをせわしなく眺めている。ハリガネの体躯は、月の照臨に、夜そのもののような蒼いビロードの光沢を放ち、まるで、たった今、夜から抜け出て来たような……。或いは今から夜に溶け込もうとも言うかのような、儂い存在でそこにとどまっていた。

ただ酒宴の傍らに居ただけで、酌の一杯もしてくれただけではない。それでも、とりあえず最後まで……。こうして一緒に海を眺めてくれたハリガネに、レンレンは今宵の宴の相手として、じつは少しだけ感謝していた。

なかなか楽しかったかもしれない。そう……。多分……。そうであったらろう……。

今日でなければ……。

この、心にわだかまる思いが無ければ。

そのいまいまいわだかまりは、今朝、唐突に……。

ぺたぺたと濡れた足でフローリングの床を走る小さな足音ともに、風小がリビングに入って来るその姿を見て、円形のテーブルに一人座り、グラスを口に運んでいたレンレンは、口に含んだバーボンを噴出しかけて咳き込んだ。

「あんたあ……。なんて格好してんのよん……。」

グラスを置いて、レンレンがあきれたように言った。

「？」

何の事が解らないと言うように、立ち止まった小柄な少女……。

風小が、緑色の大きな瞳をくるくるとさせながら小首を傾げる。

「かつこうよん！その格好お！庭にプールでも掘ったわけえー？」

レンレンが、多分、非難しているのであるう風小の格好……。それは……。紺色一色のスクール水着だった。

小学生や、中学生が着るような極端に小さなものではなかったが、それでも風小の身体にはあらゆる意味で寸法が足りないらしく、競泳の水着のようにピッチリと身体に吸い付いており、胸や太ももの付け根においては、きゅっきゅくと肌に食い込んで、肉づきのよいお尻の端は、しぼり出されたようにはみ出していた。

さらにあきれたことには、ご丁寧にも胸の真ん中に大きな白布の名札がしっかりと縫い付けてあり、マジックインキで不器用に『ふうこ』と書かれているのだった。

「見てください！みてください！デスよー！レンレンさん！お店がサービスでお名前入れてくださったのデスよー！」

自分の水着の事を言われていることを知った風小は嬉しそうにそう言いながら、胸の名札を自慢げにレンレンの方へ引っ張って見せた。

「なにをしてんのかって聞いてんのよん！」

見るもオゾマシイと言わんばかりに、レンレンがそんな風小から身を引いて怒鳴り、グラスに1/3ほど残っていたバーボンを一気

にあおった。

「お庭に水を撒いていたのデスよお。暑いですから、ついでに水浴びをしていたのデス。服も汚れず、一石三鳥おー！でございますデスよ！」

そう言って、勝ち誇ったように水滴の滴るVサインを掲げた風小を見て、レンレンは、一瞬、呆けたような顔を見せたが、すぐにテーブルの上の酒瓶に手を伸ばすと、あきれ顔でグラスに酒を注ぎながら、もう一度、その有様にぼんやりと視線を向けた。

にこにこその場にたたずむ風小の後ろに転々と続くドロ混じりの濡れた足跡。さらに、この場に止まったことと、身体からしたたり落ちた水滴が、テーブルの脇の風小の下に小さな水溜りを作り、尚も大きく成長している最中だった……。

「ま、掃除すんのはアンタなんだから好きにすれば……」

レンレンはそう言くと、風小を追い払う仕草で左手を振って、なみなみと酒の注がれたグラスを口に運んだ。

二回ほど喉を鳴らしてバーボンを流し込むと、半分ほど中身の無くなったグラスをテーブルに置いて熱い息を吐く……。

グラスの脇には、短冊に朱文字で神秘的な綴り文字の描かれた。

一枚の御符ふだが無造作に置かれていた……。

その御符こそは、符術中、屈指の伝説的な威力を持つとされし御符。

その名を『雷神の御符』！

しかし、その御符は……。

「人には仕えぬ、使えぬ御符……か……」

そう言ってレンレンが恨めしそうに御符を見つめて微笑む……。

製法も、文字の綴りにも間違いは無い……。超級符術師たる自分の知識と技量をすべてつぎ込んだと言っ意味から言えば、最早、完璧に近いものハズだった。だが……。

「おおー！『雷神の御符』でございますデスね！」

そう言ってテーブルをのぞき込もうとする風小を、鬱陶しそうに

レンレンが手を振って追い払う。

『雷神の御符は人に仕えない御符』……。それが通説であり、そしてそれが真実だと言う事をレンレンは知っていた。

過去、彼女自身も幾度と無く、御符の力を覚醒すべくこころみていたのだが、そのすべてがごとごとく失敗に終わっていたのだ。

誰においてもそれは同じ事らしく……。符術使いの中には、最初からじつはまったく効果など無い『使えない御符』であるとする者がいるほどであった。

しかし、それは違つたとレンレンは感じていた。

御符を使おうと向かい合った時、自分の一番無防備な場所に襲つてくる、心を裸にされるような威圧感……。一体何がそう感じるのかは解らない……。だがそれは確かに感じられる偽りのない感覚。彼女は己のその感覚を信じていた。己の感覚であるがゆえに……。

まともに考えれば腹が立つばかりなのだが、たまにこうしてぼんやりと、知恵の輪を解くように御符の攻略に巡らせる思いをあてに酒を飲むのは、彼女にとって、じつは結構お気に入りの時間であったりした。

もつともいつもは……。

御符の素性を知ってる者がそんな姿を見れば、未練がましく御符を眺めながら、やけで酒をあおっていると取られかね無い行為である。

他人に見られることはやはりみつとも無い話ではあったので、人の気配が有ったりすればそれなりに誤魔化す手立てを講じていたのだが、今回は風小に強烈な不意打ちを喰らった為に何の手だても講じられず、すっかり開き直っていると云ったありさまだった。

「なつかしいデスねえ！」

風小がはしゃぐように言った。

「懐かしい？」

その言葉が風小の口について出てくるのは非常に違和感の有ることだった。

もとより、広く『使えない』と知れ渡った御符である。さらにその製作手順の複雑極まりなさも手伝って、よほどの物好きが気まぐれにしか作らない……。そんな程度しか世に回らないはずの御符を『珍しい』では無く、『懐かしい』とはつまり……。

「ええ、ええ……」

しみじみと頷きながら風小が続けた。

「私が姫さまとお逢いしたばかりの頃に、一度だけ姫さまがお使いになったことがありますデスよ……」

「使った!？」

レンレンが、驚愕の面持ちで跳ねるように椅子から立ち上がるのを見て、風小は「あっ!」と小さく叫び、両手で口を塞いだ。

すぐにすべて手遅れであったことを悟りはしたが、それでも何とか抵抗するかのように、ガツチリ口を塞いだまま、瞬きと微笑みが消え失せた瞳を潤ませて、小さく何度も首を横に振った。

「使ったって言ったわよね!今!」

じりじりとレンレンが風小に詰め寄って行き、同じスピードで風小が後退って行く……。トンッと風小の肩が部屋の壁にぶつかった。後がない……。

「あー……っつっつ!」

風小は自ら口を塞いでいた手を外し、あらぬ方向を向くと突然叫んだ。

「あー!勘違いデスよ!ものすっげえ勘違いデス!よく見たら違う御符でしたデスよ、もう、似てもにつかない全くの赤の他人違いデスよ!」

「あなた……、さっきあの御符を『雷神の御符』だって言ってたわよん……」

風小のすべてが、彫像の様に固まった。

「どういう事よ……?使った?姫緒が御符を覚醒させたと言っこと?」

あり得ない、そんなことはあってはならない。もし、もしもあつ

たとしたら……。

そんなことが……、そんなことは……。『ゆるせない！』

「教えてあげましょうか？……」

唐突にレンレンの耳元で囁き声が出た。聞き覚えのある女性の声。間違えるはずもない……。 (胸が早鐘のように高く鳴り響き出す)

その声の主は……。 (熱い血液と共に焦燥が遡上する) 姫緒！

「教えてあげましょうか？ネモ・レンレン……。『雷神の御符』の使い方……」

信じられない囁きの内容を意識が認識できず、思考が真っ白になる。

振り向くことも出来ずに囁きに耳を傾け、続きを期待している情けない自分に怒りがこみ上げる。

「オシエテアゲル……」

熱い吐息のような囁き……。

「私で無ければ駄目……。よ」

その、人を食ったような姫緒の言葉にかつとなり、おもむろにレンレンが振り向いた先には、息づかいが感じられる程近くに立ち、意地の悪い微笑みを浮かべた姫緒が立っていた。

気づいた時には部屋を飛び出していた。

正気に戻った時には、85マイル(約160キロ)までしかないコルベットのスピードメーターはとっくに振り切れていた。

ふと、足下に目を落とすと、そこにハリガネの姿はもう無かった。今、いなくなったものなのか……。それとも随分前からそうだったのか……。

一度だけぐるりと辺りを見回してみる。

ハリガネは本当に夜に溶けてしまったのではないか……。

そんな風に思えるほど、夜はまったく無関心な表情を見せ、波の音は、まるで時間がその先に進む事を忘れてしまったかのように、

高く低くの繰り返しをただ続けてる……。

いつまでも……。いつまでも？

「……やーん！」

悠久であるかと思われたその閉じた空間が、小さな声で時の移りを取り戻した。

「……え……やーん！」

段々と足早に近づいてくるその声は、一瞬、猫の鳴き声かと思えたが、じつは、何者かを呼んでいる子供の声のようだと気づくと、レンレンは声から逃れるようにそのままゆっくりと歩き出していた。今のこの、時間の消えた空間は、彼女にとって非常に居心地が良く……。邪魔をされるにはあまりに忍びないものに思われた。

声が止んだ……。

ややあつて、レンレンもゆっくりと歩みを止める。

と、その時、突然彼女の目の前に、小さな人影が躍り出た。

「ねえちゃん！待ってッてバ！」

利発そうな顔をした、小学生くらいの日焼けした少年が、まっすぐな視線でレンレンを見上げている。少年の、サラサラとしたショートヘアの先が、汗で額に張り付いていた。

「ホントだ！すぐ解ったよ！海賊みたいな眼帯付けた真っ白な服を着た女の人だッて言ッてたから！」

少年の言葉に、レンレンが訝しげな視線を向ける。

「オレ、深山歩夢<sup>みやまあゆむ</sup>！」

歩夢と名乗った少年は、今度はぺこりと小さくお辞儀をして続けた。

「今日は、うちのハリガネを助けて下さッてありがッとう御座いました！」

そう言われてレンレンは、昼間の海の家での女将の言葉を思い出していた。

ハリガネの飼い主……。たしか深山と言ッていた……。

「ああ……」

合点がいったというように短くそう言うと、浜風に乱れた髪を整えながら、またゆっくりと歩き出す。

「助けてなんていないわよん……。少しばかり付き合ってもらったけどねん……」

昼間の事を、女将にでも聞いてやって来たと言ったところか？しかし、少しばかり誤解があるらしい。自分はハリガネを『助けた』覚えはなかった。

「うっうん！助かったって！大して威力は無かったんだけど、しつこく蹴られたから……」

「？」

「体中が痛くて、家まで帰るのがしんどいなあって思ってたら、病院から海岸まで連れてきて貰ったから、山道を歩かずに済んで随分楽だったって！」

「！」

めまいに似た感覚がレンレンを襲う……。目の前の少年は何を言っているのだろうか？いや……。何を『知っている』のだろうか？！

病院の駐車場跡での『あの』出来事……。しかし、それはレンレンしか知りえない事のはずだった！いや、正確には、もう一匹……。嫌な奴だね、生川・ルークって！ボク、キライになっちゃったよ！」

間違いない！この少年……。歩夢は……。知っている……。「キミ……。その話何処で……」

「ばあちゃんが、お礼をしたいから連れて来いって言うんだ！」

そう言うと、歩夢はレンレンの右手を両手で掴み引っ張り出す……。屈託無く……。あまりにも無邪気で、あまりにも真っ直ぐな歩夢の表情が、今のレンレンには、かえって不気味に感じられた。レンレンを引く少年の手に、徐々に力が込められていく。

（怖じ気づいている？私が？）

もちろん、そんなことがあるはずが無かった。

「おもしろそうねえ……」

不敵に微笑んでそう呟くと、急かされるままに歩を進め出す。

歩夢は、レンレンが自分の誘いに応えたことを感じ取ると、掴んでいた手を離し、先に立って道先案内を始めた。レンレンの歩調に負けないように、前を向いて、一心に早歩きをしていた歩夢が、ふと……。レンレンの方を振り向く。

月影の中を……。真珠の輝きを放つチャイナドレスに身を包みながら……。隻眼の娘はゆっくりと歩夢に近づいて来る。

「ねえちゃん、名前は？」

「ネモ（誰でもないの意）……」

戸惑いもなくそう言って、レンレンは大きく一つ瞬いた。

## ACT 5 来れ！符術師様！

二人は海岸から離れ、山沿いの道を歩いていた。

辺りは外灯もなく、歩夢とレンレンの道行きを唯一照らすのは、頼りなげな月の蒼い光のみ……。

早足で先を進む歩夢が、時折、後ろのレンレンを気遣うように振り向いては、またひらりと前に向き直る。

儂げな冷たい月光の中、小さく踊るように行く先を誘う歩夢について行きながら、レンレンは、まるで自分が性悪な妖精バックに誑たぶらかかされて今まさにお伽の森へと誘われようとしている愚かな犠牲者の姿に重なり見えて、小さく苦笑した。

「シエークスピアでも気取るうかしらん……」

さもあらば、その先に待ち受ける結末は極上の『喜劇』か『悲劇』か……。

再び苦笑する。

やがて、気がつけば潮騒は遠退き、代わって、カエル達の合唱の中に二人は浮いていた……。そのまま……山裾の方へと誘うように伸びる道筋に従い、山陰に近づいていくと、黒い山肌で蠢くようにゆっくりと風にざわめく木々の間を、時を遺失したセミの悲しげな鳴き声が孤独に渡って行く……。月はすっかりその姿を山影に隠してしまい。最早、歩夢とレンレンの姿をこの世界に浮き上がらせるものは何もなくなった。

闇の中での歩夢とレンレンは、砂利道を小走りにかけて行く小さな足音と、ゆっくりとそれに従いついて行く、無礼なまでに無防備な気配のみの存在だった……。

そのシュチエーションはレンレンにとって、少しばかり気に入っただものであったのだが、近づく山裾に浮かび上がった民家の灯りで、その世界は呆気なく終焉を迎える……。

歩夢の走る速度が上がった。

多分、全力のそれに近いであろう速度で、彼は真直ぐに、生垣で囲まれた一軒の敷地に向かっていく。

「ねえちゃん！こっちこっちだ！」

そう言いながら歩夢は、広い敷地を囲む生垣の切れ間の前で止まり、レンレンの方を振り向いて手を振った。

急ぐことは無く……。と言つて、歩夢を待たせることもせずに、レンレンは彼に追いついて脇に並ぶ。

生け垣に囲まれた広い敷地の奥に、今時には珍しい茅葺き平屋建ての純和風な旧家がひっそりと建っているのが見える……。縁側に沿つてはめ込まれ、所々が開け放たれた障子戸が、家の灯りで灯籠のようにぼんやりと浮かび上がっていた。

庭は広く、そのため、暗くて細かいところまでは確認できないが、ごちゃごちゃと庭木が植えてある風ではなく、大半が剥き出しの土場のままで、現在一般的になった『庭』の概念とは違う、農業の作業場として実用的に確保された場であると想像が出来た。

「ここが、オレン家だよ！さっ！行こ！ねえちゃん！」

「嫌……」

「え？」

突然のレンレンの拒否。驚いたように歩夢が彼女の顔をのぞき込む。

「……『ねえちゃん』言うな……。品がないから嫌！」

歩夢は、レンレンが家に入ることを拒否している訳では無いと知ると、瞬間、ホツとしたような顔をしたが、すぐにまた困惑で顔を曇らせた。

「えー？じゃあ、ネモさん？」

「『ネモ』に『さん』を付けるのNG。おかしいわよん」

「??????」

「私は『ネモ』……。ネモに『さん』はいらないのよん」

歩夢の表情が輝く。

「うん！判った！じゃ、ネモ！行こう！ばあちゃん待ってるから！」

そう言つと、歩夢は再びかけ出した。

大きな納屋の脇を抜けて玄関までの距離を一気に走りきり、引き戸を開けて中に入ろうとして……、ためらうように振り返った。そして、少し遅れて自分の方へ向かつてくるレンレンを認めると安心したように向き直り、家に飛び込んで目の前の広い土間に響き渡る大声を張り上げる。

「ばあちゃん！キタよおー！」

レンレンが土間に足を踏み入れたちようどその時、一段高くなつた居間の奥から、白髪混じりの髪を波形にちぢらせた、小柄な老婆がにこにここと現れた。

「はい、はい……」

そう言いながらゆっくりと土間に降りた老婆は、腰が少し曲がっているせいもあり、歩夢の身長よりほんの少し低く見える。

「今日はうちのハリガネが、偉くお世話になつたそうで……」

老婆は深い深いシワシワの顔でにっこりと笑い、深々と頭を下げた。

「世話をしたつもりも無いし、下心が有るわけでもないわん……」。

なんか、色々と面白そうだからついて来たのよん」

レンレンはそう言つと腕を組み、その場に仁王立ちした。

「ネモつて言うんだよ！ただのネモ！『さん』は付けちゃいけないんだって！」

「そうかい……。そんなお国柄も有るかも知れないねえ」

はしゃぐような歩夢の言葉を、小さく何度も頷きながら聞いていた老婆が静かに微笑む。

「さあさあ……。どうぞお上がんなさい。たいしたお構いも出来んがねえ……」

老婆はそう言つと、敷居の下から土間に張り出した板敷に難儀そうに上がり、そのまま家の奥へとゆっくり歩いて行く……。

老婆の後を、歩夢に急かされるように居間に通されたレンレンは、大きな古めかしい柱時計と、年季の入つた筆筒以外は、そこが意外

に普通の畳部屋だった事に少し驚いた。

高い合掌造りの天井に、黒く輝く太い梁……。板張りの囲炉裏部屋でも現れるかと思うほど、この日本家屋は趣のある作りをしていたのだ。しかし、趣の当ては外れたにせよ、レンレンの居るこの空間は、開け放たれた襖や障子戸から、まるで夏を感じさせない心地よい風が入り込んでは何処かへと抜けて行き、風が運んで来た筈の湿気は、障子や畳、柱や茅葺に至るまでの家全体が、まるで深く呼吸をするかのようにして中和する……。まさに、風土が生んだ人のための住居。土地にあるべき形を取れば、住むと言う事は、こんなにも快適なものになるのだと、レンレンは妙に開心していた。

7、8人はもてなせると思われる木目柄の大きなテーブルは、短く太い足のしつかりとした造りで、そこにあぐらを組んで座るレンレンの前に、奥にある台所の老婆に指示されているらしい歩夢が、次々に大柄な鉢に盛られた田舎料理を運んで来ては配膳していく。茹でたトウモロコシや枝豆、真っ赤なトマトやみずみずしいキュウリ、魚や野菜の煮物の類や干物の類……。その数は、あつという間にテーブルの半分を埋めてしまった。

しばらくすると……。もてなしの準備が調ったらしく、部屋の入りに口で老婆と歩夢が二人で現れる。

「ネモさんはお酒は嗜たしなみなさるのかね？」

老婆がそう言うのと、間髪いれず歩夢が「ネモに『さん』をつけちゃダメだよ！」と叱る。

老婆はそんな歩夢に「そんなお国柄もあるかもしれないねえ」といって、また微笑んだ。

「むしろ、『お酒だけ』でもいいくらいに『嗜む』わん」

悪びれる様子もなくレンレンがそう言うのと、老婆は小さく頷きながら、歩夢の方に向きなおる。

「お祭り用のお酒が届いてたろう……。納屋に行って一本持って来ておくれ」

「うん！」

答えるが早いか、歩夢が飛び出す。

レンレンと老婆の視界からあつという間に消えると、それを見計らったように、老婆が話し始めた。

「今、この家には私と孫と私の息子……。あれの父親じゃが……。三人で暮らしておる。」

「母親は？」

「あれの母親は産後の肥立ちひたが悪くて孫を生んですぐ亡くなった……。なかなか働き者の良い嫁じゃったが……。」

老婆は、小さく吐息をついて続けた。

「息子も長距離トラックの運転手をしておるで、月に数日しか家におらん。普段はあまり酒の買い置きはしないのじゃが、近々に『ものわけさん』……。裏山の神社でお祭りでな……。それ用の物が運良く今朝方届いておった。」

「ねえ……。ひとつ質問……。」

そんな会話など全く興味がないと言った風で、レンレンが長くなりそうな老婆の話の腰を折った。

「はい、はい。」

老婆は気軽に返事をしながらレンレンの脇に正座し、屈託のない笑顔を彼女に向けた。

「どうして、私があんたの家の猫を助けたって知ってるの？」

「孫が言うとりました。あれは、ウソを言う子ではありませんからな。会話が途切れる。老婆はただニコニコと微笑んでいた。

「じゃあ、もう一つ質問……。あんたの孫は猫と話が出るの？」

「猫と話が出るか？ですと……？」

老婆は、質問に質問で尋ね返すと、しげしげとレンレンの顔をのぞき込んだ。

「何よん……。」

レンレンが顔色一つ変えずに老婆を見返す。

「答えることは容易いが、信じる事は難しいじゃろう。」

「申し訳ないけど……。」

老婆の言葉にレンレンが得意げな微笑みを浮かべる。

「信じられないモノなんて何も無いほど、ハンパ無い人生送ってるわよん。私は……」

「いやいや……」

老婆が小さく首を振った。

「ちゃんと察してもらわんと、町の為にもならん」

「？」

「おまえ様、今日はこれからどうなさる？お帰りになるのか、それともどこか宿を取りなさっているのか？」

何か妙な具合ではあったが、レンレンに戸惑いは無かった。

「期間無期限の、端っから当てのない旅よん」

「いや……。どちらかと言えば家出に近い。」

「よかつたら、祭りまでうちに泊まりなさらんか？孫も喜ぶじやろう……。なかなか華やかな祭りじゃぞ。花火も上がる……。それに……」

善人爛漫な表情をレンレンに向ける。

「そのうちに『答え』を見つけれられるかもしれん……」

「町の為にならないって言ったわね……」

胡散臭げにレンレンが鼻を鳴らすと続けた。

「つまり、町中で共有する秘密が有ると言うこと？」

「秘密なぞありやせん。むしろ知った方が町のためにも、おまえ様の為にもいいじゃろう……。ただ、悟るにはなかなか難しいと言っ事じゃ」

老婆が静かに微笑む。

「婆さん……。私を怒らせない方がいいわよん……」

そう言っつて、レンレンが右目のアイパッチに手を掛けようとしたちょうどその時。表の引き戸が開く音がして、ほどなく、廊下を駆ける小さな足音が近づいてくるのが聞こえた。

「持っつて来たぞ！」

元気な声と共に、日本酒の一升瓶を抱えた歩夢が居間に飛び込ん



「いらつしやいませ、符術師様……ようこそ……『竜宮町』へ」  
老婆がそう言つて正座したまま深々と頭を下げると、歩夢は晴れ  
晴れとした顔でレンレンに『海亀』の瓶を差し出したのだった。

翌日……。

朝とは名ばかりの、まだ日も昇らぬ闇の領有する刻<sup>しかん</sup>。冷え冷えと  
した朝霧が、闇での視界をさらに深く遮る幽暗の世界。微かに、潮  
の香りがただよう空気の中に……申し訳程度の舗装がされた山腹へ  
と続く道が、ぼんやりと浮かび上がる……。昨日、ハリガネを乗せ  
て、病院の廃墟からコルベットで海岸へと降りてきたその道を、極  
上の趣向だとも言うような表情で、散策するように登つて行くレ  
ンレンの姿があった。

彼女はつい今しがた、畳に直敷きと言う、寝慣れない敷き布団の  
寢床から這い出し、他の部屋で眠っているであろう、歩夢や老婆に  
気配を気取られる事も無く深山の家を抜け出すと、あの病院の廃墟  
へと向かつて歩いていった。

この名も知らぬ山は、奇しくも、位置的には歩夢の家の『裏側』  
に当たり、昨日、老婆の言つていた、近々祭りがあると言う神社が  
ある『裏山』であろうと見当が付いた。

もし、これが、因縁であると言つのなら、必ずや、其処に何らか  
の結果が生じるはずだろう。と、言うより……。

行きがかり上とは言え、あの場で啖呵をきつてしまった以上は、  
後へ引く事はプライドが許さず、何としても自分の力で結果を見出  
さなければ気が済まない……。そんな意地っ張りがレンレンを支配  
していた。

そう、彼女は意地になつていた……。なつてはいたのだが……。

ふと、冷静に自分の手の内の『駒』を探ってみれば……。浜茶屋  
の女将が言つていた『祟り』と、ハリガネの『あの行動』が、『病  
院の廃墟』と言う共通項で括られる『かもしれない』と言う事ぐら  
い……。

つまり、『病院の廃墟』のある『裏山』……、そこに因縁があるはずだと言うレンレンの推理は、あって欲しいと言う半ば強引な彼女の願いでもあった。

それに、もし、そこに糸口が存在するならば、ことのほか好都合なことに、祟り云々の話は自分にとつての専門分野である。

その祟りが偽りとしても何らかの手がかりを……。真実であれば、なおの事……。

「まあ、火の無いところに煙無しって言うしねー」

今ひとつ頼りない、自らの不甲斐なさを愚痴るようにそう言うと、気を取り直すように伸びをした……。

所詮は退屈しのぎ……。いや……。昨日の朝、唐突に我が身を襲った晴天の霹靂とも言つべき不幸な事件の気を紛らわすための、インターバルトレーニング。

そう、所詮は……。遊びよ……。遊びよ……。遊びよ……。

自分に言い聞かせるようにそう言うと、思い出しそうになった屈辱を振り払うように首を振り、再び軽い足取りで歩き出していた。

間も無くして……。東の空がゆっくりとしらみ出すのが感じられると、空間は色を取り戻し始め、闇の中では視界と空間を冷たく覆っていただけの存在だった霧は、その姿を濃いミルク色へと変化させる。すると唐突に……。レンレンの前方に広がる霧の紛れまぎれの中で、いままで目視出来なかった病院の廃墟が、影となって浮かび上がった。

「意外と近かったのねえ」

レンレンは、山道を先へと進みながら、浮かび上がってくる病院の影が、徐々に大きくなるのを愉しんでいた。廃墟は、霧の間から不明瞭ながらも徐々にその姿の細かい部分を、彼女の前に現し始め、やがて、建物の建つ敷地の前でレンレンは歩みを止める。

白んでいた空に朝日が顔を覗かせて、物の影を濃く落とし始めると、静まりかえっていた空間に、待っていたかのような鳥たちのさ

えずりが溢れ出した……。

息づこうとしている周りの雰囲気とは対照的に、廃墟は、ますます不気味な静寂を纏いながら敷地の中に浮かび上がる。

建物の壁一面は、数々の種類の蔦達つたが毒々しいまでの勢いで、本来の地肌が露出する隙もないほど覆い尽くし、周りには、人の背丈ほどの雑草が、来るものの侵入を拒むかのように生い茂る。

その一面を覆い尽くす雑草の蒼い群を大雑把に刈り取って作った、病院へ導くように続く一本の道が、灰色に浮かび上がるのが見えた。昨日のあの連中が、簡易的に作った建物への進入路だった。

自分を厄介やくがいごとに巻き込むきつかけをくれた連中の作ったものを使う事は癪やくに障ったが、この道を使わなければ、夜露を湛えた草の壁を掻き分けて進んで行く以外に無いのは明白だった。

「謹んで使つてあげる……。感謝しなさいよん」

負け惜しみではなく、言葉どおりの気持ちで、レンレンは刈り痕へ足を踏み入れた。

廃墟のすぐ近くまで近づいてみると、建物は遠目に見た印象よりも蔦に覆われてはおらず、かなりの部分が建物の姿を露出している。壁にはひびや染みがそこかしこに浮かび上がり、外壁が崩れている場所もあった。

窓にはめ込まれていたであろうガラスは、すべて割れてしまったらしく、あるべき場所にはかけらすら残ってはいない。だが、その壁に残された窓枠の位置と形態から、建物が3階建てであるらしいことが判った。

レンレンは、道の終点……。建物の正面玄関にたどり着くと立ち止まり、あたりに視線を巡らせる。

黄色と黒のまだら柄のちぎれたビニールロープ、折れた木の板や鉄パイプ……。侵入者を拒む障害物として細工されたものの、ことごとく突破されてしまったのである。物の残骸がまわりに散乱する中……。廃墟の玄関はまるで、山腹にぽっかりあいた洞窟のように、

来訪者を飲み込もうとでもするかのように空虚で大きな空間を晒し、存在していた

物怖じせずに、彼女が建物の中に踏み込むと、カビの激しい刺激臭が鼻を突く……。

建物の中は薄暗く、まず現れた受付と待合室のなれの果てであるう、がらんと広いその空間は、特に乱雑に小物が散らかっていることは無かったが、あちこちの壁に描かれた、缶スプレーによる、アーティスト気取りの稚拙な落書きと、節操なく厚く降り積もった埃に先客達が残した、たくさんの秩序無く乱雑な足跡が、真っ白い床一面にくつきりと浮かび上がり、なんとも幻覚的な空間を醸し出していた。だが、それだけではなかった。

視覚的な物から来る精神への影響とは違う……。言いようのない不安……。そして、肉体にまで影響を及ぼす嫌悪感。

「何？これ？」

得体の知れない不快感に思わず顔をしかめる。

これだけの嫌な気が漂っているのに、殺気のような物は一切無い。あやかしゃ、霊障と言ったものとは違う……。何か非常に嫌な物が満ちているのを感じる。

「霊鑑の符」

そう言って、レンレンが人差し指を立てると、その指先に、『鏡』と言つ異体文字が黒く筆描きされた、真っ赤な短冊形の御符が現れる。

「探り知し霊解ノ鏡……」

霊鑑の御符は霊的な波動の強弱に反応する御符だった。

他のエネルギーがそうであるように、霊的な力も、その発生源である霊本体に近づけば場に与えている影響は強くなる。発生源からの距離による威力の差による霊的力の波を退魔師達は『波動』と呼んでいた。そして、この波動に反応して反射したり、遮ったりする結界を『鏡』と見立てた。

霊鑑の御符は、その外見に描かれた『鏡』の文字による結界を波

動に反応させて、その霊力の強さと方向を調査するための探知機のような役割をする物だった。

人差し指の先に浮いた御符は、波動が場に与えている威力の強弱によって、指先を軸のようにして、風を受けた風車のようにクルクルと回り出す、はずだった……。

「？」

霊鑑の御符は、張り付いたように、ぴくりともしない。

「流れが無い……？」

では、ここにはその力が存在しないのか？

ソレハチガウ……。

この場には、人の精神にまで影響するほどの何かが満ちている。

それは、今、自分が身をもって体験している。と言うより、御符は場の異常に反応するわけではない、波動の強弱に反応するのだ。何の力の影響も受けない場など、存在することを聞いたことがない。

「キエロ」

レンレンの言葉に反応するように、指先の御符が黒い炎に変わって、消滅した。

「うーん……。意外と手強いわねえん……」

そう言いながらアイパッチを外す……。そこに現れたのは、狂気を孕んだガラスの虹彩。瞳は色を失い、おびただしい血流がはつきりと見て取れ、まるで、それ自体が己の意思を持つように脈打っている。壊れた瞳……。人がこの世で見えてはいけない物を見て解く能力をもち、人の精神を犯し、凌ずる力を持つ邪眼であった。

脈打つ瞳に応じるように、狂気の瞳孔がギリギリと収縮を繰り返して、レンレンの前に忌み忌みし世界の片鱗を開示する。建物の外に漂う霧よりも、まだ色濃く彼女の目前に漂うサイケな様式は、人に見えてはならない狂気の波紋……。

「これってえ……」

そこに漂う『嫌な物』の正体……。それは、霊などの超自然的な力とは違う……。サイコダイバーとして人の心を探る能力をもつレ

ンレンにとっては、もっと身近な感覚の波紋……。

「これえ、このパターンは『恐怖の抽象』……。よねえ……。」

そこに渦巻いていた物は……。喜怒哀楽のような人の感情の一つ、『恐怖』の感情……。

いや、その表現は正しくない……。

渦巻いていたのでは無い……。

その場には、恐怖が禍々しく充満していた！

見てはいけない波紋を見る代償として、邪眼は、レンレンの精神に錯乱、分裂を誘い起こそうと容赦なく負担を強いて来たが、軽い立ちくらみを覚えながらも彼女は構わず、スイとまわりに首を巡らす。

微かではあるが異様な邪念を感じた。レンレンがその方向に進んでいくと、目の前の壁に貼られた御符が見えた。見たこともない御符……。

おどろおどろしげな幾何学文様と、梵字のような標記がしてはあがるが、レンレンの知るあらゆる御符の知識に照らし合わせても、その記述には何の意味も法則も見いだせなかった。

だが……。その御符からは人の凄まじい執念が感じられた。

狂気にも似たナルシズム、吐き気がするほどの自己顕示、欺瞞に満ちた過去の記憶、金への汚れた執着、間違った性欲、根拠のない名誉欲……。

別の邪念を感じた……。

さらに建物の奥へと進んで行くと、右手の薄汚れた壁にまた、別の御符……。

先ほど見つけた御符とは違う手法と模様そして文字、の御符……。別人の作であることは明らかで疑う余地が無い。そして、当然のようにこの御符にも何の意味も無かった。先ほどの御符に込められた念おもいに似た人の念が感じられる……。ただ、この御符には自己への欺瞞が強く感じられた。

「それぞれの御符を作った人の『個性』ってこと？ここまで行くと

冗談も悪質ねえ……。大概にしてほしいわん」

書き込まれた模様や文字が、御符を創った者達の個人の思い入れの象徴となり、強い念となる……。そして、そういう物がすんなり刷り込まれてしまうほど、呆れるくらいにこの御符達には何の符術的意味も無いのだった。

やがてレンレンは、そんな七夕の短冊のようにわがままな念おもいのもつた御符が、この建物のあちこちに貼り付けられていることに気づいた。

海の家のおばちゃん言葉が思い浮かぶ。

『どこから噂を聞きつけたんだかねえ……。あちこちのテレビ局なんか色々な霊能力者の先生様を連れてたくさん来たよお。多分、有名な先生達は全部来たと思うよお。占いの先生なんかもねえ何人か来たねえ』

そして、この廃墟に訪れた『先生様』達は、自分の念おもいを封じ込めた子供銀行のお札さつのようなこの御符達を、この場のあちこちに残して行ったのだ。

もう一度……。今度は、御符の『念』がお互いに及ぼし合って形成している、場の形態について慎重に霊視の視線を向けてみる。

私欲に執着する怨念にも似た凄まじい製作者達の念が、御符達から発せられ、お互いの御符同士でいがみ合い、呪い合い、誹り合っている……。邪悪な念は霊的な障害となり壁を創り、それらが、本来正常に流れ、波動となるべき霊的な力の流れて行くべき道をねじ曲げていた。そう、正にこの廃墟の中は、あまりに強い『先生様』達の反吐が出そうなくらいどす黒い想念によって、迷路のような境界が張り巡らされた迷宮と成り果てていたのである。

この状態からいって、多分、上の階も……。いや、廃墟全体がそんな状態であることは容易に想像出来る……。だが……。

だが、それにしても、『停滞している』……。全く動かないとはどういう事だろう？

いかに複雑な迷路といえども、必ず出口は在るはずである。出て

行く物があると云うことはそこに流れが……。波動が発生するはずであった。そして、また、廃墟の内部を埋め尽くすほどの『恐怖の感情』は、一体どこから運び込まれた物なのか？

尚も先へ進むレンレンは、ドアが開け放たれた一室の前の廊下に複数の新しい足跡が散りみだれて残っているのが目に止まった。近づいてドアに貼られている薄汚れたプレートを読むと『診察室』と書かれているのが見て取れる。足跡から察する人数、極々最近の時期に付けられたのであろうと思われる状況から判断するに、昨日の『あの連中』の物であることはまず間違いないだろう。

「あのデブチクリンは一体どんな御符を貼ったのかしらねえん」  
少し、興味が湧いた。

軽い好奇心で、ゆっくりと部屋の中に歩み入ろうとしたその時、部屋に充ち満ちた不浄な意識がレンレンの邪眼を襲った！

「うっつっ！」  
眉間を強打されるような衝撃に耐えきれず、身体を仰け反らせて数歩後退する。

「な・に・が……？」  
無意識に右目……邪眼を押さえながら、フラフラと体勢を立て直す、レンレンは再び部屋の内部と向かい立った。

目を庇う形でゆっくりと部屋の中を見渡すと、薄暗い部屋の中に安っぽい事務机と、その近くに薄汚れた白いカバーの掛かった椅子が見え、脇にはガラス戸が開け放たれた、人の背丈ほどの戸棚が置かれているのが見える。

レンレンの立っている場所から正面に見える壁には、まだ新しいと思われる御符が貼り付けられているのが見えた。間違いなく、あの男……。生川・ルークが貼った物だろう。

御符そのものに何らかの呪詛の力が備わったトラップであることが考えられたので、丁寧にの表現を読み解いてみる。

何も無い……。何の力も感じられない、それどころか、他の御符達にあった『それらしさ』を偽装しようとしたらしい努力の跡すら

かけらもない。何の知識もない、全くやる気のない奴が、チラシの裏に落書きするようにして作った……ゴミだ……。

御符を凝視し、ゆっくりと右目を庇っていた手を外していくと、目の前に現れたのは、今までに見たことも無いほどおぞましい、渦巻く思念の波紋だった。

ありとあらゆる欲望がまさに汚物と化して御符から浸みだし、空間を浸食していた。これが、本当に、あの男の……、いや、人間の思念なのだろうか？

信じられなかった。こんな汚らしい思念を持つ生物を……、いや、あやかしゃ、悪霊込みで……、レンレンは見たことが無かった。正直、それだけでも震えが来るほどのショックであったのだが、さらに驚愕することに、その、汚染されたと表現する以外無い空間に、見る者の意識が飛ぶ程の、未知の物を怖がる人の感情……。『恐怖の感情』が、御符からどす黒く湧き出て、今なお、部屋を満たし続けていたのであった。

つまり、この御符が、あの男の『作った』物であるとすれば、御符に何の効果も無い以上、これらはすべて、生川・ルークと言う一個人の人格であり。

ならば、汚物の様な性格を持った、考えられないほどに恐がり人間がこの世に存在しているのだと言うことに他ならなかった。

思わず口を押さえ、嘔吐のように喉を鳴らしながらフラフラと部屋から離れる。

「きもぢわるいいいい……」

呻くようにそう言うと、後ろの壁に寄りかかり、体勢を整えようと力を尽くす。最早、この場所で息をするのも嫌だと言うのが正直なところだったが、わずかばかり残った符術師としての意地がレンレンを次の行動に移させた。

邪眼が虹彩の収縮を繰り返し、辺りを伺う。建物中の壁のあちこちにちりばめられた御符が作り出す結界のお互いの影響を読み合い、道筋を推定してゆく……。

案の定……。非常に高い確率で、この診察室が、以前は迷路の出口になっていただろうとの結果が導き出された。つまり……。あのデブチクリン……。生川・ルークと名乗る、ままごと退魔師は、迷路化した結界の出口に、この上ないほどの腐れ切った自分のエゴを貼り付けて、完全に此処を閉じた空間にしてしまい、そればかりか最上級の術者でも回避不能なぐらいの『呪い』を封じ込めたということなのだ。

「えーと……」

右目にアイパッチをかけながら、レンレンが呟いた。

「こう言うの、なんて言うんだっけ……？」

アイパッチがすっかりと装着された事を確かめた後、何事かを思いついたようにポンと平手を拳で叩く。

「『さわらぬ神に祟りなし』！」

言うが早いか踵を返し、レンレンは、何事も無かったようにすたすたと建物の外へと歩き出していた。

外へ出たレンレンは、草いきれが立ち上り始めた駐車場で大きく2つ深呼吸をする……。

廃墟の内を『汚染』していた、人の感情達は、それ自体なんら力を持っておらず、たまに波長を感じやすい人が、不快な気分になったり、精神に鬱を感じたりする事はあったとしても、人に襲いかかったり、危害を加えたりするものの類では無かった。が、レンレンにはそれが見えてしまう。その事が問題なのだった。情報の収集器官として『目』を使ってはいるが、彼女がそれらを見る場所は、人が普段物を見るシステムとは違った仕組み……。より深く『精神』に近い場所で、イメージとして確認するのだ。そのため、あまりにショックな影響を与え続けられれば、直接精神に負担を強いることになり、即座に精神的<sup>トラウマ</sup>外傷となってしまう。

この廃墟内に造られた迷宮を何とか出来ない訳ではない。しかし、する必要はない。いや、する必要があったとしても、自分がそれを

やらなくてはならない理由がなかった。

ならば、ここはそのままにしておくのが得策という物だろうと言  
うのが彼女の当面の結論だった。

もつとも……。

レンレンは振り向いて、廃墟を煽り見た。

どうしても、この、いまましい結果をかたづけなければ、ゲー  
ムは先に進まないのだとすれば、その時にはすべての片を付けるつ  
もりがあつたし、その自信もあつた。

ただ、それは今で無くてもいい……。

視線を戻し、自嘲の笑いを浮かべて振り返る……。すると……。

いつからそこにいたのか、彼女の足下に美しいロシアンブルーの  
毛並みの猫……。ハリガネの姿があつた。ハリガネはその場にちょ  
こんと座り、神秘的な緑の瞳をレンレンに向けて見上げている。

「なにか御用お？」

小狡微笑みを浮かべてレンレンが呟くと、ハリガネは腰を上げ、  
レンレンがここに来る際に通つて来た、茂みの中に続く道を山道の  
方へとさっさと戻りだしてしまつた。そのまま去ってしまうのかと  
思われたハリガネは、不意に立ち止まって振り向くと、レンレンが  
付いて来ないのを不服そうに……。 「いやあ……。」と切ない声で鳴い  
てそこに停つた。

「勝手な奴う……。キライよん……。」

そう言つと『ベエー』と舌を出して戯けて見せる。

「でも……。」

ゆっくりと一步を踏み出す。

「面白そうだからついてってあげるう！」

太陽は、とうにレンレンの視線より上に昇っていた。草木達は蒼  
々とした輝きを取り戻し、その上を渡る朝風が、藪の末葉を弄ぶ様  
にひるがえす風景が、一人と一匹の周りを取り囲んでいる。

その中を……。

先がレ点形に曲がつたシッポを高々と、まるで、観光ガイドが目

印に使う手旗でも有るかのように掲げながら、軽やかに前を行くハリガネの後ろを、子供のように表情を輝かせ、レンレンはついで行くのだった……。

やがて、山道に出たハリガネは、木々の影が色濃く落ちるその道を、そのまま山頂へと向かって進み始めた。

舗装されていた山道は、病院から遠ざかるにつれ段々と砂利道へと変化していき、遂には獣道と言った方が折り合いの良い様相へとすっかり変わってしまった。

木の根と赤土がむき出しになり、樹木が鬱蒼として日の光を遮る荒道の登り坂を、レンレンは息も乱さず、軽い足取りでハリガネの後について進んで行く。

坂の傾斜は、進むほどに徐々にきつくなり始め、いよいよ人を拒もうとするかの如くになるうかと思われた直後。にわかには視界が開け、足下が平坦な地面を踏みしめた。

そこは、踏み固められた赤土がむき出しになった、四、五十人の人間が溜まれるほどの広さがある広場の様になっていたが、山道は広場に沿って暫く平坦なまま続き、その先は再び急な傾斜を成して上へと伸びているのが見えるので、山頂というわけではないようだった。先に行くハリガネは、山道を外れ、広場の方へと進み出し、その、奥まった場所に作りつけてある、急な石段へと真っ直ぐに向かったかと思うと、そのまま駆け上がっていつてしまった。

レンレンからハリガネは見えなくなっていたが、彼女はすぐに追いかけてよとはせず、階段の下で立ち止まる。

階段のある山腹は、山腹そのものが五段ほどの段々になっており、その段ごとに石段が造り付けられていたために、段の部分が階段の踊り場のような形体になっていた。五箇所を設置された石段は、通して一直線になるようには作りつけられておらず、おのおのの石段が独立した位置に設置され、前後の階段の位置関係は、ちぐはぐにあちこちを向いて上に向かっていたために、下から見上げる風景は、アミダくじの軌道を連想させる奇妙な構造になっている。

あまり、長い階段ではないのだが、傾斜が急なせいで、上に何があるのかを下からは確認することは出来なかった。

昇り口には彼女の背丈ほどの石碑が建っており、何事かの文字が刻まれている。

石碑に近づき、刻まれた文字を読む。

『物ノ脾』

「え？……」

『物の碑』では無い……。『物の脾』……。

「脾は『脾臓』の事？……。じゃあ、ひよつとして『物』って……」

『物』の文字は『牛』の形声と『勿』の音符をもつ。『勿』はその意味に切り刻むとの一説を持ち、よって『物』と言う文字には、切つて神に供える牛の肉……。贅と解する考えがあった。

つまり……。

改めてレンレンが広場を眺め回す……。

平らだと思われた広場の形態は、上り坂と下り坂に挟まれた地形のために起こっていた錯覚に近い感覚で、よく見れば、緩やかにすり鉢状の形を取っていて、中央が低くなっているのが確認できる。

再び石碑に近づき丹念に見回してみる。

石に彫られた『物の脾』の文字の下に僅かに別の文字の頭が見え、この石碑の幾分かが、埋まっているのだと言うことが判った。

「『塚』とか……。『塔』とかの文字と言ったところかしらねえ……」

つまり、このすり鉢状の広場は、昔の形態より埋め立てられた状態で、以前は今よりも深いすり鉢の形状を取っていたと推測する事が出来る。

間違いない……。

「ここ……。屠殺場だったのねえ……」

この広場の上には神の祀られる社のような物が在り、『物の脾』とはそこに供えられるべき供物。生け贅。そして、その生け贅になるべき家畜は、この『広場』で行われる『祭』により屠殺された……。

この空き地の形状がすり鉢状であるのは、その不浄の血がまわりに流れ出ないようにするための工夫であるう。そしてまた、この奇妙な石段も、ここに漂う不浄の『氣』を上にあげない為の細工だと推測できた。

「供養塔……」

レンレンは理解した……。この石碑は、切り刻まれて神に臍物を捧げられた、家畜達の供養塔なのだ。その生け贄が、レンレンの考えるように祭事に使われた物で在るのならば、教派神道とは違う、地元根付いた極々身内の信仰の神社である可能性が高い。もつとも、儀式そのものは、その祭場たるこの広場が埋め立てられた経過から見て、今は廃れてしまっていると考えるのが妥当だろう。

『ものわけさん』

昨夜、老婆の言っていた近々祭りのある神社と言言葉が蘇る。

「ふーん……」

上へと急な角度で続く石段を見上げる。興味が湧いてきた。

「なんか、いい手応えねえん」

子供のような笑みを浮かべ、レンレンは石段をゆっくりと登り出した。

登りきつてみると、目の前に大きく真つ赤な木製の鳥居がそびえ立った。

その鳥居の先には、そこそこ大きな祠（ほら）が立っているのが見える。

これが老婆の言っていた『ものわけさん』か？

祠の周りは綺麗に下草などが刈り取られ、祠そのものも、古い建物ではあったが非常によく手入れがされているのが解り、むしろ古さが趣にすらなっている様相だった。

その祠の前に、常にそのような有様なのか？それとも祭りの装束か？人の丈の倍ほどある三本ののぼりが立っていた。

のぼりの旗の生地は、もともと白い生地だったようだが、今は、長い間使い古されたものらしい貫禄の染み出す、くすんだ色合いに

なっていた。

三本の旗には向かって左より『浪ノ物』『勿』『山ノ物』と大きく記されている。

『浪』が『海』とするならば、『浪ノ物』『山ノ物』とは海や山で採れた産物と読み取れるが……。

違和感を覚える。

通常、海や山の産物に感謝を捧げる記述であれば、『海の幸』『山の幸』と書くものだ。

『幸』の文字は『めぐみ』と読み、これを自然からの恩恵として、自らが土地の神々によって生かされていると言う感謝の意を表明する。それを『物』とは……。

神前に祭るのぼりである以上、これは神とする物へ捧げる記述であるはずである。

「……。この『物』ツて言うのはあつまりい……」

『物の脾』……。『生贄』……。だが、それもおかしい。屠殺場が祭場としてある以上、『命を奪う』と言う行為がその儀式の意義のほずであった。『生贄』とされ、屠殺された『物』……。『山ノ物』ならば熊や鹿、猿でもイノシシでも……。あつたかも知れない……。だが、『浪ノ物』とは？海から生かされてこの場まで持ち込まれ、命を絶たれたものとはなんだろう？何より、もし、そんなものを必要とするならば、この社はもつと海に近い場所に存在すべきではないのか？

真ん中に立つのぼりに目を向けた。

「<sup>なかれ</sup>勿……。これは、<sup>いまし</sup>戒めの事よネん……」

この、のぼりのお互いの位置が何らかの意味を持つとするならば、これは……。

「つまりイ……。真ん中の『戒め』を左右に付き添い『護る』『物』があるってことよねえ……。そんでもって、戒めている『勿』が神様だとすればあ……。護衛するものをわざわざ『物』としている理由は一つだわネん」

『物』の文字は、形のある物体をはじめとして、存在の感知できる対象。また、対象を特定の言葉で指し示さず漠然ととらえて表現する際にも用いられるものであり、仏・神・鬼・魂など、靈妙な作用をもたらす存在、妖怪、邪神などもこれに当る。

『物の怪』<sup>もののけ</sup>、『物怪』<sup>もつけ</sup>などの日本語からもその片鱗を伺い知ることが出来よう。よつて、人を『者』それ以外は『物』と標記されるのが本来なのである。

ならば、ここで言われる『物』とは……。

「ヒトデナイモノってことになるのかしらん？」

改めて回りを見回してみる。ハリガネの姿は無かった。

「ほんとに勝手な奴ねえ……」

考えを整理してみる。ひとつの仮説が浮かび上がる。

要するに、ここは『靈場』なのだ。

屠殺場で、生贄による祭りをを行い、不浄はすり鉢形の地形と奇妙な石段の結界でそこへ封じ込め、靈力を受けた「物」達が、その力をこの靈場に運び込んで祈祷なりを執り行う……。『勿』……つまり信仰を『物』が護ると言う様子から見て察するに、ここで言うところの『物』とは巫女のようなもので、一般の『者』と区別するために自らを『物』、『ヒトデナイモノ』と名乗ったのではなかるうか……。

「巫女の祈祷でネコがしゃべれるようになるってオチ？」

それでも構わなかったが、それではつまらなかった。

大体、この靈場はいかほどのご利益を持っているというのか。

「靈鑑の御符」

レンレンの立てた人差し指の先に赤い靈鑑の御符が現れる。

「探り知し靈解ノ鏡……」

途端、靈鑑の御符が物凄いスピードで回り出した！ギョツとしたレンレンが態勢を整える間も無く、御符は数秒で波動の威力に耐え切れず、火の粉になって消滅してしまった。

計り知れない台風のようなエネルギーが靈場に集中し、何処かへ

流れて行く。生贄の儀式が廃れた以上、この霊場は形だけのものになってしまっているハズだった。

いや、過去の祭りによって蓄積された霊力が、残留しているといふことはあるかも知れなかったが、いくら強い霊力でも、波動……力の流れとして存在するにはその力を活性化させる何かが必要であり、この場所においては、その手段こそが、生贄だったはずなのだ。いや、レンレンはそう思っていた。

「私の読みが違ったと言うことなの……？もしくは……」

信仰が廃れて生贄を止めたのではなく、何らかの、もっと優れた方法が見つかったので手段を変えた……。と、考えた方が、今のこの現状を説明するには都合がよさそうだ。

この霊場は現在も生きていたのだ！

どんな理由があるにしろ、この期を逃す手は無いと思った。

此処ならば出来るかもしれない。

レンレンの脳裏に、姫緒の姿が思い浮かぶ。

風小の言葉を信じるならば、（そして、それは信じざるおえない事実であろうが）姫緒は、自分が使うことが出来なかった雷神の御符を発動させることが出来たと言う……。

符術においては、技術的にも、知識でも、レンレンは姫緒に勝っているはずだった。その姫緒が使えて、自分が使えない理由があるとなれば、それは御符使いとしての資質よりも、もっと別な要因と考えるのが妥当だろう。その際にまず、考えられるのは……。

そんなことを考えるだけで屈辱なのだが……。

御符を発動させる際の力……霊的な精神力の不足……。

認めたくは無かったが、可能性として完全に否定する事は出来ない。否定するには消去法以外に方法は無いだろう……。つまり……。やってみると言う事。

姫緒と自分との力の差は、さほどにあるとはレンレンには思えなかった。この霊場の力を借りて、雷神の御符が応えれば力不足を認め、後、『ほんのちよつと』の姫緒との力の差を埋めるように努力

すればいいし、雷神の御符が応えようとしないのなら、また違う理由を考えればいい……。

「そ、そうよ！そう言うことよん！」

レンレンは、自分を奮い立たせるようにそう言うと、祠と向かい合い仁王立ちする。

静かに目を閉じ、瞑想し、場の気を探る……。靈鑑の御符を秒殺した、あの波動が渦巻く姿を肌で感じた。信じられないくらいの大きな力だった……。大きな波動が、何処から流れ込み、何処かへ流れて行く。この霊場は確かに今も生きていた。ここは大河のような波動の終着駅であり、始発駅なのだ……。

「ちよつと力を貸してちょうだい……」

波動に自分の波長をあわせて行く……。そうして、レンレンは波動を取り込み、自分の力へと練り上げていった。やがて、霊場の波動と一体となるまでに同調すると、それを完全に制御した。

「雷神の御符！」

祠とレンレンの中間に、短冊形の雷神の御符が静かに出現する。

「ソノチカラ！我が前ニ示セ！」

叫びと同時に、一気に練りこんだ波動を御符にぶつける。御符は波動を受け入れず、波動の流れを巨大な渦の流れに変えていく！渦巻く波動は大気を押しつぶし、ねじ切り、猛烈な旋風となって悲鳴のような音を上げた！三本ののぼりはぴしぴしと言う乾いた音を立てて暴れるようにはたたき、辺りに落ちていた小枝や小石は命を与えられたように舞い上がり、レンレンと祠に容赦なく叩きつける！

「こんにやるー！ ¥ー！！！」

レンレンがアイパッチに手を掛けて……。躊躇した。

もし、ここでこの奥の手を使い……。もし、それでも雷神の御符が応えなかつたら……！！

背筋に冷たいものが走った。

ゆっくりとアイパッチにかかった手をおろし、制御していた波動を開放する……。

喧騒が嘘のように消えた空間に、蝉の声が沸き起こった。雷神の御符が何事も無かったかのように宙に張り付いている。御符に近づき、浮かんでいる雷神の御符を取り上げるように空間から引っ剥がすと、御符はレンレンの手の中で音も無く黒い炎に変わって消滅した。

祠に近づき、階段に腰をおろし……。ぼんやりと赤い鳥居を眺める。

とりあえずは、これでよかった。これで、御符を発動させる際の力が足りないのではないのはハッキリした。それどころか、これだけ大きな力をもつてしても受け入れてもくれない。

原因は別にあるのだ。そう、これでよかったのだ……。

ふと、一つの思いが過ぎった……。

『あの時……。アイパッチを外していたらどうなったのだろう……。』

何故、力を使うことを躊躇したのか……。答えはわかっていた……。

レンレンは自分の邪眼の能力が天性のものであることを理解していた……。

知識の集積で組み上げられた物でもなければ、努力とか、訓練とかで習得した物でもない。己の力ではあるが、自分では生み出すことの出来ない力……。

いずれ……。

消滅してしまうかもしれない不安定な力……。

もし、この力が誰かに負けることがあれば、彼女はさらなる力を得る事は出来ない。

勝てないレンレンには存在の意義はないのだ。

負けるわけにはいかない！

敗北は彼女の死を意味する。

自分は、役立たずになってしまおうから……。

あの時……。

邪眼の力を解放し、それでも雷神の御符が応えなかったとしたら……。レンレンは姫緒に敗北する事を知っていた。それはすなわち……。  
心が消えて無くなるような、例えようの無い心細さに飲み込まれそうになった時。人の気配を感じて身構えた。

「居た、いた！」

階段を駆け上がり、鳥居の下に現れたのは白いTシャツと緑の半ズボン姿の歩夢だった。

「ネモ！おはよう！」

「あら……」

レンレンは立ち上がりながら言葉を続ける。

「なにか御用あ？」

いつものように小狡い笑みを浮かべようとしたが、心なしか引きつってしまつ。

「何してたの？」

「観光よん……。ガイドさんに置いてけぼりにされちゃったの……。……」  
あながち嘘ではない。

「町の案内なら俺がしてやるよ！ばあちゃんもそうしてやれってさ！」

「そう？じゃ、お願いしようかしらん」

少なくとも、ネコよりは言葉が通じる分だけマシだろう。

「ここは『ものわけさん』！もうすぐお祭りがあるんだ！出店なんかは海岸の方に出るんだけど、この下の広場で、相撲大会や、餅つきがあるよ！境内で太鼓なんかもやるし！」

「ふーん」

相撲や、餅つき、太鼓……。いずれも奉納の意味があるものではあるが、それしきの儀式が『生贄』の儀式に変わって、ここに溢れるような靈力を生み出すとは到底思えない。

祭りは形式的なもので、やはり何か……。別の神事によってこの霊場は維持され、活性化されていると考えると考えてよさそうだった。

歩夢が駆け寄ってくるのを見てレンレンは立ち上がり歩き出した。  
「どこに行くの?」

すれ違う自分を意に介しないように歩いて行ってしまおうとする  
レンレンに歩夢が不安げに声をかける。

「変なおばちゃんのいる浜茶屋……。車を預けたままになってるの  
よん……」

「『源九浪』だよ!」

歩夢がレンレンに走り寄った。

「ネモが昨日行ったのは『源九浪』!」

「あら……」

レンレンが傍らを小走りについてくる歩夢に微笑みながら視線を  
落とした。

「あなた、何でも知ってるのねえ……」

そう言ってレンレンが再び微笑むと、歩夢は得意そうに鼻の下を  
人差し指の背でこすって見せる。

「知ってるのならありがたいわん。ふらりと入った店だったからよ  
く覚えてないのよん。早速案内してもらおうかしら?」

レンレンがそう言くと歩夢の顔が輝いた。

「うん!行こう!ネモ!」

「ホント……。ネコよりは役に立ちそうねん」

駆け出して先を行く歩夢の後姿を見ながら、レンレンが呟いた。

階段を下り切った歩夢は、広場の中央あたりまで行くと、くるりと  
振り向き、そこで遅れてやって来るレンレンを待った。やがて、  
投げやりにも見える歩調でレンレンが階段を下りてきて、自分に近  
づいて来るのを見て取ると、得意げに口を開く。

「ネモ!ここで太鼓や餅つきをやるんだよ!」

歩夢の言葉に、反射的に周りを見回す。特に興味があったわけ  
も、歩夢の言葉を確認したかったわけでもない。何も無い赤土の埃  
っぽい広場……。

「……………なんだってさ！」

「え？」

歩夢の一言をレンレンが聞き返す。

その言葉は……。聞き取れなかったと言うよりは、にわかには信じられなかったと言った方がよかったかもしれない。

「だからあ！むかしはここで、牛を殺したんだって！」

影すら真っ白にしてしまいそうな太陽の光と、乱反射するような容赦の無い蝉の音が溢れかえる。知っているのか？いや、間違いなく歩夢は知っている！今、本人が言ったではないか……。

ここは屠殺場であった……と。

「い……今は！？」

レンレンが尋ね返した。

「？」

「だから！今は！？今はどうしてるの？！」

「太鼓と餅つき……」

「そうじゃなくて……！」

「相撲大会？」

「そうじゃなくて……！」

「！」

レンレンに迫られて、気後れした歩夢がたじろぐ。

「あ……」

レンレンは、何時に無く熱くなってしまった自分に気づき、きまりが悪るそうに横を向くと歩夢から離れた。

「悪かったね……」

ぼそりとレンレンがそう言つと、歩夢は否定するように一生懸命首を振った。

「うつつん！ちょっとびっくりしたけど……ネモ、こえーな！」

そう言つて、レンレンの前に回りこむ。

「ネモ……。なんか知りたいことが有んのか？俺、祭りの事は良くわかんないんだ……。ばあちゃんなら良く知ってると思うぞ！」

そいつに聞けるならこんな苦勞は端からしていない……。レンレンは苦々しく笑うと歩き出した。

「さ！早く海のおばちゃんどこに行きましようおー！」

「うん！」

「おばちゃんどこ行って、オイシイ……。お酒呑むー！」

「俺！お酌するー！」

「おー……。お？……」

盛り上がる二人の前で……。立ち上る陽炎の中から湧いたように女の子が立ちつくしているのに気づく……。

年は歩夢と同じくらいだろうか？背丈は女の子の方が頭一つ高いので年上かも知れない……。やせっぽちの身体に不釣り合いの大きな麦藁帽子をかぶり、袖無しワンピースを着ている。ワンピースは初め黄色の水玉模様かと思われたが、良く見ると、細かな黄色い花柄だった。まつ黒く焼けた肌がますます女の子をやせっぽちに演出している。

「お、おはようございますー！」

緊張した面持ちでそう言って、女の子はちょこんと頭を下げた。

そして、すぐに歩夢の方を向き直ると子供らしい表情に戻る。

その仕草から、最初のおはようは歩夢では無く、自分に向けられたものだったことをレンレンは悟った。

「なんだよキツコ……」

めんどくさそうに歩夢が女の子に向かって言った。

「だれ？」

意地の悪い笑いを浮かべて、レンレンが歩夢に尋ねる。

「友達……。旅館の子でキツコって言うんだ……」

相変わらずめんどくさそうに歩夢が答えた。

「あつちゃんと、ヨツちゃんと、ちーが沢でカニを捕るんだって！歩夢くんも行くかもしれないと思って……。うちに行っておばあちゃんに聞いたら、ものわけさんに行っちゃったって言ったから……」

毅然とした態度で女の子……。キツコはそう言うと、レンレンを見

てすぐに視線をそらす。

「いけない？沢……。きのう、ちーがすっごくおつきなカニを見たんだって！怖くて捕れなかったって……。歩夢くんなら捕れるかも……」

「だめだ」

歩夢が静かに答えた。

「だめだよ、今日はネモに町を案内しなけりゃいけないんだ。ばあちゃんにも頼まれたし、ネモにも頼まれてんだ！」

そう言っつて歩夢はレンレンを覗き込み「な、ネモ！」と同意を求めた。

レンレンはただ意地悪そうな笑みを浮かべる。

「歩夢くん！大人の人を呼び捨てにしちゃいけないんだよ！先生に言いつけるよ！」

キッコの、日に焼けた顔が薄っすらと高揚しているのがわかる。

「いいんだよー！ネモは『さん』付けしちゃいけないですよー！なっ！ネモ！」

歩夢がそう言っつと、レンレンは『くぶん』と鼻をならし、歩夢の頬に顔を近づけた。

「キミだけ特別なのよん……」

見る見る歩夢の顔が真っ赤になっていく。かわいすぎる！さすがにこれには耐え切れず、思わずレンレンは笑い出していた。

「……！」

言葉も無く立ち尽くすキッコの責めるような視線から逃れるように、歩夢はレンレンの手を引いて歩き出していた。

「あっ！」

去ろうとする歩夢の後ろ姿にキッコが叫ぶ。

「沢でカニを捕った後に、ひろじの家に見せに行っつてると思っつ！そのあとはご飯食べに家に戻っつてえ……。お昼からはみんなとわたしんちでゲームやると思っつ！新しいの……。ほら！こないだ……」

どんどんと遠ざかっつていく、歩夢の後ろ姿が小さくなっつていく……

…。  
「ねえ！」

両手を拡声器のように口に当てて今まで以上に大きな声で叫ぶ…。

「ねえー！どこいくのよー！」

「『源九浪』ー！」

歩夢の答えが返って来た。だが、足を止めようとはしていない。

「あたしも行こうかなあー！『源九浪』ー！」

咽喉がかすれるほどの大声！

「今日はだめだからなー！」

歩夢がそう答えたのを聞くと、キツコは口に当てて拡声器を作っていた両手を腕がちぎれるほど振り下ろした。

「あたし！もう！ぜーったい！『源九浪』にはいかなーい！」

唇を噛んで、二人の後ろ姿を睨むキツコにレンレンの笑い声が聞こえたような気がした。

「あらよおー！もう少し待ってオクレねえー！……手が空いたらすぐに取って来させるからねえ！」

客でこった返す海の家『源九浪』の女将が、片付けものの皿やラーメンのどんぶりを抱えるようにして走り回り、酒をあおっているレンレンに、二つ向こうのテーブルからすまなそうに叫んだ。

当のレンレンはまったく気にしていない様子で、昨日と同じ場所に陣取り、日本酒、『海亀』の一升瓶をテーブルに立てて茶碗酒と洒落込んでいる。

「べつにい……。いつでもいいわよん……。急いでないし、お酒呑んでるしー……」

休日に近いせいなのか、それとも祭りを観光しようと言う輩が押し寄せているのか。浜茶屋源九浪は、昨日と打って変わって盛大な賑わいを見せていた。

「ネモ！焼けた！焼けてるよー！」

テーブルの上には小さな七輪が乗っており、貝や魚の干物を網の上に乗せて焼く趣向の『浜焼き』に、レンレンと歩夢は、舌鼓を打っていた。

「むー……」

レンレンは、持っていた割り箸を口にくわえ、焼きあがったサザエのつぼ焼き目がけて慎重に醤油を垂らす。サザエの殻から零れた汁がじゅっじゅつと七輪の炭でコゲ、香ばしい香りを白い煙とともに立ち上げた。

「うーっあづいい……」

小さいとは言え、七輪であった……。趣向的には大満足だが、何か、やはり早まったかも知れないと、レンレンは後悔していた。しかも……。

「何してんよん！硬くなっちゃうでしょ！サザエ、早く取りなさいよ！」

何気に、七輪奉行になっていた。

茶碗酒を一気にあおる。気温と炭火でカラカラにされた咽喉には、もはやこの凶悪な酒の咽喉越しても甘露であった。

七輪焼きが面白そうだと思って注文したのはレンレンだった。

彼女にしてみれば、後は干物の二、三枚も注文してじっくりと店の手がすくのを待ち、車を返してもらって帰るつもりでいた。

レンレンだけであればそうだったはずだ……。しかし……。今日は歩夢がいた。

歩夢はレンレンには予想外の行動に出た。

レンレンにしてみれば酒を『呑む処』である浜茶屋は、彼にとっで見れば、美味しいものを『食べる処』だったのである。レンレンが食事をしたいのだと勘違いし、あれもこれも美味しいからと、次々と注文に口を出す。ついに『浜焼き』は『バーベキュー』の様相をかもし出していた。

「だからあ！ソーセージ喰ってないで、サザエ喰いなさいよん！」  
言いながら、七輪の上のサザエを歩夢の皿に取り分けた。ふう、

と息をつき、額に浮き出る玉の汗を拭くと、酒のビンに手をのばす。  
「そーいえば……」

レンレンが茶碗に酒を手酌しながら歩夢に言った。

「そーいえば、キミ、何で私が『ものわけさん』にいるって思ったの？」

些細な疑問だった。さつき出会った女の子は、歩夢の祖母が『歩夢はものわけさんにいる』と言ったという。と、言うことは、歩夢はレンレンを探して初めから『ものわけさん』に向かったことになる。特に何を意識して尋ねたわけでもない。だから、答えも『昨日お祭りの話をしていたから』くらいの他愛の無いものが返ってくると思っていた。

「聞いた……」

サザエを食い千切りながら歩夢がぶつきらぼうに答えた。

「聞いた？」

「うん……」

ソーセージとサザエをいっぱいにはおぼった口をむぐむぐと動かしながら歩夢が頷いた。

「ネモ、ものわけさんに行く前に病院に寄つたる？」

「え？え？キミなんでそれを……」

混乱するレンレンに構わずに歩夢が続けた。

「あそこから、これからものわけさんへ連れて行くからって……」

病院から、ものわけさんへ……。連れて行く？……。連れて行つたのは……。

ハリガネ！

「キミに私の居場所を伝えたのは、ハリガネなの？」

根拠のない確信がレンレンの口をついて出ていた。だが、歩夢からは意外な答えが返って来た。

「ちがう……。だってハリガネはネモと一緒にいただろ？俺に伝えられるわけ無いじゃん……」

あまりに理路整然な歩夢の回答に、レンレンは自分の質問の脊髄

反射っぷりに顔が赤くなるのを感じた。

「じ、じゃあ、キミは誰から私の居場所を『聞いた』ッテ言つのよん！」

「ソラミミ」

あっさりと歩夢が答える。

「空耳？」

「そつだよ」

聞こえたような気がしたと言うことか？

「空耳って……、あの、幻聴とかの？」

「ゲンチヨウって何？」

うーっと唸ってレンレンが頭を押さえる。

「ありもしない音や声が聞こえたような気がすることによん！」

「じゃ、違っ……」

そつ言つて歩夢は不思議そうな顔をしてレンレンを覗き込んだ。

「ネモ、ソラミミ知らないのか？」

自分の知っているそれが違つというならば、確かにレンレンはソラミミを知らなかった。知ってる気がしない……。おずおすと口を開く。

「ソラミミって……。……。ナニ？」

「妖怪」

歩夢が答えると、レンレンの顔がこわばった。

ドン！と、そんなレンレンの目の前に女将が酒の一升瓶を突き出す。

歩夢に注がれていた、レンレンの隻眼の視線を海亀のラベルが遮った。

「あらよお、またせちゃつてごめんねえ。一杯おごるよう！」

そつ言つて別の手に持っていたコップに並々と酒を注ぐと、レンレンの前に置く。

「あらよお、明後日の準備であんちゃん達がいなくてねえ、あつ、そつだ！お嬢ちゃんもどうだい？出場してみるかい？」

女将はそう言うと、前掛けの大きなポケットから、便せんほどの大きさのチラシを取り出し、テーブルの上に置いて軽く皺を伸ばす。「な、なんなのよん……?」

そのチラシは、色とりどりのマジックインクで手書きされた物のカラーコピーらしかった。

一番上に、一際大きな赤い文字で『恒例！竜宮町かき氷早食い大会』の文字が躍り、周りをオレンジ色の花丸が囲んでいる。その下には日時やらの細々とした内容が豪快な青字で描かれ、一番下にはまたも赤色の字で、『主催『海の家・源九浪』詳しくはおばちゃんまで!』と描かれており、その脇には似顔絵らしい天真爛漫なパンチ頭女の、一筆書きのようなイラストが描かれていた。ちなみに、参加費は千円と書かれている

「毎年、ものわけさんのお祭りが近くなると、源九浪がいつもやるんだ！かきごおりの早食い大会！」

嬉しそうに歩夢が叫ぶ。

「あらよお！一位から三位まではゴーカな商品も出るからねえ！地元で取れたハマグリ10キロと源九浪のお食事券が一位、二位、三位にそれぞれ三千元、二千元、千円！だよお！」

胸を張る様にしておばちゃん説明するおばちゃんを、レンレンはげんなりとした表情で眺めながら口を開いた。

「なんで……、私がそんな子供だましに出なくちゃいけないよん……」

「ちがうよネモ！子供よりも大人の人のほうがいっぱい出るんだよ！」

歩夢が身を乗り出して抗議した。

「そうじゃないって……」

ますます呆れ返ったと言う様に、レンレンが天井を仰いで呟いた。

「ねえ、ねえ！おばちゃん！今年も、しげちゃん出るんでしょ！」

「あらよお！もちろんさあ！」

すっかり二人の世界に入った歩夢とおばちゃんをレンレンはふて

たように椅子の背もたれに身体を預けて傍観している。

「ネモ！ネモ！しげちゃんね、すごいんだぜ！2年連続で早食い大会のチャンピオンなんだ！」

「あー、すごい、すごい……」

レンレンが、やる気のない返事を返す。

「しげちゃんほんとにすごいんだ！泳ぎもうまいし！素潜りもうまいし！カーキチだから、車の運手もうまいし！」

「ちよつと待ちなさいよ！」

『カーキチのしげちゃん』にレンレンが反応する。確か、確か、その名前は……。

「あらよお！三年目もいただきだよお！」

「待ってって言うてのよん！」

言うて弾けるようにレンレンが立ち上がった。座っていた椅子が後ろに吹っ飛ぶ。

「その『カーキチのしげちゃん』ってばアンタの所の店員じゃないの！」

「あらよお、違うよお」

キョトンとした顔つきでおばちゃんが続けた。

「しげちゃんはおうちのアルバイトだよお？」

「一緒よ！いつしょー！」

レンレンはおばちゃんの受け答えにずっとこけそうになりながらも、辛うじて体勢を保ち、攻めるように彼女を指さした。

「身内じゃないのー！何よん！そのインチキ！」

「あらよお、何言ってるんだい！」

おばちゃんが腕組みしてにやりと笑う。

「富くじ引いたり、勝敗予想して賭博してる訳じゃないんだよ！勝ってるんだ！チャンピオンさ！むしろ誉め称えてしかるべきだと提唱さしあげるよ！」

「そうじゃないわよ！客を楽しませるためのアトラクションに、身内が参加するって何か違うでしょって話をしてんのよん！」

「違うね！」

おばちゃんは燃えていた！紅蓮の炎で瞳が燃えていた！

「あらよお！これは闘いだよ！おばちゃん、余興や客寄せでこの大会を開催してるのとは違うんだ！コレは勝負！『ものわけさん』に奉納するガチンコ勝負！いわば『聖戦』なのさね！」

おばちゃんの瞳の炎は今や体中に回り出し、炎に包まれたおばちゃんの身体は二回りばかり迫力をましていた。

「ううっ……」

思わずレンレンが後退る。

「その闘いに勝ち続けるしげちゃんは、それが一体何者でアレ、ヒーローさ！勇者様だよ！文句があるなら勝てばいいのさね！」

「勝てばいい……？」

レンレンのコメカミがひくりと反応する。

「まさか……。絶対負けなかつもりでいるんじゃ無いでしょうね……」

レンレンの隻眼が氷の輝きをたたえる。

「やってみるか？……」

おばちゃんがあざとい笑みを浮かべると、挑発するようにレンレンがズイと前に出た。

「私はねえ、井の中の蛙が天狗になってるのを見ると虫ずが走るのよん……」

紅蓮の微笑みと寒獄の微笑みがぶつかり合う！

「お会計して！帰るわよん！」

レンレンはそう言いつて踵をかえし、スタスタとレジに向かい出した。

「あらよお、お嬢ちゃん、車はどうするんだい！」

怒りに我を忘れて、本来をすっかり忘れていた事に気づく……。だが、今更後には引けなかった。

「勝負が終わるまで、預けておくわよん！」

苦し紛れの言い訳をして振り向くと、おばちゃんがにやにやとい

ヤラシイ笑みを浮かべてレンレンを見ている。逃げる様に前向き直るが、背中に注がれているであろう視線がイタイ……。

「キミ！帰るわよん！」

いたたまれなくなつて歩夢を呼びつける。

「ネモお……」

歩夢が何故か乗り気の無い返事を返した。

「ネモお、もう少しここにいたほうがいいよお……」

「何いつてんの！」

「2万9せんえんでーす」

レジの青年が素っ気なく金額を読み上げると、レンレンがお札を三枚、カウンターに叩き付け「おつり要らない！」と付け加えた。

「か・え・る・の・よ・今！すぐ！」

「えー、でもお……風があ……」

「もういい！キミも、猫といっしょ！」

叫ぶと同時にレンレンは大股で店の外へ出て、そのまま早足で歩き始めた。その時……。

空が、一天にわかにかき曇り出したかと思うと、当たると痛みを感じるほどの大きな雨粒がレンレンの頭頂部を直撃し、ほどなく、何事かと見上げた彼女の顔に、滝壺にでもいるかのように激しい雨脚の、にわか雨が崩れ落ちてきた！

呆氣にとられ、ただ雨に打たれるままにたたずむレンレン……。

「ごめんね……ネモ……」

歩夢の声。

声のする方へ視線を落とすと、歩夢はずぶ濡れになりながら、レンレンのそばに寄り添うように立ってた。

「風が変わったし……。潮の匂いだって変わったたる？だから雨が降るって知ってると思っただ……。」

静かに見つめるレンレンから視線を外して歩夢が続ける。

「源九浪のおばちゃんに聞いた……。ネモは天気も読めないし、ソラムミも知らないんだって……」

「なるほどね……」

レンレンがそう言って楽しそうに笑った。

「何となく、見えてきたわよん……。ここのしくみが……」

まるでレンレンの笑い声に応えるかのように、遠雷が空に鳴り渡り始めるのが聞こえた。

「着替えはここに出しとくよ」

歩夢の祖母が引き戸の閉まった脱衣所の前に歩夢用とレンレン用に区別した衣類を置きながら言った。引き戸にはめ込まれた曇りガラスには、小さな子供の影と、大きな女性の影がもぐもぐと動く姿が映り、中からは、騒々しい歩夢の上声とレンレンのたしなめるような声が騒々しく上がっていた。

やがて、引き戸が勢いよく開くと、すっかり茹であがった、真っ裸の歩夢が飛び出して来て、もどかしげにパンツを履きながら奥の祖母に向かって叫ぶ。

「ばあちゃん！ネモのおっぱいでつけえかったぞー！」

「久しぶりに肌を晒したのがこんなガキとは……。あたしも焼きが回ったもんだわよん……」

桜色に上気した顔で、身体の胸から下をバスタオルで覆い、タオルで髪を整えながら、歩夢の後ろからレンレンが現れる。

「なあ、ばあちゃんも見てみるよ！源九浪のおばちゃんどっちがおつきいかなあ！」

「があー！」

レンレンが獣のような叫びを上げた！

「あんな粗品と一緒にするなあ！」

「ソシナ？」

青いTシャツと白い半ズボンに着替え終わった歩夢が小首を傾げた。

「『そしな』ってなんだ？」

「『ガキにはお似合い』って意味よん！」

そう言つて、床に置かれている、老婆が用意してくれた『着替え』を持ち上げると、木綿の単衣ひとえが、はらりと床まで伸びる。白地に大きな金魚の柄の浴衣ゆかただった。

「あつ……」

歩夢が小さく叫び、レンレンは一瞬そちらに気を取られたが、またすぐ浴衣に視線を戻し、しみじみと眺め回す。

浴衣は、右から左に泳ぐ、上を向いた赤に白斑の琉金と、左から右に泳ぐ、下を向いた藍色の琉金がそれぞれ上下に描かれ、それが正面で向き合っているという構図だった。

多分、大人用であろうと思われたが、レンレンには少し小さいような気がする。

「亡くなつた嫁の形見だ……」

いつのまにか、傍らに老婆が立っていた。

「うちには、おまえ様が着られるような大きな女子おんなの服は無い……。浴衣なら何とかなるじやろ」

老婆はそう言うにつこりと微笑んだ。

レンレンは歩夢の表情を伺つた……。歩夢は目をまん丸くして浴衣の金魚を見据えていたが、レンレンが自分を見つめているのに気づいて慌てて目を反らした……。が……。

「ねえ、キミ……」

レンレンに呼ばれて再び目を合わせる。

「私、この浴衣……、着てもいいかな？」

「なんで、俺に聞くんだよ……」

すねたように歩夢が答えた。

「そーねえ……」

レンレンはそう言つて顎にひとさし指を当てて、考える風な態度をして続ける。

「絆かな？」

「きずな？つてなんだ？」

歩夢が尋ねた。するとレンレンは、初めて歩夢に見せる優しい表

情をして答えた……。

「キミがお母さんをどれだけ好きかって言うことよん」

言われて、はっとするような表情をした歩夢は、少し考え込むようにして静かに口を開いた。

「俺、写真で見たおかあちゃんしか覚えて無いけど……でも、大好きだぞ！でも、ネモがこの浴衣着るのも嫌じゃないぞ？」

「そう……」

答えるが早いかレンレンは、身体に巻いていたバスタオルを振り払うように剥ぎ取ると、一糸まとわぬその素肌に浴衣をひっかけ、一気に両腕を袖に通す！

前を合わせて、老婆が差し出した帯を受け取り手際よく結び止めると、レンレンの身体に二匹の琉金が舞った！

浴衣は、やはりレンレンの身体には小さくて、袖は七分袖ほどになつてしまい、丈に至っては、浴衣の合わせ目からこぼれ落ちそうなほど大きな胸が、着物を上に引っ張り上げてしまっているためにより短く、膝より上のあたりにとどまって太ももを露わにしまっている。

「気に入ったわん！」

浴衣の着こなしを直しながら、レンレンが言った。

「これからどうなさる？まだ日も高いが……。また、出かけなさるか？」

老婆がレンレンを見上げるように覗き込み、尋ねた。

「もう、今日はいいいわん……。見えてきたし……」

そう言って、相変わらず微笑んだままの老婆に、探るような視線を向けると、老婆は、少し感心したような声で「ほう？」と言ったが、そのまま奥に引き込もうと歩き出した。その後ろ姿にレンレンが声をかける。

「あんたからもらった宿題はちょっと後回しよん、先にけりをつけなきゃならない事が出来たの！」

「ゆっくりなさいませ。竜宮町は良い所じゃて……」

老婆はそう言っつて、そのまま奥へと見えなくなると、歩夢がレンレンの手を引いた。

「ネモ！またお酒飲むのか？持っつてこようか？」

「そうねえ……」

そう言っつとレンレンは不敵な笑みを浮かべた。

「派手に前祝いといこうかしらね！」

レンレンの満面の笑みを見ると、歩夢は何故か自分がたまらなく幸せな気持ちになるのを感じた。

そして歩夢は……。

それから歩夢はその日一日中、床につくまで、レンレンのそばを離れたくなくて……。だから、ずっとはなれようとしなかった……。

## インターミッション・かごめかごめ考

青い海がやたらと見たくなるような、そんないやらしいまでに爽やかな、真っ白に晴れた夏の或る日だった。

その日は……。そんな日だったが……。姫緒きおは朝から書齋にこもっていた。

重厚な書架に、整理された沢山の書物に囲まれ、背もたれの無い一人用の腰掛にかけて、依頼された事件についての文献を、組んだ足の上に乗せた姿勢で閲読する。

「風小ふうせう……ちよつと……休むワ……」

部屋の中には姫緒以外の人影は無かったが、彼女はそう呟くと、文書面に走らせていた指をこめかみに添える。

「面白い解釈だけど……。忌み忌みしモノの記号の羅列に過ぎないわね……」

知的な紅い唇の先端を歪ませ、ふつとため息を付き立ち上がると、本を書架に戻す。

腰まである濡れ羽色の髪が、彼女の物腰に合わせて、黒いワンピースの上をきらきらと流れた。

「もつと……。何か根本的な錯覚があるはず……。この事件は……。矛盾を謎にすりかえようと作為する悪質さが存在している……」

そしてまた、肝心の『謎』となるハズの部分はあまりに稚拙であり、そのことが姫緒に苛立ちを与えていた。『まだ、何かあるのか？』そう思う今の気持ちこそが敵の悪質な作為だと解っていても陥りそうになる。

「気に入らないわね……」

思わぬ強敵に苦笑した。

ドアがノックされ風小の声がする。

「おまたせしましたあ。姫さまあ、お茶をお持ちしましたデスよ」  
メイドの衣装を纏まとった風小が茶器を乗せたカートを押して、部屋

に入ってきて来ると紅茶の準備を始めた……。

「珍しくチャモンのGFOPが手に入ったのでストレートティーで召し上がっていただきますデスよ」

丸みを帯びた白い陶磁器のポットを包んでいた花柄のウォーマーを外し、茶葉を入れ、熱湯を注ぐ……。程よく空調された部屋の中に、深く清々しい紅茶の香気が広がりだした。

「セカンドフラツシユなんですよー！」

嬉々としてそう言いながら、風小がジャンピングが始まりだしているのである。ポットを愛おし気に眺める。

そのとき……。

突然、部屋の中に『スタートレック』のテーマが流れ出す。

「レンレンから？」

姫緒が気怠い視線けだるを風小に向けて尋ねた。

「そのようデスよ」

言うが早いか、風小がメイド服の襟首から手を突っ込み胸の辺りを探り出す。

ややあつて、中折れ式の携帯電話を引っ張り出すと、開いて耳に当てた。

「レンレンさん、今晚はお帰りになるんですか？えっ？焼きはまぐり？え？今日食べたんですか？えーっ昨日もお？いいなあ！いいなあ！え？姫さまですか？あ、はい、少々お待ちくださいデスよ……」

「もしもし？」

「あらん、お久しぶりねん！昨日以来だったかしら？ご機嫌如何あん？」

「すごぶる悪いわ……」

「どうせまた書斎にこもってコメカミおさえてんでしょう？たまには外出の方がいいわよん」

「御用はなあに？ネモ・レンレン……」

冷ややかな姫緒の声にレンレンの背筋に冷たい汗が走る。

「や、やあねえ……。お茶目な挨拶じゃないのお……」

強い威圧の沈黙。

「え、えつとねえ……。ちょっと教えてほしい事があるのよん……」

「なに？」

「かごめかごめって知ってるう？」

「歌いましょうか？」

「なかなか魅力的なお申し出だけれど……。歌の歌詞は知ってるのよん。書いてもらったメモが手元にあるから」

「それで……？ナニが知りたいの？」

「えつとお……。この歌の解釈を『おしえて！姫緒せんせえ！』」

「もうやらない！もうやらないからあー！」

姫緒は小さくため息をつくと口を開いた。

「つまり……。その童謡の言葉の意味を解説して欲しいと言う事？」

「うん」

「『とうりゃんせ』(鬼追師の姫緒／天涯のキオク／参照)の時  
みたいにな？」

「う……」

「無理ね……」

「へっ？」

「無理……。というか、あなたの知っているその歌に意味は無いわ  
「えーと……」

「その歌の最後……。こうなっていない？」  
そう言うと姫緒が歌い出す……。

『つるとかめがすべった

うしろのしょうめんだあれ？』

「なってるけど？」

「その歌詞はね、明治時代以降に広まったものなの。江戸中期にあつた文献の歌詞はこうよ……」

かごめかごめ

かごのなかのとりは

いついつでやる

よあけのばんに

『つるつるつっぱいた』

「これで終わり……」

「なに、なに？なによお！その尻切れトンボみたいな歌あ」

「昔の人もそう思ったんでしょ。切れたお尻を継ぎ足したのよ」

「もとの歌と違う？だから意味が通じないということ？」

「そういうことね……。最後の『つるつるつっぱいた』というのは、京都の童謡の歌詞にある言葉で、『ずるずると引つ張った』と言う意味よ。方言の意味が理解できなかった当時の人が、語呂を合わせて他の歌詞に変えてしまったのでしょね」

「あー……と、というか意味解つても理解できないんですけど……」  
「そうね……。色々と勘違いされているから、難しいわね。まず、この歌は、調子を整える為に無理なところで文節を切っているのよ……つまり……」

かごめ、かごめ。

かごのなかのとりは、いついつでやる。

よあけのばんに、つるとかめがすべった。

うしろのしょうめんだあれ。

「これが、今、知られているこの歌の文節でしょ」

「え？でもおかしいじゃない？だってそれは捏造版でしょ？」

「いいところに気が付いたわね……」

かごめ、かごめ。

かごのなかのとりは、いついつでやる。

よあけのばんに、『つるつるつっぱいた』

「これで、少し整ってきたわね、それじゃ言葉の意味を解説していかうかしら……」

「うん」

「まず、『かごめ、かごめ』これはよく言われてるけど、『かがめ、かがめ』と言うように真ん中のしゃがんで目隠している鬼役の子に対して呼びかけているという説と、『囲め、囲め』と言うように周りをまわる子供達の間で声を掛け合っているという二つの説が有力ね。まあ、どっちでも大差ないし、間違いではないと思うから、とりあえず、今回は『囲め、囲め』と言うことでいいかしら？」

「異論は無いわん」

「結構……。では、次の歌詞、『かごのなかのとりは、いついつでやる。』『かご』は『籠』でしょうね、『とり』と言うのはこの時代の風俗からして『酉』つまり鶏を意味していると思われるから……」

囲め、囲め。

籠の中の鶏はいついつ出やる。

「問題は次の歌詞。『よあけのばんに、『これが『夜明けの晩に、』では意味が通じない……』」

「あら、やっぱりそんな日本語は無いんだ？」

「無いわ……。そこで注目して欲しいのはこの歌を正しい歌詞にした場合……。『つるとかめがすべった』の記述が無くなった為に、

『よあけのばんに、『は続く言葉を無くしてしまったと言う事……』』『つるつるつっぱいた』は？」

「夜明けの晩なんてわけの解からない時間に、何をずるずる引つ張るの？」

「鶏……」

「……」

「籠……」

「レンレン？その線で話を続ける？」

「うつつん……もう、いいです……」

「続く言葉が無いということは、そこで終わりと言うことよ……。つまり、この歌の正しい文節は……」

困め、困め。

籠の中の鶏は、いついつ出やる、よあけのばんに。ずるずる引つ張った。

「なんか、ますます解なくなっちゃったじゃないよん！大体『ずるずる引つ張った』が独立しちゃったわよん？」

「それでいいのよ……。歌の始まりが子供達の動作で始まっているでしょ？終わりも動作で終わっているのよ」

「ずるずる……？」

「そう……。困め、困めで集まって……。手を繋いでずると鬼の子の周りを回るでしょ？お互いを引つ張って……」

「あー！」

「つまり、この歌は最初と最後に子供達の動作が入り、歌の中身は『籠の中の鶏は、いついつ出やる、よあけのばんに。』の一行と言うことになるのよ」

「でも、その大切な一行がグダグダにいー！」

「そうね、このままでは繋がらないわ、だって、この歌詞間違ってるんですもの……」

「間違ってる？ほんとに『夜明け』だけで『晩』じゃ無いとか、『晩』だけで『夜明け』じゃ無いとか……」

「人の話をちゃんと聞いている?……。さっき言ったでしょ?」続く言葉が無いということは、そこで終わりと言うこと』って。つまり、最後ののに格助詞の『に』が使われているから、ここが後に繋がっているとは勘違いして、お尻を改ざんしてくっ付けちゃった訳よ」

「えーと、つまりそれは……」

「『よあけのばんに』は最後に『、』ではなくて『。』の付く歌詞でなくてはならないということよ。そう言った理屈で、ここのもころだけおかしいの……。間違っているのよ」

「なんで?いつ間違ったの?」

「伝承が口伝いだっだから……。間違った発音で伝わった。と言うことでしょうね。だから……。もとの歌詞も非常に似通った言葉であると言うことは解るわね?……。前の歌詞の繋がりから推測するに、この歌は、籠の中の鶏が出て来る事を待っている歌であると考えられるでしょ?『夜明け』というのが、鶏が出て来るその時間を表しているとする……」

「『ばんに』は?」

「『ばんにん』」

「は?」

「『ばんにん』よ。番をする人、見張り役の『番人』」

「えええー!」

「歌の節回しの関係で一つ音が消えてしまったのよ。ここの最後の歌詞は『夜明けの番人』つまり、夜明けを告げる一番鳥『籠の中の鶏』の事よ」

困め、困め。

籠の中の鶏は、いついつ出て来る夜明けの番人。ずるずる引っ張った。

「あつ、なんだか、見えてきたような……」

「今風に訳すとこんなところかしらね……」

困め、困め。

籠の中に居る鶏は、夜が明ければ鳴くことだろう。

(夜が明けるまで) 輪になって回ろう。

「で、歌が終わったところで……。夜が明けるわけね……。まわりの子供が止まり、困まれている鬼役の子……。『鶏』が後ろの子の名前を呼ぶ……。つまり、『夜明けの番人』が鳴く……。と言う才子が付くわけよ」

「えーっ！妊婦さんはあ？流産とか、夜明けでも暗い階段とかわあ？」

「どこの誰に何の話を聞いたの？ネモ・レンレン……」

「源九浪のおばちゃんに崇たたりの話し……」

「楽しそうね……。ネモ・レンレン……」

「最高よん！あつ、それとさあ……。お願いがあるのよん！」

電話が切られた。

ゆつくりと風小がカップに紅茶を注ぐ。

「レンレンさん何やってるんですかねえ」

確かに、それは姫緒も気になった。

『あの』レンレンが、自分から厄介ごとに首を突っ込んでは到底思え無い。

と、すれば、『組織』絡みか？

『最高よん！』

やけに楽しそうだった彼女の声様に思わず微笑む。

「風小……」

「はい？」

ポットをカートの上に戻していた風小が訝しげな表情で応えた。

「旅の支度をしなさい……」

「旅行ですかあ！……」

「あなたの分だけよ……」

「?????」

事の意外さに事態がとっさに理解できず、驚きと当惑でただ目を見開いている風小の姿を見て、姫緒はただ意味ありげに微笑んでいた。

## ACT 6 聖戦！『アヤカシVSカーキチ』！

そこは、電車のホームと言うよりは、果てなく広がる真つ青な水田の中に浮かぶ、小さな浮島と言った様相だった。

改札口の上に、申し訳程度のトタン屋根がかかっていたが、辛うじて日よけとしての機能を果たす程度で、雨風を凌ぐことは不可能だろうと思われた。改札を抜けた先にある待合室は、屋根とベンチが有るだけという質素なもので、駅の待合室と言うよりは、路線バスの屋根付き待合所を連想させる。

ホームには単線の線路が左右に伸び、風に吹かれてさわさわと涼しげにゆらぐ稲波の中を抜けて、山間へと消えている……。

その浮島に、彼方よりやって来た、赤い二両編成の気動車が停車り、中から、その車両唯一の小柄な乗客が、その身体に不釣り合いなほど大きな古い鞆かばんを抱えて降りて来る……。くりくりとした瞳は翡翠のような緑色で、その瞳孔は猫のそののように縦長だった。ジーンズ地のホットパンツを履いたその少女の、亜麻色をしたショートカットと黒いTシャツがさわさわと風になびく。

娘は、不満げな顔で辺りをきよるきよると眺めると、深く深く長いため息をひとつついた……。

すると、気動車は、まるで娘を下ろしたのを見届けたようにゆっくりとホームから滑り出し、青くざわめく海原へと分け入る旅客船のように進み出して、段々と小さくなっていくのだった。その後ろ姿を見送りながら娘は、自分が無人島に置き去りにされた罪人のような気分になり、なんとも虚しげに、ただ、乾いた笑いを浮かべることができなかった。

空には、鯨のように大きな白い雲がゆっくりと流れ行き交い。稲葉を風が渡ると、清々しい葉擦れの音が辺りを包んだ。

ふと、足下に気配を感じて視線を落とすとそこに、自分とそっくりな緑の瞳で娘を見上げるロシアンブルーの猫がいた。

「あれあれ……」

娘はしゃがみこみ猫に顔を近づける。

「なんとも、他人様とは思えぬ瞳をしてらっしゃいますデスねえ…

…」

身体をのりだしてしみじみと見おろす。

「わたくし、あやかしの風小と申しますデスよ。もしや、あなた様もあやかしで御座いますデスカ？」

猫は風小の問いかけに答える様子はなく、近づいていくと、彼女の膝の辺りの匂いをふんふんと嗅ぐ仕草をして見せた。

「ただの猫ですかねえ……。なにか妙な……」

そこまで言つて、風小はその猫のしっぽの先が、まるでハリガネでも入っているように鋭角に折れ曲がっているのに気づく。

「やややや！ そのしっぽのありさまわあ！」

思わず、好奇心に駆られ、しっぽに手を伸ばそうとしたちょうどその時、その場に似つかわしくないフルオーケストラの『スタートレック』のテーマ曲が流れ出す。

音楽に気を取られ、一瞬、躊躇した風小の手をかいくぐり、猫は改札の外へと駆けていってしまった。

「なんとも、珍妙なネコでございましたデスねえ」

猫の消えた方向に視線を向けながら、風小は、Tシャツの襟元から手をつ込んで、何やら胸元をごそごそとまさぐる。Tシャツにプリントされた白いドクロのイラストが、まるでくすぐられて笑っているようにくねくねと揺れた。

やがて、何物かを探り当てたように風小の手の動きが止まると、

襟元から中折れ式の携帯電話を引っ張り出して耳に当てる。

「やつほー！ 風小お！ ちゃんと着いたああ？」

風小が受け答える間もなく、これ以上に無い高いテンションで、レンレンの声が携帯より聞こえてきた。

「あー、まあ、鉄道でございますからねえ……。よほどの大事が無ければ予定どおりデスよ……」

風小は、気乗りのしない声でそう答えると、また、大きくため息をつく。

「なによん！ノリが悪いわねん……」

「ノリが成立する要因が何かあるのをごぎいますのでしょうか？」  
「いきじお憤りきつた口調で風小が続ける。

「依頼を受けたお仕事も一段落ついて、これから姫さまと、尊重すべき、愛しい、愛すべき、楽しい、貴重な、且つ、つかの間の！幸せを謳歌しようと言うときに……」

そう言つて、風小はまたまた、深いため息を漏らし、辺りに視線を巡らせる。

「なにゆえに、私はこのようなところに……。電話一本で呼び出されなくてはいけないのでしょうか？」

「あら？」

意外だというようにレンレンが声を上げた。

「あんたつてば、『カプセルあやかし』だと思つてたら、『レンタルあやかし』だったのねえ」

「レンレンさん……」

「なーにい？」

「帰つていいデスか……」

電話の向こうからレンレンの大きな笑い声が聞こえる。

「さつき道案内をそっちに行かせたから、そろそろ着くと思つわん」  
「ガイド？」

風小がそう言つて改札口に目を走らせると、待合室のその先の田舎道に一台のタクシーが止まり、中から男の子が飛び出すと真直ぐこちらに駆けて来るのが見えた。

「お子様が一人、こちらに駆けて来ておりますデスよ」

風小がそう言つうちに、男の子は切符を買つことも、ましてや、それを誰かに咎められる事も無く改札口をくぐり抜け、そのまま、ホームに出ると、きよろきよろと辺りを見回していたが、すぐに風小の方へ向かつて駆け出した。

「そうそう！多分それよん！」

レンレンが可笑しそうに笑いながら答えた。

「そのガキと一緒にこっち来なさいよん、いいものを見せてあげるう！」

そう言うと、風小が答える間も無く電話は切れてしまった。一瞬、風小は非難するように電話を睨んだが、すぐに、諦めたのか携帯を折りたたんで、襟首からTシャツの中に投げ込んだ。

「あんだ、風小だろ！」

そんな、男の子の声がする方へ、風小は視線を移す。

「あー、見た目、あなたさまとあまり変わらないので致し方ありませんが、私、こうは見えても少々、長く生きておりまして……。まあ、それではなくともやはり、初対面に呼び捨てと言うのは、お里が知れるというものでございますよ……。でも……。まあ、お子様では致し方ありませんのですかねえ……。」

ほとんど八つ当たりにも近い風小の説教を、男の子はきよとんとしながら聞いている。風小は大きな鞆を片手で肩に担ぎ上げると、

「さて」と言って少年と向かい合った。

「いかにも、私は風小でございますよ。よろしければあなたさまのお名前を教えてくださいませんか？」

風小がそう言って微笑むと、男の子は、「うん」とひとつ頷いて「俺は、歩夢だ」と自己紹介した。

「そうですか、それでは歩夢さん、レンレンさんの所まで道案内よろしくお願いしますよ！」

「？」

風小の言葉に、歩夢が戸惑いの表情を見せた。

「いかなさいましたのデスか？」

風小が問うと、歩夢が恐る恐るといった感じで口を開いた。

「『レンレンさん』ってネモの事か？」

「えっ？」

風小はうるたえて、肩の鞆を落としそうになった。

レンレンが、ネモの名前を使うのは『仕事』の時と風小は認識していたのだ。レンレンの仕事……。彼女は、『組織』切つての超級符術者にして暗殺者。

ネモ（誰デモナイ）・レンレン。  
妖と人。双方を滅する殺業の者。

「レンレンにはさんを付けるのか？ やっぱり普通はネモにも『さん』づけするの？」

「え？ え？ え？」

混乱しかけていた風小に、歩夢の矢継ぎ早な……。しかも要領を得ない質問が飛んでくる。必死に理解しようとするが、もともとの質問が要領を得ていないので、当然、理解など出来るわけがなかった。眩暈めまいにも似た感覚に、ただ、立ち尽くす。

「ネモが言つてたんだ、俺だけ特別だつて！ それに……」

『歩夢は特別』……。やっとそれだけ風小は確認する。

「風小の事も『風小』つて呼べつて言った。『そう言つてお国柄』なんだつて……」

「は……はいつ！ はい！」

風小が少しだけ正気を取り戻した。

「そうです！ お国柄デスよ！ 私は風小でよいデス！ レンレンさんは特別にネモデスよ！」

なんだか解らないが、解らないだけに、話を合わせなければイケナイ……。風小は直感的に……。そして、盲目的に、そう判断していた。もし、自分がここに呼び出された事が、レンレンの仕事に関する事だと言つならば、そうしなければ『ヤバイ』と言つことは疑う余地のないことだったからだ。

今は、一刻も早くレンレンと接触しなければならぬ。そして、何が起つているのかを把握しなければ、何もかもがヤバイ……。そうに違いない！

「さあ、さあ、歩夢さん！ 早速、早速参りましょう！」

そう言つて風小は歩夢を背中からせつつく様にして改札へ向かつ

た。歩夢が改札を抜け、その後を追うようにして風小が抜けたそのとき……。

「もしもし……」

突然、後ろから声をかけられ、風小は飛び上がった。

「????????????」

心臓は早鐘のように高鳴り、あまりの驚きに声も出ない。何事かと後ろを振り返ると、そこにはツバ付きの帽子をかぶり、開襟シャツを着た初老の男が愛想のいい笑顔で立っていた。

男の右手は何事かをねだるように掌を上にして風小に突き出されている。

「お客さん……。キップを置いてってください」

言われて初めて、風小はその男のかぶっている帽子が駅員のものであることに気がついた。

「あ……ああ……。無人駅ではなかったのですね……」

風小は顔を赤らめながら、パンツのポケットからキップを取り出すと、差し出された男の手に渡す。

「それでは、よい旅を……。竜宮町へようこそ……」

男はそう言っ、笑顔を崩すことなく、帽子のツバに手をかけて小さく挨拶すると、奥に有る詰め所のような部屋に戻っていった。

「冥土へ旅立つところでしたデスよ……」

その後ろ姿を見送るように見つめながら風小は、ときどきと動悸する胸を押さえて、大きく息を吐いた。

「風小おー！早く！ハヤクウ！」

一足先に外に出ていた歩夢が、待たせていたタクシーの開いたドアの脇に立って、何度も手を振りながら風小を急かしている。

「申し訳ありませんでしたデスよ！ただいま参りますデスよ！」

そう言っ、ひよいと鞆を担ぎなおすと、あっという間にタクシーの脇まで走りきる。タクシーの後ろには運転手が車のトランクを開けて待っていたが、風小の鞆を見ると、顔を曇らせた。

「ありやりやあー。おねえちゃん……。その荷物は入らないかもし

れないなあ」

本当に困った様子で、小太りの運転手はそう言いながら、風小の肩から鞆を受け取った。

ずっしりとした、見た目以上の重さに思わず足がヨロケる。一体この小柄な娘の何処にこの鞆を支えて走る力があつたのかと訝しがりつつも、やっとの体でトランクに移し、詰め込もうとするが、トランクの容量は、やはり鞆のほとんどを収めることが出来なかった。「ああ……。やっぱり、こりやだめだ……」

運転手は、方向や角度を変えて、何度もトランクに収めようとするが、鞆は冰山のようにトランクの外にそびえ立つ。

「ああ、大丈夫デスよ。ちょっと『コツ』がございますのデス」

風小はそう言つて、トランクからはみ出している鞆に手をかける。すると、まったく苦勞する風でもなく鞆はトランクの中に沈みこみ始め、遂にはすっぽりとすべて収まつてしまった。事の成り行きを、驚愕の面持ちの運転手に見守られながら、風小がまつたく当然の事のように、トランクの蓋を閉じてしまったに至つては、運転手は、ただ呆然と、その場にたたずむ以外無いと言つたあたりさまだつた。

風小は、開いていたタクシーのドアから、先に乗り込んでいた歩夢の隣に座り、運転手が乗り込むのを待つていたが、一向にその気配が無いと、肩越しに後ろを振り返つた。案の定、後ろのウィンドウ越しに、車のトランクを惚けたように見つめたたずむ運転手の姿が見える。

「さあ、早く参りましょう！」

トランクの前から動こうとしない運転手に、ドアから乗り出して風小が叫ぶ。

硬直するかのようになり立ちつくしていた運転手は、その声で呪縛が解けたというように、トランクから視線を外すと、身体をゆさゆさと揺らしながら小走りで運転席へ戻つて来た。

「やあ、すごいもんだなあ。お譲ちゃん……。後でそのコツとやらをおしえてくれないかい？」

シートベルトをしめる動作をしつつ、運転手がそう言つて、ルームミラー越しに風小へ羨望の眼差しを向けると、ミラーの中の風小は、ただ無言でにっこりと笑顔をつくつて答えた。

やがて、二人を乗せたタクシーが走り出し、すぐに風小が口を開いた。

「レンレンさんのいらっしやる場所はここから遠いのデスか？」

「うううん」

歩夢が首を強く振つて続けた。

「歩けば30分くらいだけど、車ならすぐだよ。あの山を……」

そう言つて進行方向に見えてきた低い山を指さす。

「あの緋<sup>ひ</sup>掘<sup>ぼり</sup>山を迂回して、反対側に出たらすぐだよ！」

そう言つてひとなつっこい表情で風小の顔を覗き込んだ歩夢に、風小は愛想笑いで答える。レンレンの意図を汲めず、心中穏やかでは無い今の風小にはそれが精一杯だったのだ。

しばらくの間、タクシーの中は無言が続いていた。風小の頭の中に、レンレンの意地悪い笑顔が浮かんでは消える。色々な成り行きを思い浮かべるが、そのどれもが、決して良い方向へは向かわなかった。つる不安が風小を無口にした。

「レンレンさんですからねえ……」

思わず呟く。

「あ、風小！見えたぞ！」

歩夢の声に、はつとして、顔を上げた風小の視界一杯に広がったのは……。

「あええええええええええ！こ、これわあ！」

山を迂回しきつて突如開けた絶景。その見渡せる限りの風景の一方から他方までを一直線にかけ渡し、そのまま空の青と交わる彼方へ広がりにつつも、キラキラと一線を画して輝く水平線……！

「海ですかあ！」

驚いて飛び上がった風小が頭のとっぺんを思いつきり車の屋根にぶつけ、『ゴン』と言つ鈍い音と共に車の中が小さく震えた。

「ひでででででで」

頭を押さえながら風小がシートで悶絶する。

「お嬢ちゃん、大丈夫かい！」

運転手が心配そうに声をかけた。

「それにしても……」

笑いをこらえる声で運転手が続ける。

「お嬢ちゃん、よっぽど海が好きなんだねえ」

「いえいえ……、好きとか嫌いとか以前に、わたくし、本物の海を見るのが初めてと言っても過言では無いのデスよ」

風小があっけらかんとそう言っていると、一瞬の間の後。歩夢と運転手が「えっ！」と驚きの大きな声を八毛らせた。

「風小！海、知らなかったのか？」

歩夢の興奮した態度から、心底驚いているのが判る。

「知識としては知っておりましてし、写真も見たことが御座いますデスよ。もちろん、映像も……。飛行機からも見ましたデスねえ。」

しかし、こんなに本物を間近で見たことはございませんデスよ……」  
そう言って目をまん丸く見開きながら、切なそうにため息を漏らした。すると突然、Tシャツの襟首から手を入れると、携帯電話を引っぱり出し、ボタンを操作して耳に当てた。誰かが呼び出しに出るのを待っている様子だった。

「ああっ！姫さま！」

異常に興奮した風小の声が狭い車内にこだまする。

「海です！」

その一言を嬉々として叫んだ後、動きが止まり、急に放心したような表情になったかと思うと携帯を耳から離れた。

「切られちゃいました……」

泣き出しそうな顔をしながら、恨めしそうに携帯をただ見つめる風小だった。

「お……」

スクール水着姿の風小が、大きく両手を振り上げて、サイレンのように感嘆の叫びを上げると、砂浜で賑わっていた海水浴客達の言葉と動きが、一瞬、止まった。

「何という荒々しさ！何という力強さ！圧倒的な景観は、まるで、お空が抜けて落ちて来たようではございませんか！」

風小をあざ笑う者、無視しようとする者、訝しがる者……。辺りは再び喧噪を取り戻していた。

「いざあー！！！」

そう言っただけで波打ち際に走り出そうとした風小は、ふかふかな砂に足を取られ、前方に放物線を描きながらふっ飛び、顔面から着地したかと思うと、尚も勢い余り、身体をエビ反らせたまま前方に二回転半して、大の字にうつぶせて浜辺に張り付いた。

「ふふふふふ……」

不気味な笑いと共に、風小が半ベソの顔を上げると顔にしっかりと貼り付いた砂を拭う。

「しゃれた歓迎のあいさつをしてくださいませデスねえ……」

明らかに、強がりと判る、べそかき声でそう言っただけで立ち上がり、しっかと波打ち際をにらみ付ける。

「いざあー！！！！！」

走り出した風小の足を、ふかふかの砂が再び捉えた……。

「なにやっつてんのよん……あのばかあ……」

浜茶屋『源九浪』。おなじみの席で、茶碗酒をあおりながらその様子を見ていたレンレンが独り愚痴る。

「あつ、今度はさっきの二倍飛んだ……」

レンレンの隣に座って、いちごのかき氷をほおぼる歩夢が楽しそうに言った。

「馬力が有りすぎんのよん……。少しは学習しなさい……って」  
そう言っただけでレンレンは金魚柄の浴衣の襟元を直す。

「あらよお。元気な娘さんだねえ……」

おばちゃんが、運んできた料理をテーブルに並べながら、転げ回

る風小の姿を呆れるように見ている。

「うちの秘密兵器よん」

レンレンはそう言っ腕を組み、胸を張って見せた。せり上がった胸の谷間は、浴衣の襟元からこぼれ落ちそうになっている。

「レンレンさん！」

にこやかに足取り軽く、風小が源九浪に飛び込んで来た。

頭から足先まですぶ濡れで、どうやら波打ち際まではたどり着けたようだ。レンレンは推測した。

「海に頭から突っ込んで、波に揉まれて溺れかけてた……」

状況を見守っていた歩夢がレンレンに耳打ちする。

「しょっぱいです！聞きしにまさるしょっぱさです！砂です！波です！空です！太陽です！死にかけたことさえ心地よいです！」

「あらよお、何だか初めて海を見るような口ぶりだねえ」

興奮状態の風小を見ながら、おばちゃんがそう言っ高笑いをした。

「いいから、お座んなさいよん……」

おばちゃんをスルー気味にして、レンレンは風小を向かいの席に着かせると、茶碗を指し出し風小に渡す。

「ささ、まずは一献……」

そう言っ、傍らに置いてある日本酒の一升瓶から直接風小の茶碗にお酌した。

「わーい！」

うれしそうに茶碗を差し出し、お酌されながら、風小が瓶のラベルに目を走らせる。

「『海亀』ですか……。聞いたことのないお酒ですよ……」

一瞬、戸惑いを見せた風小だったが、手に持つ茶碗に並々とお酒が注がれていく様子を見て、すぐに嬉しそうな表情に戻る……。

いつもの風小ならば気づいていたはずだった……。だが、今日の風小は気づかなかった。いや、気づけなかった。何もかもが輝いて見えたし、何もかもが楽しすぎた。しかし、それは、深く静かに進



たかと思うと、肩で息をしながら満足げな笑顔を浮かべていた風小が、砂浜に崩れ落ちた……。その傍らには、源九浪から飛び出してきたおばちゃんが、鬼の形相で拳を握りしめ立っている。

「グーでぶつたあ！」

頭を押さえながら砂浜に転がる風小が、涙目でおばちゃんを見上げる。

「さっきぶつけたところお……」

恨めしそうに尚も訴える。

「あらよお！お酒を粗末にするなんて！しかも、あのお酒は『ものわけさん』の御神酒だよ！罰が当たる前にさっさと捨てといで！」

えらい剣幕でおばちゃんがそう言つと、真っ直ぐ沖を指さす。

「あえええ。罰ならたつた今いただきましたデスう……」

風小は、そう言いながらもゆっくりと立ち上がり、遠い目をして沖を眺める。

「とはいうものの……」

そのままゆっくりと海に向かって歩き出した。

「確かに食べ物を粗末にいたしますのは関心いたしませんデスよ……。私も一時の激情に流されて、やってはいけない事をしましたと、素直に反省させていただきたいと思えますよ……」

ぶつぶつと呟き、風小は波に揉まれながらゆっくりと海に入っていく……。ざぶざぶと腰までの深さまで進んだ時、一際大きな波が風小を飲み込み、彼女の姿が波間から消えた。

やがて……、消えた波間に風小が再び現れるのを、波打ち際で待っていたおばちゃんの足下に、ふと気づくと、鼻水と涙にまみれた風小が糸の切れた操り人形のようにぐったりと流れ着き、寄せては返す小波に弄ばれ、もみくしゃにされているのだった。

「あらよおー！なんだよ、アンタ、泳げなかつたのかい！」

風小を波打ち際からすくい上げ、肩を貸しながらおばちゃんがそう言つと風小は大量の水を吐き出し、激しく咳き込みだした。

「げううううええええ……。じぬううううう……」

尚も苦しみ悶える風小の脇を尻尾の先が折れた蒼灰色の猫が通り抜けて行き、波打ち際まで歩いていくと振り返り、緑色の瞳を風小に向けて、「にゃあ」と鳴いた。

「あえ？オマエさまは確か、駅で……」

猫は、風小が自分に気づいたことを確認するように、再び鳴き声を上げると、ゆっくりと海へと入って行き、犬かき（猫かき？）を始め、器用に波を乗り越えて、沖に向かって泳ぎ始めた。

「な、なるほど！」

暫く、おばちゃんに肩を貸して貰いながら、その様子を見ていた風小は、突然、両手のこぶしを握りしめると叫んだ。

「上方に頭部を上げ、気道を確保！両前足で水を掻き、後ろ足で水を蹴ることによって浮力と推進力を確保するのデスね！」

風小はそう言うと、支えて貰っていた身体をおばちゃんから離し、厳めしく砂地につつ立った。

「完璧です！完璧デスよ！同じ目を持つお猫さま！」

言うが早いか、雄叫びと共に海へと突っ込んでいく！

「あらよお！おまちよ！お嬢ちゃん！」

呆気にとられてその様子を見守っていたおばちゃんが、思わず叫んだその時だった。

風小の目の前に高い壁のような波が出現し、激突したかと思うと、再び風小の姿が波間から消えた。

「あらよおー！」

両手を頬に当てておばちゃんが驚愕の叫びを上げる。

「風小おー！」

いつの間にもやら浜茶屋から飛び出していた歩夢も、おばちゃんのかたわらで風小を呼んでいる。

「やああって……」。

水柱のような飛沫が波間に現れたかと思うと、徐々に静まってきた、そこに風小の顔がぷかりと浮いた。

「うおおおおおおおおー！」

いさましい叫びと共に、風小が水を掻く両手のスピードを上げると、身体がゆつくりと海面に浮上し始める。

「浮力確保！完了おおおおお！」

そう喚くと、今度は、水面に浮き始めている足の、蹴り出す力を次第に増して行った。

すると、次の瞬間！水を掻く力と、蹴る力のバランスが均等になり、風小の身体は、まるで犬掻きをするホバークラフトの様に激しい水しぶきと共に水面に浮上した。

「後方バタ足！ぱわー・あっぷデスよ！」

水上に身体を浮かした状態のまま、足が水を蹴る威力が増大されていく！そして、遂に、風小の身体は推進力を手に入れた！

水面を最初ゆつくりと……。やがて、滑るように『走り出す』風小！

「な、なんか、全部間違ってるけど！すっげえー！」

「あ……、あらあ、よお……」

歩夢が思わず手を叩きながらはしゃぐと、放心状態でこの有様を眺めているおばちゃんが、つられるように力無くぱちぱちと拍手をする。

大小の白波が、風小の行く手を阻むかのように向かって来たが、そのすべてを、まるで切り裂くようにして風小は進んで行く！やがて、沖合に近づき、波が消え、大きなうねりに変わり始めると、そのうねりに合わせるように、パツパツのスクール水着からハミケツした風小のお尻が、波の力を相殺するかのようにへこへここと上下運動を繰り返し、さらにスピードが増していったかと思うと、ついには見えなくなってしまった。

静かになった海辺で海水浴客達は、一体何が起こったのかが理解できず、超常現象の類に見舞われたのでは無いかと考える者まで現れて、小さな騒ぎになっている。

無理もない話だった……。何が起こったのかを理解しているはずの歩夢とおばちゃんですら、海を見つめ、ただその場にたたずむ

しかなかったのだから……。

いつまでそうしていたのだろうか、ふと、おばちゃんは何者かに肩を叩かれ、正気を戻して振り向いた。

そこには、丈の短い浴衣を着込み、脚を露わにする様の隻眼の美女レンレンが立っている。

満面の笑みを浮かべ腕組みすると、赤と黒の琉金の柄が、誇らしげなレンレンを讃え踊るように見えた。

「エントリーするわよん」

沖合に再び大きな水しぶきが立ち始め、こちらに近づいて来るのを見ながら、レンレンの瞳に微笑みが浮かぶ。

「明日の大会に！風小！召喚よん！」

酒瓶を口にくわえ、もの凄いスピードで戻ってくる風小を遠く望みながら、レンレンがそう言って高らかに笑った。

その旅館は、旅館と言うよりは旅籠屋と言った方がしっくりと来る、そんな木造二階建ての古めかしいたたずまいで。黒々とした瓦屋根には大きな鬼瓦が乗っており、ぱつと見その造りは、お寺の本堂を思わせるかも知れない。入り口の格子戸脇には『旅館豊玉』と掘られた、ごつく黒々とした木の看板が下げてあり、これもまた歴史を感じさせるものだった。

海には遠からず近からず、海水浴場と繁華街のちょうど中間。町の観光拠点とするには最適のロケーション。

日が暮れて間もない頃。そんな豊玉の庭先に、一台のワゴンタクシーが横付けされた。後部座席のドアが自動で開き、紺色の安っぽい紋付羽織袴の男が降り立つと、タクシーの車高が倍ほどに膨らむ。男はタクシーをそのまま待たせると、格子戸を開けて旅館の中へと踏み入る。

「これは、これは……。ようこそおいでくださいました。当旅館の女将でございます」

玄関の気配に気づいた女将が、淡い桃色の和服姿で男を出迎えた。

紋付袴と両手には白手袋。その左手には赤い和装のおかつぱ頭をした女の子のお人形を抱いている……。特徴のあるその容姿から、この男の素性は紛れもない。今、テレビで売り出し中の退魔師。生川・ルークその人とすぐに確認できた。

「予約をさせて頂いた生川・ルークです。この度は、色々ご無理をお願いして申し訳ありません」

そう言って深々と下げた頭を上げると、人形を支えるように添えていた右手を離し、外のタクシーを指し示す。白い手袋が外の闇に映えた。

「お話してありましたように、少々、荷物が多ございます。部屋へ運び入れるのを手伝ってはいただけませんかでしょうか？」

「いえいえ、それには及びません」

女将は奥に向かって「お着きだよー！」と声をかけると、再び生川に向き直った。

「もしよろしければ、すべてうちの者で運ばせて頂きます。ただ、もし、人には触られたくないと言うような大切な物が有りましたらば、貴重品の指示さえしていたければそれには手を付けません」

女将がそう言うと、生川は小さく首を振って答えた。

「いやいや、貴重品と名の付くようなものは何もありません。すべて私以外の人間にはガラクタ同然の物ばかりです。いや、運んで頂けるといふのならありがたい、ぜひにお願いしたいと思います」

生川はそう言って、女将の進めるスリッパを履いた。

「お部屋はご指示のとおり、奥の離れをご用意しておきました。ただ、あまり景観はよろしくないのですが……」

「それはまったく問題有りません。ありがとうございます」

そう言ううちに、女将が事前に段度つていたのであろう五人ほどの旅館の者達が、会釈しながらいそいそと生川の脇を通り抜けて、タクシーの止まる庭へと出て行った。

「それと……生川様」

女将が先に立ち、生川を部屋へと誘いながら話を切り出した。

「部屋の襖と畳に墨絵をお描きになりたいとの事でしたが……」

「はい」

生川は懐から出した紫色のハンカチで額をだらだらとにじみ出る汗を拭いながら、答えた。

「ええ、どうしても『祭』に必要なのです。もちろん、汚してしまつたものはすべて買い取らせていただきます」

「いえ、そうではなくて……」

「はて？」

生川が額を拭く手を休める。言いづらそうに女将が口を開いた。

「じつは、大変ぶしつけなお願ひではありますが、もしよろしければ、その絵をそのままこの旅館で使わせていただけないでしょうか？何なら、買い取らせていただいても結構です。旅館の名物にしたいと存じます」

女将がそう言つてちらりと生川へ振り向くと、生川が、大きな腹をせり出すようにして大声で笑つた。

「いやいや、出来ても無いものを商談するわけには行きませんなあ。ええ、解りました。もし、完成品を見て、気に入っていただけたならご無理を聞いていただいた御礼に、ただでお譲りすることにしましょう」

そう言つと、女将に顔を近づけ、小声で続けた。

「ただし、その際も、張替えのお代は払わせて下さい。私の前では『気に入らないから要らない』とは言ひ辛いでしょからなあ……」

そう言つて生川が再び大きく笑つと、女将は生川の気さくさに驚いた様子で「まあ！」と言つてつられるように笑つた。

確かに、生川の言うように、出来てもいない作品に対して、値踏みするような真似は早計過ぎたと女将は反省した。結果を焦り過ぎて意地汚い真似をしてしまったと後悔もしていた。生川の対応に救われたと感じた女将は、今はひとまずその話を控えることにしようとして、小さく会釈すると先へと進む。

渡り廊下を抜けて、尚も奥に進んでいくと、廊下の並び、一番奥



花火はクルクル回って火の輪になり、夜陰の空間に大輪の花を咲かせた。やがて、火の粉を散らしながら落ちてくる花火の輪を、風小が器用に受け止めて再び空中に放り出す。風小が伸び上がる度に、Tシャツのドクロのイラストは、彼女の胸で笑うように踊った。

まるで、大道芸人のお手玉のように花火の輪が中を舞い、そして、輪の軌跡に、まあるい煙の跡を浮かび上げ、水玉模様を夜の闇に貼り付けて行く……。

「水玉！火の玉！漆黒の夜色に映えて！夜涼の一興、感じて頂けましたら恐縮至極ー！」

風小が口上を述べながら、『お手玉』のスピードを上げていく！「すげええー！風小！！！！！」

縁側でレンレンの脇に座り、庭の真ん中で次々に風小が繰り出す人間離れた演技を観覧しながら、興奮気味に歩夢が身体を揺らし、歓声を上げる。レンレンを挟んで反対側には老婆がちょこんと正座して彼女の方を向き、ゆっくりと団扇を振りながら、レンレンに風を送っていた。

「文字通り『神業』ねん」

風小は人の形をしてはいるが人間ではない。鬼追師の姫緒が盟約を結ぶ『あやかし』……。式神である。その正体は赤い扇の付喪神つくもがみ人の世の言う『神』とは多少違いはしたが、神の名を冠していることには違いない。

レンレンは、冷酒の入ったグラスをあおりながら、何かを風小に目配せすると、風小がそれに答えるように、にっこりと頷き、花火をすべて手に納め火を消した。

「さあさあ、歩夢さん！見ているばかりでは本当の醍醐味が御座いませんデスよ！一緒に、醍醐味ましょうデス！」

そう言って、風小が花火の詰まったパツクを差し出すと、待ちかねたように歩夢が走り寄り物色し始めた。

「ねえ……」

見計らったようにレンレンが、老婆に語りかける。

「ちょっと宿題の答えあわせをしたいんだけど……」

老婆はただ静かに微笑んで団扇を左右に振っている。

「私はねえ、この町に何か秘密があるんだと思っていた。うーと……。そうじゃなくて、『知られてはいけないこと』ではなく、他の人が『知らないだけのこと』……。て、ことは厳密に言えば秘密じゃないわねん」

そう言っつてグラスをあおる。

「とにかく……。だから、私は鍵穴を探した。その秘密を知るための鍵穴……。それはどこかに隠れているはずだった。病院、裏山、あるいは『ものわけさん』……」

庭では歩夢と風小が花火を始めた。歩夢の花火が彩りの火花を散らし出すと、彼はそれを誇らしげにレンレンに振って見せる。

「でも、違った……」

レンレンは、そう言っつて自嘲ぎみな笑いを浮かべた。

「それは、隠れていなかった。その鍵穴が見つからなかった理由は『大き過ぎた』から。あまりに大きくて気が付かなかった。この町すべてを飲み込むほど大きな鍵穴。つまり、この『秘密』は『あたりまえ』の事……。子供から大人まで、生活する中で呼吸をする事のようにあたりまえにある日常」

レンレンの瞳が小ずるく光る。

「この町には妖怪が住み、ここの子供は風を読む……。それが当たり前の日常……」

レンレンがそう言っつと、老婆は団扇を振る手を止め、その場に置いて座り直すと、口を開いた。

「ひとつ、年寄りが昔話をお聞かせするでしょう」

「？」

「あるところに、小さな漁村があったそう。その漁村の土地は痩せて、作物も家畜も村を潤すほどの収穫が出来なんだ。村は海産物の収穫だけに頼らざるをえなんだが、それすらも、豊かというほどの物ではなかった。村人達は、わずかな収穫から、生きるためにギ

リギリの食いぶちを確保し、残った海産物をほかの町に行商することと、少々の金銭を手に入れておった……」

深い皺の表情を変えることもなく、とつとつと語り続ける老婆。

「年に一度。大切な海の幸を恵んで下さる海の神様に、村を挙げて大祭を開いた。その祭りのために大切に育てた家畜……。陸の恵みを生け贄として捧げ、感謝の意を表したと言うことじゃ」

「この町の話なの？」

老婆は答えない。

「そんなある時……。都で陰陽師との鬪いに敗れ、落人となった退魔師の一族が追っ手を逃れて、その漁村へとたどり着いた……」

「！」

「一族はその土地の山奥に落人部落をつくり住みついたが、すぐにその土地が、霊的にも貧弱で、そのうえ、誤った大祭による不浄化により、死滅しようとしていることを突き止めたのじゃ」

「……」

老婆は話を続ける……。

退魔師の代表と村の代表が話し合い、取引をした。

「その結果……。退魔師達は霊波的環境浄化を行う事を条件に、村へ受け入れてもらい、追っ手からかくまってもらう事となった」

二つの種族が共同の営みを行うに当たって、退魔師の妖術を恐れ、た村人と、村人の無知を恐れた退魔師達との間に約束事が取り交わされた。「勿<sup>なかれ</sup>」の戒め……。

「汝、侵<sup>なかれ</sup>ス勿<sup>なかれ</sup>、疎<sup>なかれ</sup>ム勿<sup>なかれ</sup>」……。

互いに干渉せず、互いに忌み嫌うべからず。

霊力によって町を護る者、退魔師達をかくまう者がそれぞれ退魔師と村人の中から選び出され、その役割を果たす者達の役割を『物』と称して『者』と区別した。退魔師をかくまう物達は『浪ノ物』と呼ばれ、村を浄化する物達を『山ノ物』と呼んだ。

『者』を『物』に分けたこの契りを『者分<sup>ものわけ</sup>』と呼び、霊場は新た

に『ものわけ』の名で呼ばれる事となる……。

老婆の話が終わった。

ニコニコと笑いながら立ち上がると、難儀そうに庭へと降りる。

「ちよつとまちなさいよん！その退魔師の一族って、ひよつとして……」

そこまで言つて、レンレンが視線をやった老婆の後姿のその先に見たことがある、やせっぽちで背が高い女の子が竹編みの大きなザルを持って立っているのが見えた。

「キッコかい？何かお使いかい？」

老婆がそう言つてゆっくりとキッコに近づいていくと、キッコも、茶色く焼けたロングヘアを揺らしながら走りより、歩夢と風小が花火で遊ぶ脇を抜け、縁側からあまり離れない所で老婆の前に立った。

「深山のおばあちゃん、こんばんわ」

キッコはそう言つて挨拶すると、手に持ったざるを老婆に差し出した。ざるには、トウモロコシが6本盛られており、つやつやと大きな黄色い粒から、まだ、うっすらと湯気を立てている。

「お母さんが、深山のおばあちゃんのところにお客さんが来てるから持つていけつて！朝もぎしたとうもろこし！」

「おやおや、ありがたいねえ。ほらほら、歩夢、風小、暖かい内にいただきますい」

老婆がキッコからザルを受け取りながら二人に声をかけた。

「あとで！」

歩夢は花火に夢中な様だ。

「あ……」

風小は一瞬、物欲しげな顔つきをしたが、レンレンの様子を伺い、まだ自分の役目が終わっていないようだと感じて歩夢に付き合つことにした。

「わ、わたくしも、あとで……」

老婆があきれ果てた顔をする。

「暑かったろ。サイダーでも飲んで行きなさい」

老婆はキッコにそう言っつて、とうもろこしの入ったザルをレンレンの脇に置くと、縁側に上り、そのまま振り向きもせず家の奥へと消える。

「一緒に花火でもやれば？」

レンレンがいつまでも突っ立ったままのキッコに声をかけた。

「ネモさん……」

キッコがおずおずと口を開く。

「ネモでいいのよん」

やぶにらみしながらグラスを口に運び、レンレンが答える。キッコが戸惑うような表情を見せた。

「誰でも私を呼ぶときは、ネモでいいのよん……」

キッコの表情が明るくなる。

「ネモ。私、横にすわってもいい？」

レンレンは親しげな笑顔でキッコに小さく頷くと、花火に興じる風小達へ視線を移した。キッコは縁側に腰掛け、そんなレンレンを、そわそわと、そして、ためらうようにしばらく眺めていたが……。小さな声で囁いた。

「ネモ……」

「ナニ？」

突然目を合わせて来たレンレンに気後れするようにキッコは下を向いた。

「ネモ……。アノネ……。私、同じクラスの子の中で一番背が高いの……」

キッコがレンレンと目を合わせる。

「男子よりも大きいんだよ、一年上のクラスの人たちとでも大きいほうなの……」

「ふーん」

と、なれば、キッコは年上ではなく、やはり歩夢と同じ歳くらい

なのだろう。

「でもね……」

キッコが浮かない顔になり下を向いた。

「わたし……。クラスで一番……」

聞き取れない声で何かを言っている。

「？」

言葉を聞き取ろうとレンレンが顔を近づけると、それに気づいたキッコは彼女の耳元に口を寄せてささやいた。

「クラスで一番……胸がちいさいノ……」

そう言っただけで恨めしげにレンレンの一点を凝視する。その視線の先は……。

浴衣からこぼれ出しそうなレンレンの胸だった。

「およ？」

レンレンが自分の両胸を持ち上げて見せて、これで間違いないか確認する。キッコは小さく頷いた。必死に笑いを堪えるレンレン。キッコの顔が真っ赤になり、口をへの字にする。

「真っ黒で、やせっぽちで、ひよる長くって……。男子がね、マッチの燃えカスみたいだっていうんだよ……」

「あのガキもそう言ったの？」

レンレンが庭先の歩夢を指差して尋ねた。

「うっうっうん」

キッコが激しく首を振る。

「歩夢くんは言わない……。他の男子も歩夢くんの前では言わない

……」

「かばってくれるの？」

レンレンがそう言うと、キッコが小さく頷いた。

「やさしいんだ？」

「歩夢くんはみんなにやさしいよー！」

あたふたと弁解するようにキッコが答える。

「ねえ……ネモ……」

「なあーにいい？」

意地悪い微笑を浮かべて返事をする、レンレンの視線を避けるようにして、キッコが口を開いた。

「どうしたら……。おつきくなる？ムネ……」

キッコの表情はこの上も無いほど真剣だった。

「かつてに大きくなるわよん。『女』になればね……」

「わ、わたし、女だよ！」

キッコは真剣に怒っているようだった。

「『女の子』……でしょ？」

「大人になればってこと？お母さんもそう言ったケド……」

そう言ってキッコはそっと胸に手を当てた。

「違うわよん……」

レンレンがキッコのアゴを掴み自分の方へと顔を向かせる。

「『女』よん！おんな！ガキでも大人でも関係ないわ！ここに……」

自分の胸を叩く。

「世の中のいろんな事を、これでもかっ！ってくらい詰めて、詰めて、詰め込こむのよん！そうするとね、胸を張らなきゃいけないほど苦しくなるの、それで、胸の奥のほうが飛び出して来るほど熱くなるのよん！いてもたってもいらなくなるからね！その気持ちをもって外へ出るの！それで、見つけるの！」

「何を？」

「自分の胸をもっと熱くしてくれるもの……」

「？」

「わかるわよ。女になれば……」

「わたし……。なれる？」

「女の子はいつか必ず女になるのよん」

キッコの顔が輝いた。

「キッコー！線香花火で誰が一番長く出来るか競争しようぜ！」  
歩夢がそう言って花火の束を振りかざす。

「ほら！詰め込んで来い！」

そう言ってレンレンがキッコの背中をポーンと叩くと、キッコは一瞬、驚いたような表情を見せたが、すぐに微笑み、頷くと、歩夢達のもとへと駆けて行った。

「さあて！」

レンレンは、脇に置いてあるザルからトウモロコシを一本鷲づかみにすると、リングでも丸かじりするようにかぶりつき、食い干切る。

「まずは、あの『粗品』に一泡吹かせてからってことよん！」

そう言って、レンレンはさも満足そうに手の甲で口を拭いた。

その日、朝早くから気温はどんどんと上がって行き、『カキ氷早食い大会』の始まる昼前には、とっくにその夏の最高気温を軽く更新していた。

気絶しそうなくらいの太陽の直射。その下で、当日のエントリを済ませた風小にレンレンが何事かをミーティングしていた。

「わかったわねん」

腕を組んだレンレンが念を押すように風小に確認する。

「ちりすけデスよ！」

風小が答える。とりあえず自信はあるらしい……。

「じゃ、あたし等、観客席で見てるから……」

そう言ってロープで仕切られただけの観客席へと踵を返す。

「がんばれよ！風小！」

歩夢がそう言ってレンレンの後を追う。

「おまかせくださいませよ！」

そんな二人を風小が元気に手を振って見送った。

レンレンは、しかし、真直ぐに観客席には向かわず、『竜宮町町内会』と書かれたテントで屋根を作り、折りたたみの長机とパイプ椅子を並べて作った『大会事務所』と立て看板が出ている一角へと足を向け、そこで陣頭指揮を執るパンチパーマの女性を見つけると彼女の前に割り込むように立ちはだかった。

「勝つわよん……」

レンレンが腕を組み仁王立ちすると、それに応えるように腕を組み、源九浪の女将……、おばちゃんが胸を張った。

「あらよお！ 返り討ちだよ！」

不敵な笑いが二つぶつかり合う。

「どうでもいいけど……」

レンレンの顔に嘲るような笑いが浮かぶ。

「退屈させないでねん」

「あらよお……」

おばちゃんが芝居がかつた仕草で目を伏せて首を振る。そして、鋭い眼光をレンレンに向けた。

「おねえちゃんに聞くのも何かもしれないけど……、物を知らないおばちゃんに一つ教えてくれないかい？」

「？」

「『タイクツ』って言葉は……日本語かい？」

再びぶつかり合う眼光と眼光！ 一触即発のそのとき……。

「えぶりばでいー！ み、な、の、しゅー！」

盛大なハウリングの後、海岸にラウドスピーカーの音声が響き渡った。会場から歓声上がる。

「あらよお。始まったようだねえ……」

砂浜の方を見ると、真っ黒に日焼けした茶髪の青年が、ダボダボの派手な海水パンツに蝶ネクタイのチヨーカーと言う出で立ちで、無意味に大きなハンドマイクを片手に、観衆の歓声に応えている。

青年は、分厚く、あたかも強い度が入っているかのようにぐるぐると渦を巻いたおもちゃのメガネを掛けて、鼻の下には、おおげさに先端の跳ね上がった髭を左右に油性ペンでメイクしている。気合は認めるが、そのあまりのあざとさは、初めて彼を見るレンレンにはちよつと引くものがあつた……。が、歓声の中には青年の名前と思われる「タケちゃん！」という声を掛ける者も多くおり、地元ではそう言う芸風の有名人なのかも知れなかった。

「あらよお。ここで、見て行きなよ……。あんたはあたしのお客人だからねえ。特別にご招待だよ！」

呆氣にとられて立ち尽くすレンレンにおばちゃんが声をかけ、パイプ椅子を歩夢の分と二つ差し出した。

「今年もやってきたザンスー！ものわけさん大祭前の奉納試合！海の家源九浪主催！『かき氷早食い大会』ザンスー！」

海パン一丁の腰をくねらせ、愛おしそうにマイクに顔をすりつけるタケちゃんの、奇怪な語尾の物言いが砂浜に響き渡る。わき起る歓声！

「お手伝いスタッフわあ、海の家源九浪のあんちゃん達ー！オレンジハッピの憎い奴！おなじみー『ゲンクロウズ』！ザンスー！」

紹介のアナウンスに応えるように、源九浪の文字が背中に入った揃いのハッピ姿に色とりどりのビキニパンツをはき、競泳用の水中メガネという出で立ちの、二十人ほどの青年達が一斉に手を振り挙げて歓声を上げた。

「大会中、なにか困ったことが有ったならば、会場に散らばってるゲンクロウズに微塵も情け容赦なく言い付けるザンスー！そして司会はー！」

そう言つてタケちゃんがおもむろにパンツを脱ぎ始めた。飛び交う怒声と黄色い声！脱いだパンツの下からは紫色の紐パンが現れる。「ゲンクロウズのヨゴレ！あ、な、た、のタケちゃん！ザンスー！」

そう言つと、メガネを外し放り投げ、頭髮に手をかけた。その手を思いつきりに持ち上げると、茶色い頭髮は頭から離れ、下から青々としたスキンヘッドが現れる。再び起こる大歓声。

「まずは、初めての、あ、な、た、のためにルール説明イクツ！ザンスー！」

そう言つと、タケちゃんは自分の後方左右に設置された、長机の方へとぎくしゃくした足取りで歩いていく。机は全部で十六あり、八つずつを横に並べ10メートル程の間隔を設けて向かい合うように設置されている。向かつて左側の机の列には大会の出場者と思わ

れる風小を含めた老若男女十五人の集団が、首から提げて脇で止めるタイプのゼツケンを付けて待機しており、反対側の机にはレトロ調手回し式の厳つい氷かき器が10台、横一列に陳列されるように並べられていた。

「よいドンで自席から離れた10台の氷かき器の有る配給所のいづれかの場所より、器に盛られたかき氷を受け取って、自席に戻ったら早食い開始ゼンス！」

タケちゃんの説明が合図であったかのように、十人のゲンクロウズがそれぞれ一人ずつ、かき氷器の脇に待機した。

「完食した後は、再び配給所へと走り、新しいかき氷の入った器を受け取って……の繰り返し！10分間の間に何個のかき氷を『完食できるか』を競うゼンス！」

タケちゃんのテンションに会場が盛り上り出す。すると、待機していたゲンクロウズ達が自分たちの後ろに置かれているダンボール箱を漁り出し、両手にガラスの器を持ち出して、会場の歓声に応えるかのように掲げながら小躍りした。

「な、なによん！あの器！」

レンレンが驚くのも無理はなかった。多分、競技に使われると思われるその器は、普通にラーメンどんぶりと変わらぬほどの大きさだったのだ。

「ただし、競技中に完食できなかった場合……器を落としてこぼしてしまったり、器から崩してしまった場合は、一杯分のペナルティーが課せられるゼンス！だ、け、ど！終了のホイッスルがなった時の食べ残し分はペナルティーにならないゼンスからねー！最後まで諦めないでがんばるゼンスよー！」

「あらよお。覚悟はいいかい？お嬢ちゃん」

おばちゃんが不敵にレンレンを挑発する。

「ふん！アンタの姑息な策略はすべてお見通しだわよん！」

負けじとレンレンが毒づいた。

「これから先わあ！のん・すとつぷ！」

天を指差し、恍惚の表情で腰をくねくねとくねらせながら、タケちゃんが叫ぶ。

「位置について！」

不意打ちのようにそう言うと、タケちゃんが紐パンから、真っ赤なハンカチを引っ張り出して高々と振り上げた！

「よーい！」

参加者達が机の前に並び、それぞれにスタートの準備をする。すると、手回し式氷かきのハンドルをゲンクロウズ達が威勢の良い「セイヤ！セイヤ」のかけ声と共にそろって回しだした。

「す、たあーとおううううううう！」

タケちゃんが勢いよくハンカチを振り下ろすと、選手の固まりが我先にと氷かきのある机目がけて飛び出した。

「セイヤ！セイヤ！」

「セイヤ！セイヤ！」

「セイヤ！セイヤ！」

向かってくる選手に負けじと、ゲンクロウズ達のかき氷を作る手とかけ声にも力が入る。

走り慣れない砂場の為か、競技者達の足並みは遅く、足をもつれさせて転ぶ者も少なくない……。そんな中から……。ゼッケン2番を着けた選手が矢のように飛び出した！もはや確認するまでも無い。それは、あのカーキチ男、しげちゃんだった！

「しげちゃんーん！」

あちこちから、声援が上がる。その期待に充ち満ちた彼への励ましの声に、おばちゃんの言うとおりこの町で彼はヒーローなのだ。レンレンはさとり知る。

しげちゃんはあつという間に、『どんぶり』に入ったかき氷を両手で受け取ると席へと戻り、大きなスプーン片手に山のようなかき氷をかつ込みだした。ほかの一団は、やっとかき氷にたどり着き、折り返しに入ったといった具合だったが、帰りの行程では、やはり大半の選手が足をもつれさせていた。持っている器はラーメンどん

ぶりほどあるので、両手で支えなくてはならず、一度身体のバランスを崩してしまうと、態勢を立て直すのは非常に困難だった。あせればあせるほどバランスを崩し、ころんで器を落としてしまう者が、行きの行程以上に続出する。

「はい、11番、6番、8番の選手は器を落としたので、食べる前からマイナス1杯ザンス！」

タケちゃんの戦況報告が場内に響き渡る。だが、その戦況報告に上らないところで、その異変は起こっていた……。全員が折り返した、会場の誰もがそう思った。一瞬後、場内がざわめきだした。誰もがその異常事態に気づきだす……。

「4番さん！4番さん！どーしたザンスか？おなかでもイタイザンスか？」

選手の集団を追いかけていたために、実況のタケちゃんすら気が付かなかつた異変……。

亜麻色の髪の娘……。スク水を着た4番の選手がスタートラインでうつむいたまま立ちつくしている。

「風小……。どうして動かないんだ？」

心配そうに歩夢がレンレンに尋ねた。そう、風小は競技開始からずっと、その場にじつとうつむいて立ったまま動こうとしない。

「私、考えたの……。『しげちゃん』がチャンピオンでいられる理由が何か有るはずだってね……。だから、お風呂の中でこのガキに大会のルールを事前確認したのよん……。」

レンレンはそう言って横に座るおばちゃんに嘲笑するような視線を向ける。

「ただの早食いなら、それもよし……。だけど、やっぱり『タネ』はあった！なるほど、砂の上を走るなんて事、あまり普段からやっている奴なんていないわよね。案の定、このザマよ。それに比べて、カーキチ野郎は慣れていると言うよりは、かなり上手いわ！つまりそれがこの競技にカーキチが常勝のタネだったのよ！」

「だから、諦めたって言うのかい！」

昨日の浜で転げ回る風小を思い出しながら、蔑むようにおばちゃんと言った。

「あらよお……。おばちゃんアンタには失望したよ」

おばちゃんが大きなため息をつくとき、レンレンはおかしくてしょうがないというように笑い出した。

「私になぜ、昨日、風小を一日中放し飼いにしていたと思うのぉ？」  
「？」

「確かに昨日、初めての砂浜で風小は戸惑っていたわん。昨日の風小だったら勝てなかったわよん。でもね、あんたも見たでしょ？風小がどうやって泳ぎを覚えたか！」

レンレンがそう言っていると、おばちゃんは「あつ」と小さく叫んで身を固くした。

「理屈を根性で補完する娘！風小の身体能力を持つてすれば、昨日一日でこの砂浜の性質を把握しきることなど造作無い事よん！そして……。あんたも知ってるよね！風小の化け物じみたあのパワー！」  
言うてレンレンが椅子から立ち上がった！

「待たせたわね風小！」

レンレンが、砂浜でたたずみうつむく風小に叫ぶと、彼女の肩がひくりと反応して、静かに顔を上げた。

「余興は終わったわん！」

その時！一杯目のかき氷を片づけたしげちゃんが、二杯目を手に入れるために自席から飛び出す！

「GO！風小！」

レンレンの合図と共に、風小も飛びだした！

早い！

まるで、整備された競技場のトラックを走るように駆けていき、あつという間にしげちゃんに追いついて……。追い抜いてしまったに及んでは、一瞬間啞然としていた会場が、大歓声に包まれる！  
「いつたい、あいつは誰ザンス！とんでもない娘が現れたザンス！走る速さもさることながら！スク水のコスプレがミーより目立って

悔しいザンス！」

そう言って悔しそうに腰をふるしげちゃんが会場の失笑を買う。

器を受け取ったのは風小もしげちゃんもほとんど同時！だが、その後は風小の独壇場だった！あつという間にしげちゃんを引き離し席に戻る。そして、器を口に付けるとそのまま仰向き、氷をスプーンで口に流し込むように掻き込んで行く！器に高々と盛られた苺シロップのかき氷を、瞬く間に、風小は喉を鳴らして『飲み込んで』行く！

静まりかえる観客達、他の選手達の大半もその光景を啞然と見守るしか無かった。その時、大きなハウリングがして、タケちゃんの声が鳴り響いた。

「み、な、の、しゅー！ゼツケン4番！謎のスーパー・スク水美少女の詳細がたつた今！本部より届いたザンス！お名前は『風小』ちゃん！年齢不詳！お仕事不詳の観光客様だあ！風小ちゃん！竜宮町へようこそ！」

「竜宮町へようこそ！」

ゲンクロウズの面々が、タケちゃんに応えるように、拳を振り上げゴダマコールする！

観客達がどよめき出す。そんな中……。

「ふうこー！」

レンレン達の座る大会事務所のテント正面の観客の中から、風小を応援する少女の声……。レンレンが目を凝らすと、背の高いやせっぽちの女の子が、他の子供達の間から伸び上がり、両手を口に当てて拡声器のようにして叫んでいる。

「ふうこー！がんばれえー！」

「キッコだ！」

歩夢がレンレンの方を振り向き『そっだよね』と言うように目を輝かせた。レンレンが小さく頷くのを確認するが早いか椅子から飛び出し、テントを出た辺りで立ち止まると、キッコのまねをして叫んだ。

「ふうこおー！がんばれえー！」

それが口切りになった。砂浜に『しげちゃん』、『風小』の応援合戦が巻き起こる。

満足そうな表情でレンレンがおばちゃんに視線を送った。

「どうよ！」

それは、レンレンにとつての勝利宣言の筈だった。しかし、すっかり意気消沈していると思われたおばちゃんは、真っ直ぐにレンレンを見つめ、薄ら笑いすら浮かべているのだった。

「あらよお。いい読みだったけど……。詰めが甘かったようだねえ」「な、なにを負け惜しみを！」

一抹の不気味さを感じながらも、レンレンがたしなめた。

「あらよお、負け惜しみなもんかよ……。ほんとの勝負はこれからなんだよ！」

おばちゃんの貫禄に、レンレンが戸惑った。負ける要素など何もない。無い筈なのだ、いくら考えても思い浮かばないのだから！

何かが……。これから、何かが起ころうと言うのか？

「速報！イクザンスよー！」

タケちゃんの実況が入る。

「現在までで、一位はゼツケン4番！風小ちゃん！記録は3杯！現在4杯目を流し込み中ザンス！つづいて、2位にゼツケン2番のしげちゃん！記録は2杯！現在3杯目をかっ込み中ザンスー！3位は……」

最初の一杯分のハンデを既にはねのけ、その上1杯逆転している。これから差は付いていく一方だろう、一体それ以外のどんな展開があるというのか……。

辺りを見回したレンレンは、ふと、参加者達と会場に奇妙な行動が起こっているのに気づいた。

何故か、大半の参加者達が、スプーンを持つ手を止め、固まったように動かなくなっていた……。会場は、『タケちゃん』が何をしているわけでもないのに、大勢の笑い声が、突発的にわき起こって



得した『頭がキーンとならないギリギリスピード』！これこそが、ほんとうのしげちゃん常勝の秘密なのさ！」

「フツ……」

勝ち誇ったように語るおばちゃんに、突然レンレンがせせら笑いを浮かべた。

「いい事聞いたわよん……」

そう言ってゆっくりと椅子から立ち上がると歩夢の脇に仁王立ちする。

「あ、あらよお、何をしようってんだい……」

おばちゃんが訝しがる。

「言ったでしょ……。勝つって……」

「風小、勝てるの？」

歩夢が心配そうにレンレンを見上げた。

「だから……。言ってるでしょ？勝つよん！」

そう言うと、少し先で、地面に転がって戦意喪失している風小に視線を向ける。

「まず、あのレンタル品を何とかしなくちゃね……」

見れば、しげちゃんは4杯目を完食、5杯目を自席に運び終わっていた。風小の完食数は2杯で変わらず。その差は2杯……。

「風小ー！」

レンレンが叫んだ！

「私は、アンタを『勝つ』ためにここに呼んだのよん！そして、アンタの『姫さま』姫緒はそのためにアンタをここによこした！ここで、アンタが万が一負けるようなことがあったら！そんなときゃアンタ、ただの役立たずなのよん！」

風小は動く気配を見せない。

「解ってんの？アンタが負けると言うことは、姫緒の命令に背くことになるのよ！」

ぴくり、と風小の肩が震える。

「しかも、戦闘放棄したと言うナラバ！アンタの大好きな『姫さま』

の顔にドロを塗ることになるわよん！それでもいいの！」

ゆらり……。静かに……。静かに風小が立ち上がる……。レンレンが底冷えする微笑を浮かべて……。叫んだ！

「恥をしれ！この不良レンタル品！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおつっつっつっつっつっつ！」

風小が走り出す！すぐに砂に足を取られて転ぶ……。転んでもそのままボールのように転がっていき、回転が止まると、立ち上がるのももどかしげに四つん這いそのまま走り出し、そのうちに蹴り出す脚力で上半身が浮き上がって来て、その結果、二本足で駆け出した！そのまま氷かきの待つ机まで一気に走る！机の周りは参加者達で混雑していたが、その鬼気迫る風小の迫力に、他の参加者達は順番を譲るしか無かった。譲ってくれた参加者達に半べその顔でぺこぺこ頭を下げつつ、カキ氷を受け取ると、叫び声とともに再び自席に戻り、かき氷をスプーンで一口、口に入れる。次の瞬間……。歯を食いしばったかと思うと目を硬く閉じ、天を仰いで数秒固まった……。襲い来る激痛に耐えているのは火を見るよりも明らかだ……。ダメか？その凄まじい事の成り行きを見守っていた観客の誰もがそう思った、そのとき……。最初ゆっくりと、そして段々と加速して、風小のスプーンを持つ手が凄スピードで再起動する！一口飲み込むごとに歯を食いしばり、目に涙を溜めながら、次々とかき氷を口に運んでいく！

「おーっと！ゼッケン4番、怒涛の復活劇ザンス！しかし、しかし！しげちゃんはすでに5杯目を完食したザンスよー！」

しげちゃんが、6敗目のかき氷を受け取り戻ってきた時に、再び、レンレンが動いた。

「おい！そのカーキチ！」

しげちゃんがレンレンの声に反応して顔を上げる。

「カーキチって言うのは車が死ぬほど好きな奴なんですよ！なら、私の顔は忘れても、私の乗ってる車がどんな車か！良く知ってるわよねー！」

明らかにしげちゃんの目の色が変わった。間違いなく、一昨日の赤いコルベット・スティングレーに乗った体験を反芻しているとレンレンは確信する。ならば……。

すつとレンレンは指を三本、しげちゃんの視線に向けて掲げる。「私が、三つ数えるうちに、そのかき氷……。空にしたら……。私の車……」

レンレンがくすくすと悪魔の笑みを浮かべた。

「アゲル……」

固まるしげちゃん。しかし、そんなこととはお構い無しにレンレンはカウントを開始する。

「ひとつ……」

しげちゃんが、突然、ラーメンの汁をすする様に器を抱えると、スプーンも使わず、飢えた野獣のようにカキ氷に喰らいついた！

その瞳には最早、人としての知性は無く、その動きは野生そのものだ！

「あらよあー！しげちゃん！だめだよ！畏だよー！」

そう、それは……。畏……。カーキチと言う、野生動物に仕掛けられた、ばかばかしいまでに原始的な畏だった。

「ふたーっ……」

「うおっうおおおおおー！」

突然、しげちゃんが頭を押さえたかと思うと、手に持った器を取り落とす！

「みつっう……」

器は机に転がり、半分ほど残っていた力キ氷が脇にこぼれて、こもりと小山を作った。

「『頭がキーンとならないギリギリスピード』……。ぎりぎり超えたら、そりゃ当然そうなるでしょうっお……」

レンレンはそう言って振り向き、おばちゃんに微笑んだ。

「なにか文句ある？」

レンレンがそう言つと、おばちゃんは「ふう……」と小さく息を

吐いて首を振りながら口を開く。

「おばちゃん、あんたを好きになっちゃったかも知らないよお……」

おばちゃんは、そう言つて椅子にもたれると満足そうに微笑んだ。  
「あーっ、これは予想外ザンス！ゼツケン2番！常勝のしげちゃん  
がまさかの器落としザンスー！ペナルティー発動！しげちゃんの完  
食数から一杯！ドン！マイナスザンスー！しげちゃん完食数4杯！  
追いかけるのは3番、7番、9番の完食三杯！いや……いやいやい  
やいや……待つザンス……」

そう言つて何事かを確認していたタケちゃんの声が再び浜辺に響  
き渡つた。

「ゼツケン4番！スク水番長！風小ちゃんが怒涛の追い上げザンス  
ー！今……」

息を呑む……。

「4杯目を完食つうつうつうつう！トップ争いに踊りたザン  
スよー！」

「ネモ！」

歩夢が競技場のしげちゃんを指差しながら、レンレンに叫んだ！  
しげちゃんは早くも替えのかき氷を自席に持つて帰り、再び5杯  
目に挑戦を開始している。

「チツ、さすがチャンピオンね……。回復が早いわ……」

「あらよお、勝負はまだまだこれからだよお」

おばちゃんが不敵に笑う。

「しげちゃんは『頭がキーンとならないギリギリスピード』を身に  
付ける際に、何度も血管詰まらせて、痛みへの耐性もついているんだ  
よ！それに比べてあんたんとこのお譲ちゃんは、まだ後遺症に苦し  
んでるんじゃないのかい？」

確かに……。5杯目のカキ氷に挑む風小は、最初のように流し込  
むような食べ方ではなく、スプーンを使ってかき込むやり方に変わ  
っていた。先ほどと同じ食べ方をして、また同じように氷をこぼし  
てしまえば、もはや、一位になることは難しい……。

負けられないと言うプレッシャーと、先ほどの一件がトラウマと  
なつて、風小に押し掛かり、無難な戦法を取らせているのが解る。  
それでも風小の食べるスピードは早い！確かに早くはあるのだが、  
やはり2年間チャンピオンであつただけあつて、しげちゃんも並で  
はないのだつた。

「しげちゃん5杯完食！」

そう言つたタケちゃんの顔が見る見る驚愕の面持ちに変わる！

「うそーっ！しかし、しかし！風小ちゃんも今5杯目を完食ー！な  
並んだー！信じられないザンス！食べる時間は風小ちゃんの方がや  
や優勢ザンスかあ？しかし、もう、時間が無いザンスよー！」

二人が同時に席を飛び出した。

先に席に戻つたのは風小！

「ネモ！あと、3分ちよつとしか時間が無いよ！」

思わず歩夢がレンレンの手を握つた。

「だいじょうぶよん」

静かにレンレンが答える。

「？」

「だつて風小だもの……」

レンレンはそう言つて歩夢に微笑んで見せた。

少し遅れてしげちゃんが席に戻る……。チラリと彼を横目で見る  
風小……。すると、一瞬、何事かを躊躇っていたかのような風小が  
大きく息を吸つて……。

「いづくぞおおおおおー！」

雄たけびとともにどんぶりのような器をあおり、咽喉を鳴らして  
一気にカキ氷を飲み込んでしまった……。

静まり返る会場……。

「あやかし……なめんじゃねーゾー！」

風小が叫ぶ！

「スク水番長！完全ふつかあーつつつつっ！風小ちゃん6杯目完  
食ー！まさか！マジす

か！の大逆転劇ザンスー！」

タケちゃんの声が木霊すると、一斉に沸き起こる風小コール！風小が大きく右腕を振り挙げ、それに答える！

「馬鹿たれー！そのままじゃ、同点になっちゃっわよん！」

レンレンが激を飛ばす！見れば、確かにしげちゃんも黙々と力キ氷を食べ続け、その後、半分を残すまでになっているではないか！残り時間は2分を切った！食べきれないと読んで、ここで見守るか？ 確実を考えて打って出るか……？

風小は走り出していた！勝つために！

一気に配給場所の机まで行くと、もはや、そこには人だかりは無かった。それどころか、他の参加者達は左右に分かれて、風小に花道を作り、拍手で出迎えるのだった。

風小は器を慎重に受け取り、周りの選手達に照れくさそうに一礼すると、器を抱えて走り出す！誰もがこの後の劇的な展開を予想していた……。そう、確かに、その後にかけていた展開は劇的であったかもしれない。しかし、それは誰も予想を裏切り、誰も予想を遥かに越えたものだったのだ……。

最後の魔物が口を開いた……。

受け取り場所付近に付いていた沢山の選手達の足跡……。重なり合い、へこんだ砂地に、他からの足跡が砂をかぶせる。ほとんどの乾いたさらさらとした表面の砂はえぐられ、適度に湿った硬い砂地になっている……。ハズだった……。だが、そうでない場所はまだ存在していたのだ！

風小が砂地に足を取られる……。波が引くように、その場に居たすべての人々の表情から笑顔が消えていく……。ただ一人……。何が起きているのかを理解できないでいる風小だけが笑っていた……。

足掻こうともせず ゆっくりと倒れていく風小が、まるで車に轢かれたカエルのように砂浜にうつ伏せに張り付くと……。会場のあちこちから大きな溜息が漏れた……。



場内からどよめきが起こった……。

「！」

しげちゃんは机の前に立っていた、その足下には明らかに故意に落とされたと解るかき氷の器……。タケちゃんが近づいていき、落ちていた器を確認する。器の中にはまだ、一口ほどの氷が……。

「しげちゃん6杯目をロストザンス！よって完食数4杯！優勝は……」

「納得出来ませんでございますねえ！」

風小は叫ぶと立ち上がり、険しい表情でゆっくりしげちゃんに向かって歩き出した。

「競技に負けたのであれば私が腹を切れれば済む事でございますが、このようなお情けで勝たせていただいたのでは姫さまにあわせ顔さえございませぬデスよ！」

しげちゃんは近づいてくる風小を見ながら何事かをタケちゃんに耳打ちした。小さく頷いていたタケちゃんが、マイクを握りなおして口を開いた。

「ちよつとまってくれ。スク水番長……」

そこにはあのテンションの高いタケちゃんはいなかった。思わず風小が足を止める。

「うちのしげが番長に話があるそうだ……。会場のみんなも聞いてやってくれ……。つーか、俺も聞きてー！聞かなきゃ納得できねえだろ！こんな結末はよ！」

そう言うとタケちゃんは、睨むように、そして荒っぽく突きつけるように、しげちゃんにマイクを渡した……。

「聞いてほしいッス……」

しげちゃんが言葉をしぼり出す。

「俺は、この大会が大好きッス……。人によってはばかばかしいかも知れないスけど、俺はこの大会のチャンピオンであることに誇りを持っているッス……。いや、誇れるチャンピオンであろうと思っ  
ているッス！その大会において……俺は……勝負の中で勝負を忘れ

たツス……。誇りを忘れちまったツス！」

誰もが思い出していた。レンレンの口車に乗って野生化したしげちゃんの姿を。そして、まさかのペナルティー……。そこにチャンピオンの風格は無かった……。ヒーローの下衆な姿に、がっかりした自分達を思いだしていた。

「風小ちゃん……。あなたは最後まで勝負を諦めなかったツス……。俺の好きなこの勝負を最後まで真剣に闘ってくれたツス！そのおかげでこの大会の誇りは護られたツス！」

しげちゃんが静かに目を閉じる。

「俺はチャンピオンとして、今回の勝負に勝つわけにはいかねえツス……」

「そんな身勝手な！」

風小が怒り出す。

「勝負は俺の勝ちツス！」

しげちゃんがそう言って目を開いた。

「誰の目からもそれは明らかツス！この競技は運だつて実力の内ツス！」

「そこまで解つてらっしやるなら！なぜ、私に恥を晒させるような真似をなさるのデスカ！」

風小が詰め寄ると、しげちゃんは、転がっている器を指差して静かに語り出した。

「これは、俺からの風小ちゃんへの挑戦状ツス！」

「挑戦状……？」

風小が、復唱するように静かにつぶやいた……。

「そうツス！勝負は俺の勝ちツス！だけど、俺の気持ちはこのどんぶりのようにひっくり返つちまつてるツス！だから……だから！もし、『今日、勝つたのが悔しい』なら！」

そう言つて左手を差し出す。

「また来てほしいツス！一年後！この竜宮町へ！そして、俺ともう一度戦つてほしいツス！スク水番長！」

シン……。と、静かな空気が辺りを包んだ。風小が頭を掻きながら口を開く……。

「あー、まあ、挑戦ならば受けざるをえませんがね……」  
そう言うてにやりと笑い、風小がひでちゃんの差し出した手を握り握手する。

「次は負けませんデスよ！」

「俺も負けねえツスよ！次はチャンピオンとしてふさわしく勝ってみせるツス！」

会場からぱらぱらと拍手が起こり出し、やがてそれが広がっていき、割れんばかりの拍手となり、大きく波打つように砂浜に響き渡った。

「勝者！ゼツケン4番！風小ちゃんザンス！」

入道雲の湧き出る蒼穹に、高らかにタケちゃんが宣言する！

「あらよおー！いい試合見せてもらったよおー！」

何時の間にか、風小の脇におばちゃんとレンレン……。それに歩夢が立っている。

風小が、レンレンの前に進み出て、嬉しそうに小首を傾げて口を開いた。

「レンレンさん！勝ちましたデスよ！」

「ばーか」

レンレンは無表情で答える。

「こんな営業に引つかかってどうすんのよん……。また来年来なくちゃならないじゃないよん！あんた独りで来なさいよ！私は知らないからね！」

「ネモは風小が勝つて知ってたよ！」

歩夢が風小の手を引きながらしゃべり出す。

「風小だから絶対勝つて言ってたぞ！」

「あらよおー！今日はきぶんがいいねえ！おばちゃんからのプレゼントだよー！本日只今より、海の家源九浪の全商品当日限りの半額セールだよー！みんな！とことんやつつけておくれよー！」

おばちゃんは、そう言つと風小と歩夢の肩に手を回し、愛しそつに代わる代わる引き寄せて、頬を近づけた。くすぐつたそつに風小と歩夢が微笑む。

「さて……と。それじゃあ、遠慮なしに呑むわよん！」

そう言つとレンレンは踵を返し、スタスタと源九浪へ向かつていく。誰にも見せないその顔に笑みを浮かべながら……。

「へんな奴らねん……」

押さえようとする微笑が次から次からこぼれてしまう。

「でも……。クライじゃないわよん……」

「あらよお！あんちゃん達！もう一踏ん張り頼んだよう！」

ゲンクローズは力一杯叫んだが、その声は、観客達の声援でかき消されてしまった……。

「私はその時、姫さまに言つてやりましたのデスよ！『姫さま……。まさかとは思いますが……。まさか、すつごい危険な目に遭いそつで面白そつだ、とか思つて引き受けるワケじゃないですよね！』つて！ええ！そりゃあもう、思いつき問いたださせていただきましたデスよ！」

海の家源九浪の小上がり。早番で仕事を上がった組のゲンクローズのしげちゃんを含めた面々を数人はべらかし、コップ酒をぐいぐいとあおり合いながら、風小が武勇伝に華を咲かせている。風小達の周りにごろごろと転がる日本酒『海亀』の一升瓶は、一体、何本開けたのか……。誰がどれほど呑んだのか。何もかもがぐだぐだな、非常に見苦しい宴が盛大に盛り上がつていた。その脇では、驚いたことに、歩夢が喧噪を物ともせず寝息を立てているのだった。

「私は思いましたのデスよ！新宿鈴屋のとんかつ茶漬けを所望したいと！それで三杯おかわりしたいと！だつて姫さま、みつともないからつて、二杯までしかおかわりさせて下さらないのデスよ……」

日はとつくに暮れていた。海岸には、もはや源九浪の灯り以外は灯つておらず、静かに繰り返す潮騒の音に混じつて、電気式の青く

乾いた光を放つ誘蛾灯に飛び込む虫の焼ける音が時折聞こえる以外は……、小上がりに一組陣取る、風小達の乱痴気騒ぎのみだった。

「とんかつ茶漬は三杯食べてこそ本分だと思えますのデスよ！」  
レンレンにしてみても、そう言う飲み方が嫌いな訳では無かったが、本日は少々食傷気味だった。

ついさつきまで源九浪の中は、大会に出た参加者とその応援者、ただ見学していた者達等々の大打ち上げ大会となり、手もつけられないような大騒ぎになっていた。

本来、ゲンクロウズの面々は、早番や、遅番、臨時や常駐、見習いと、5〜6人が交代で海の家の仕事に従事しているらしかったが、今回、大会のためにそのほとんどのメンバーが一堂に揃っているにもかかわらず、その混乱をさばききるのは至難の業だったようだ。

店の中は、まるで一つの大宴会のように、誰それ関係無しに酒を酌み交わし、語り合い、歌い……。その混雑するお客の隙間を縫うようにオレンジのハッピが飛び回った。

やがて、お客は一人減り、二人減り、一組が減り、五組が帰っていき……。結果、小上がりに陣取る戯けた一組と、いつもの席に座る自分一人が最後に残ったのだった。

そろそろ、潮時かとも思われたその時……。片づけ物をするおばちゃんの姿が目につく……。

「ねえ、おばちゃん……」

聞こえなければそれで構わない、そんなつもりで呼んでみる。

「あらよお……」

まるで待っていたかのようにおばちゃんが振り向いた。

「一緒にどう？」

ホントにそうしたかったのかは解らなかった。ただ、そうしても良いような気がして、レンレンはおばちゃんに向かって、持っている冷酒の入ったコップをかざして見せた。

「あらよお、お嬢ちゃんのお誘いじゃあ、おばちゃん断るわけにはいかないねえ」

そう言つと、おばちゃんは前掛けのポケットからコップを取り出し、レンレンの座っている机の上に置くと、正面の椅子に腰掛けて向かい合つた。

「はははははははははははは」

一瞬、キョトンとしていたレンレンが、声を立てて笑い出し、おばちゃんのコップに一升瓶から直接酒を酌む。

「あんた達つて、変！」

レンレンがそう言つて再びコップを掲げると、おばちゃんもコップを掲げ、二人のコップがぶつかり合いカチンと小さく音を立てた。

「あらよお。竜宮町へようこそ……」

おばちゃんが小さく呟き、コップの酒を一息で飲み干す。

「乾杯……」

おばちゃんに続くように、レンレンもコップを干した。

「あらよお、ほんとにいい飲みっぷりだねえ」

おばちゃんが、レンレンにお酌しながらそう言つと続けた。

「どうだい、竜宮町は？好きになつてくれたかい？」

そう言つて自分のコップに手酌する。

「変な言い方ね……」

注がれた酒に口を付けながらレンレンが応えた。

「まるで街が自分の物みたいな言い方よん」

そう言つてまた酒をあおると、意地悪い笑いを浮かべる。

おばちゃんは何事かを押し量っているかのように暫く沈黙していたが、やがて、静かに口を開いた。

「この町は私たちの町だよ……。でもね、私達の物じゃないよ。私たちの都合の良いようには出来てないんだ。解るかい？」

「人が住まなければ土地は町にならない。人がその土地で生きるために町を作る。土地は、町になると人を護つてくれる命を持つようになるんだ。だから、町は生きているのさ……」

酒をあおつてふうとため息をつくと再び話し始める。

「でもねえ、町は人が創った物だからねえ……。町だけでは生きられ無いんだよ。だから、町を生んだ住民達は町が生きていけるように、町が町として人を生かしてくれるように手をかけてやらなければならぬ。増えすぎたり伸びすぎたりした森の木の手入れをするようにねえ。人は町が無ければ生きていけないんだからねえ……」

「私は街に手をかけたことや、守った事なんて一度もないわよ。でも、私の住んでる街は街のままだわ」

「町の世話を焼くのは町が好きの人達さ。誰に頼まれたわけではない。誰に頼む物でもない。町が好きだから世話を焼く」

おばちゃんがそう言うつとレンレンは「フン」と鼻を鳴らして口を開いた。

「私が街を嫌っているってわけ？」

「そうなのかい？」

おばちゃんがそう言うつとまた空になったコップに手酌した。

「べつに……。好きでも嫌いでもないわん」

「それでいいんだよ……。人がいなくちゃ町は生まれないんだからね。お嬢ちゃんはその町に好かれてるんだよ。でもね、町が好きな人がいなくなれば、育たない……。町は死んでしまうんだよ」

おばちゃんがレンレンのコップが空なのに気づいてお酌した。

「町を好きになる……。それが、町で生きるための町への礼儀というわけさ」

「ねえ……」

レンレンが静かに口を開いた。

「あなた……。浪の物？それとも……。山の物がしらん？」

「あらよあ……。いい夜だねえ」

おばちゃんは酒を飲み干し、大きく息をつく……。

「トコトン付き合っつわよん……」

そう言うつとレンレンが再び乾杯した。

## ACT7 復活！災いの大祭！

「あら？今おかえりですか？随分遅かったですねー……」

旅館豊玉の若い仲居、美土里みどろが廊下をうろろろしているキッコを見つけて声をかける。旅館が仲居用に揃えた紫色の和服を着た美土里は、食膳を持ち離れへ向かう途中の様だった。

「うん、源九浪のおばちゃんのスイカ切ってくれたから……。歩夢くんと食べたんだよ！」

そう言っつてちよつと顔を赤らめる。

「あー！赤くなつたあー！」

美土里にからかわれると、キッコの顔が益々赤くなっていく。

「ち、ちがうよ！今、お風呂を借りたからだよ！お風呂から上がったばかりだから顔が赤いの！」

なるほど、たしかに白いワンピースから出たキッコの肩や膝小僧が日焼けとは別に、ほんのりと紅色に染まっているのがわかる。美土里はそれでも意地悪そうに笑ってキッコの反応を見て楽しんでいようだった。そんな美土里の振る舞いに、キッコは、からかわれていると解っついてもスネた態度でふいと横を向く。

「お風呂使っつのはいいですけど、お風呂場で水着洗うと、また女将さんに怒られますよー」

旅館に入っつて間がない若い美土里にとつては、相手がたとえ年の離れた女の子とでも、色恋沙汰の会話は楽しい物であったが、不意に、今、目の前に居るキッコが旅館の女将の娘であることを思い出し、仕事中である自分の立場上での現在の行動を、キッコが女将に世間話にでも話してしまつたら、或いはそれは客観的な見解から『さぼり』と言っつ判定を喰らつてしまつのではないか？そんな懸念に襲われて、意味深な微笑みを浮かべると、ショートカットの頭かぶりをフイと横に向け、大人っぽい小言と共に仕事の続きに戻ろうと歩き出した。

「ねえ、美土里さん！」

あろう事が、キッコが付いてくる。

「駄目ですよー、私これから『鯉の間』にお食事運ばなくちゃいけないんですからー！」

「あつ！やつぱり！」

いそいそと先を急ごうとする美土里にキッコが食い下がる。その晴れやかな笑顔を見て、美土里はキッコの真意を見透かした。

「ダメですよー！付いて来ちゃー！」

キッコの目当ては鯉の間に泊まっている退魔師、生川・ルークその人に違いなかった。離れに続くこの廊下をうろつろとしていたのは、配膳の者が通りかかるのを待っていたためであったのだろう。もしかしたら、係の者が自分と親しい美土里である事を知つての企みでもあつたかも知れない。

「エーッ！」

キッコが抗議の声をあげた。

「私、生川・ルークのお話し聞きたいなあ……。この間のは凄かったよお！竜宮町のあの病院のお話でね、『かごめかごめ』の謎解きしたの！」

「あつ！みたみた！竜宮町のお話だったからビデオ撮つて観たよおー！おもしろかったねえ、あれ！続きはいつやるのかなあー！……。つて……。あ……。」

照れ笑いをする美土里を、にやにやとキッコが見上げている。

「つづき……。聞けるかも知れないよね？」

キッコがそう囁くと、もはや、美土里の笑顔は共犯者のそれだった。

「ほんのちよつとだけですよー……。私、ここで配膳は終わりですけど、すぐに戻らなくちゃいけないんですからー……。」

「うん、うん、だいじょうぶ！大丈夫！」

期待で心弾む二人の足取りは、自然と軽く早足になって行く。

「ねえ、美土里さん、生川・ルークは部屋で何をしてるの？」

「面と向かって呼び捨てにしちゃだめですよー！ちゃんと生川さん  
ってねー……」

そう言つと美土里はちょっと考える様に上を向き、話を続けた。

「えーと、生川さんずつとお部屋にこもりつきりで襖や畳に墨絵描  
いてますよー……。なんだか気味の悪い生き物がたくさんいる絵ー  
……」

「墨絵？」

「そう……。なんて言つたっけなあ……。お昼ごはんを特注されて  
持つて行ったとき、聞いたんだけど忘れちゃったー。『ナントカ図  
いや、『ナントカ絵』だったかなあー……」

「へーっ！」

キッコが部屋の中に描かれていると言う墨絵に想いを馳せ、期待  
に瞳を輝かせる。

「『祭り』に使うんだつて言つてましたから、多分、ものわけさん  
の大祭のイベントで呼ばれたんじゃないでしょうかねえー？」

「源九浪のおばちゃん何にも言つてなかったけどなあ」

例年、ものわけさんの大祭は源九浪の人間が取り仕切る事になつ  
ていた。

「秘密のイベントなんですよー、きつと！生川さんから、自分が  
泊まっているのはなるべく秘密にしてくれつて言われてるんですか  
らー」

やがて、鯉の間と書かれた部屋の格子戸の前に着くと、美土里は  
止まつて、キッコに言い聞かせるようにしゃべり出した。

「いいですかー？最初に私が入つて、お話が聞けるかお願いして  
ますからねー。ここでまつて下さいよー」

美土里は、キッコが頷くのを確認すると、小さく息を整える。

「失礼致しますー……」

そう言つて格子戸を開けると、手に持った食膳に気をつかいなが  
ら中へと進んでいった。

期待に胸膨らませながら、キッコが廊下で待ちぼうけしていると、

程なく、格子戸が再び開いて美土里がひよっこり顔を出す。

「キッコちゃんー。いいってよー。早くおいでー！」

さもうれしそうに美土里が手招きした。

部屋は十二畳の和室と、床が板敷の談話スペースの簡素な造りのものだったが、今は、二つの部屋を仕切ることが出来る障子戸が閉められ、談話スペースに置かれたローテーブルと二脚の椅子や、この部屋唯一の光を取り込める窓も隠れてしまっており、仄暗い空間となった和室の、その中央に、紫色の紋付き袴姿の生川・ルークが、アルカイツクな薄笑いを浮かべて正座していた。キッコは思わず気後れしてしまい、部屋の上がり口にたたずんだ。

「ああ、すいませんね……。気が付きませんで」

そう言つて生川は立ち上がり、頭上の蛍光灯の紐に、白手袋をはめた手を伸ばし引つ張つた。蛍光灯が数回瞬いた後、辺りを明るくすると、部屋の中の、後悔するほどの異様な全貌を浮かびあがらせた。

和室十二畳敷きの畳一面には、不気味な記号と漢数字の列ぶ魔法陣が太い墨の線で描かれ、生川はその中心に突つ立っている。彼の足下には、人形用に特注したと思われる、革張りの堂々とした造りの、肘掛付きの独り掛け用ソファが据え置かれ、そこに赤い和装の球体間接人形、タルトが優雅に腰を掛けてこちらを見ていた。法陣の外側には、部屋の出入り口付近以外、まるで、針の山のように大小高さや形の違う真鍮の蠟燭立てが乱立し、蠟燭立てには、これもまた太さが不揃いな赤、白、黒色の、火を着けた形跡のない蠟燭が備え付けられていて、まるで、キッコと美土里を品定めでもしているように列んでいる。

立っている生川を挟んで、タルトと反対側の足下には、広げた新聞紙大の緋毛氈が無造作に敷かれ、その上には太さの違う筆が、きちんと揃えられて20本以上は列んでいた。

筆は、鉛筆ほどの太さのものから、野球のバット程の物まで色々あったが、じつは、キッコのウエスト程も太さがある一番太い筆が、

亜鉛加工されたバケツに並々と満たされた墨の中に突き立てられて、部屋の右隅奥に安置されているのだった。多分、床の魔法陣はこの筆で書かれた物であろう。四方の梁に備え付けられたフックには、荒縄が差し渡しされ、生川の頭の高さほどの中空に、四角い境界を作り出していた。

だが、やはり、一番異様だったのは、部屋の左右に二枚づつ、計4枚の襖に描かれた墨絵だろう。

そこには、この世には決して存在しないであろう、鬼、大首、6本の手を持つ魚、狸の顔をした花嫁行列、お歯黒の大口が顔一面を占める日本髪の女、胴体よりも長い首を持つ物等々……。沢山の異形の物達が……。いずこかへと向かおうというのか、里山を背景に行列を作り、腕や足を振り上げて部屋の奥から手前に向かって進む姿が描かれていた。一筆書きにも似たデッサンで、彩色の施されない墨一色で描かれたそれは、しかし、生き生きと、楽しげに、そして、おどろおどろしく表現されていた。

絵は、異形ゆえにはつきりとは言えないが、手足が無かったり、顔がまだ描きかけであろうと思われる異形もあり、未完成で有るところが推し量れる。

「ささ、どうぞ、どうぞ」

そう言って生川は、その異形が描かれた襖を開けて中から座布団を人数分取り出すと、部屋の中央に自分用と、入り口付近の辛うじて畳の見えるスペースに二人の分を並べて配置した。

「し、しつれいします……」

美土里とキッコはどちらからとも無くそう言つと、勧められた座布団の上に腰を下ろしてかしまった。

生川は、二人が座るのを確認するように小さく頷き、自分も中央に据え置いた座布団に正座する。

「さてさて、何やら私の話が聞きたいとのこと……。一体何をお話すればよろしいですか？かわいいお嬢ちゃん……」

生川がそう言つてキッコにやさしく微笑みかけた。

「あ、あのおー……」

おずおずと美土里が口を開く。

「あのー、こないだの竜宮町の病院のテレビ見ましたー。すごかったですよー。凄くかつこよかったですよー。今回は、あの続きでいらつしやったのですかー？」

顔を上気させながら、興奮気味にそう言つて、美土里が生川ににじり寄る。

「あははははははははは」

生川が頭を掻きながら大声を上げて笑つた。

「面と向かつて誉められてしまうと、世辞とは解つていても、なんとも、お恥ずかしい……」

そう言つて右手の甲を、二人の方へけんみたつぷりに向けて見せた。其処には、退魔師、生川・ルークのトレードマークとも言える白い手袋に金糸で刺繍された彼の家紋『輝かす六芒星』が、燦然と輝いていた。

「うあー、ほんものだあ！」

キッコと美土里が手を取り合つてはしゃぎ出す。

「我が家紋、この『輝かす六芒星』の名に負つて！魔の蔓延はびこる理無ことわりし！」

「きゃー！！！！！」

生川・ルーク必殺の極めゼリフに、キッコも美土里もすっかりミィーハーと化していた。

「はははははははははは」

そんな二人を見て満足げに笑いながら生川が続ける。

「つい先日、あの病院の退魔行はもう完了しておりますよ、美しい娘さん……。いやいや、今回は、あまりに意外に次ぐ意外な展開に、スタッフ達がすっかり怖気づきまして……。少々しんどうございました」

「わー！聞きたい！聞きたい！」

キッコが目を輝かせてせがむと、美土里もこくこくと首を縦に振

って同意する。

「申し訳ない……。下衆な話で悪いのですが、色々大人の事情と  
言うものが有りましてな……」

生川がそう言うてにやりと笑う。

「来週の水曜日……。またあの番組の中で、そのときの模様が放送  
されるはずですから、お楽しみに！と、言うことで勘弁していただ  
けませんか？」

生川がそう言うつと、二人は「あ〜ん……」と残念そうな声を上げ  
て、お互いを慰めるような視線で顔を見合わせた。

「それじゃあ……えーと……」

キッコが少し考え込む。

ふと、生川の脇でソファーに鎮座する和装の人形、タルトと目が  
合った。何かを語りかけるような視線と心なし微笑むような口元。  
瞬きもせず真つ直ぐにこちらを見る透明で黒目がちなドル・アイ  
の視線に、何か物凄いプレッシャーを感じて慌てて目を外す……。  
外した先に……襖の墨絵があつた。

「あのう……」

ちよつと躊躇しながらキッコが口を開く。

「あのー……、おまつりの日……。何をやるんですか？」

キッコがそう尋ねると、美土里は驚愕の面持ちで一生懸命首を横  
に振り、キッコの質問を否定しようとしていた。

「よろしい……」

生川がそう言うて二人を代わる代わる眺めると、声を落として続  
けた。

「あれもダメ、これもダメでは、私も些ちかか心苦しい……。あなた方  
だけに……。お話ししましょう……。私がここで何をしているか……。  
何をしようとしているのか……」

「ほ、ほんとですかー！」

美土里が歓喜の声を上げる！生川は人差し指を自分の口の前に持  
つていき「しっ」と言うて彼女を制した。

「そのかわり、約束してください。『他言無用』。ここで聞いたことは決して人に話してはなりませんよ」

生川の言葉に二人はこくこくと頷いて答えた。

「あの襖に私は『百鬼夜行図』を描いております」

生川の言葉に、美土里は「あ、それだ！」と言つて、何故かキツコに得意げな態度を取つてみせる。

「百鬼夜行図とは、さまざまの妖怪が列をなして夜を練り歩く、その、みはらしの様を描いた図絵でしてな……。しかし残念ながら、私の夜行図に描かれた妖怪達は、広く皆さんにテレビや映画で知られる有名な妖怪達とは違い、すべて私のオリジナルですが……」

「見たことあるんですか！妖怪！」

キツコが食い入るような目で生川を見ながら尋ねた。

「いや……。わたしは妖怪を見たことは有りません。と言つより……」

生川の瞳の色に悪戯げな光が浮かぶ。

「この世に妖怪など居ないので」

「えッ！」

あまりに意外な生川の言葉に、二人が驚愕する。

「失敬、言葉が軽率でしたかな……。つまり、『妖怪が居ない』とは、『目に見える妖怪』は妖怪の影でしかないと言つ事なのです」

「えーと……」

美土里が腕を組み、頭をひねりながら、キツコに「解る？」と言つような視線を送る。キツコはそれに全力で首を横に振つて答えた。「そもそも妖怪とはその名の通り、「あやしき怪異」ということです。つまり、正体の判らない音、物、現象……。それは、後ろから付いてくる足音であったり、誰もいない筈の川岸で聞こえる小豆を研ぐ音であったり……。突然、何かに憑かれたように前に進めなくなったり、物に触れてもいないのに、刃物で切られたような切り傷が出現したり……」

そう言つて生川が座りなおした。釣られて二人も座りなおす。

「それらを人は怖がったのです、怖くて怖くて仕方がなかったのです。それはそうでしょう、正体が判らないのですから……。だから人々はそこに名前を付けた。後ろから付いてくるのは『妖怪ベとベとさん』小豆を研ぐのは『妖怪あずきあらい』進めなくなるのは『妖怪ぬりかべ』が前にいるからであり、刃物で切られたようになるのは『妖怪かまいたち』が悪戯しているのだ……。それらはすべて見えないが存在する。だから気を付けなければいい……。気を付ける？どんな奴に？」

そう言つて生川が、傍らの人形……。タルトを抱きかかえる。

「悪さをする妖怪の素性は判った、では一体どんな姿をしているのか？それが判らなければ気を付けようがないではないか？……。こうして、ただの気のせいや、今では科学現象として解明できる『怪異』が、どんどん擬人化されていき、現在の妖怪というキャラクターを作り上げていったのです」

「科学……現象ですか？」

美土里が繰り返すと、生川が頷いた。

「さよう、激しい労働の後、充分に栄養の補給が出来ず、低血糖になれば前に進むどころか、身体の自由すら利かなくなります。突然刃物で切られた様な傷が出来るのは真空現象が起こったためでしょう、もつとも今では、真空現象の方が、かまいたち現象として呼ばれるほどかまいたちの方が有名になってしまった。これらは、当時では『正体の判らないもの』。怪異だったのです。ついでに言うともともと、『あずきあらい』はカワウソや蝦蟇がまが川底や川岸の砂利をかき回す音を聞き違えたのだという説があり、現に、今のような人の形はしておらず、カワウソの形をしていたと言う文献も有るのです」

「えっと……」

キッコが戸惑いの表情を見せた。

「話を急いでしまったので混乱させてしまいましたね。つまりは、妖怪とはキャラクターでは無くて『怖い現象』つまり、おのれの心

に芽生えた恐怖に付いた名前だということなのです。名前だけしか存在しない物を見ることなど不可能だと言うことは理解して頂けましたかな？恐怖という感情を、名前と、その上、姿までつけて縛り、封印したのです。有る意味では民間的な退（対）魔術と言うことですね」

そう言って生川がタルトの髪を撫でてやる。

「しかしながら……。その個人の感じた『恐怖の力』はどうなってしまうのでしょうか？」

「恐怖の力？」

キツコが呟くと、生川が頷いて続けた。

「そう、『恐怖の力』です。其処で起こった怪異。もし、それがすべて夢だったとしても、其処には『恐怖』が生まれます。それは『怪異はあったという記憶』で、脳はその感覚……。『恐怖』を感覚として記憶してしまうのです。確かにその時、その体験をした人物は『怖かった』のです。そこには恐怖の力、エネルギーが確実に生まれているのです」

そう言って生川が二人を見渡した。

「夢と言うものがありますな」

唐突に生川が話題を変えた。二人が困惑しながらも頷く。

「夢は現実には無いもの、寝ている間に脳の見る記憶の再編集……。しかし、実際に人に触られたり触ったりと言う感覚があったりしますな、首を絞められれば苦しかったりもする。しかし、それは当たり前ですな、人の感覚は脳が判断するのですから、脳の記憶が夢の間感覚として蘇ればそれはまごうことなき、リアルな視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚なのですから……」

二人が頷く。

「『怪異はあった』と言う記憶はやがて脳により『視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚』に変換され、人は恐怖を現実として『感じる』ようになるのです。妖怪を封印するために誕生させるプロセスとはまったく逆さまの行程により、人が感覚として感じる事の出来る恐

怖をこの世に送り出すことになれば……その恐怖こそは妖怪！ならば妖怪は実体化する事が出来る！……そうは思いませんか？」

生川がタルトをソファアールに戻し、姿勢を正した。

「じつは、私はこの町の或る場所に、恐怖を封印しました。言うなれば妖怪のタネを蒔いたのです。この方陣は……」

そう言って畳に手を置いて撫で回す。

「その場所とここを繋ぐ為の隧道すいどうの結界です。そしてあの百鬼夜行図が……」

襖絵を、生川の白い手袋が指し示す。

「妖怪達を入れる器……」

「あの、つまり……」

美土里が自信なさげに質問する。

「生川さんは、妖怪を作ろうとしているんですかー？」

その日、レンレンは、もはや見慣れた深山の家の一室での、朝の目覚めと共に大変驚いていた。

ひとつに、……何故自分は真っ裸で布団に横たわっているのだろう？

次に、……何故自分の横には、パジャマ姿の歩夢が寝息を立てて寝ているのだろうか？

昨日の早食い大会の後。源九浪のおばちゃんと意気投合してトコトン呑みまくったまでは覚えている。何やら取り留めのない話題の、何もかにもが楽しくなって、ゲンクローズや風小を巻き込んで、大騒ぎしたような……。いや……。確実に大騒ぎした記憶はある。その後の、源九浪を出た記憶と、深山の家に帰った記憶、それら一切が……。無い。思い出せない……。まあ、記憶が無いと言うこと自体は今に始まったことでは無かったので、それに関しては大した驚きは無かった。

「イタシチャツタわけは無いと思うけどねえん……」

そう言つて上半身を起こすと、大きくひとつ伸びをする。

「私はお止めたのデスけれどもねえ……」

不意に聞こえた背後からの声に、ギョツとして振り返る。そこには、思慮深そうに目を閉じて、腕を組んだ風小が立っており、レンレンを見下ろしている。

「何が……あつたの……」

レンレンが問いただす。

「知りませんデス……」

「風小！」

尚もレンレンが問い詰めると、風小は拗ねたような視線をレンレンに向ける。

「ホントに知りませんデスよ！海の家で大騒ぎした後で、私に歩夢さんを運ばせて、帰つて来るなり勝手に真ッパになつたのです！あまつさえ、眠っている歩夢さんの寝室に躍り込み！一緒に寝るんだと拉致してしまつたのですよ！」

知らないという割にはよく知っていた……。

「なんで止めないのよん！」

「言いましたデスよ！私はお止め致しましたのデス！」

そう言つて風小はしゃがみ込むと、自分の頭のでっぺんを、レンレンにこれを見よとばかりに突き出した。其処は、風小が竜宮町に着いた当日に源九浪のおばちゃんにゲンコツで打たれたところらしかつた。

「あらー……」

物の見事に巨大なタンコブになっており、膨れ上がった地肌が、髪の間からかなりむき出して、心なしか赤紫色に変色しているようにも見える。

「随分とまあ、派手にふくれたわねん……。いたそー……」

レンレンがそう言いながらコブに触れようとすると、風小はその手を払い、頭を庇うようにして離れると、憤怒の形相でレンレンを睨みつけた。

「昨日までは、この半分も膨れ上がっていなかったのデス！」

「およ？」

なんとなく察しがついたがとぼけてみる。

「私は止めましたのデス！なのに……、なのに、レンレンさんが、私をヘッド・ロックしてぼこぼここと！」

「あいたたたたたた……」

聞いてる方が痛くなる……。レンレンが思わず耳を押さえる。

「おはよう！ネモ！」

歩夢が起き上がり、レンレンの耳栓も役に立たないほどの元気声で挨拶した。

「楽しかったな！昨日！」

「およ？」

意味深な歩夢の言葉を勘繰って、思わずレンレンが顔を赤らめる。

「今日は、ラジオ体操行つてご飯食べたら、ハリガネに付き合わな  
くっちゃならないんだ！だから、午前中はダメだ！案内できないぞ  
！」

「ハリガネに付き合う？」

レンレンが問いたださそうとした時、風小が立ち上がり先に口を開いた。

「あつ、そうデスよ、歩夢さん！早くしないとラヂオ体操に間に合  
いませんデスよ！早く着替えて、一緒に参りましょうデス！」

「ちよつとまちなさいよん！」

今度は、風小にレンレンの物言いが入る。

「何で、あんたやる気満々のよん！なんで？大体なんで突然ラジ  
オ体操なのよん！」

歩夢と風小がきよんとした顔でレンレンを見た。

「ネモ、風小は来た次の日からちゃんと俺と一緒にラヂオ体操出  
るぞ？」

「え？」

レンレンが風小に、歩夢の言っている事は間違いないか目で確認

する。

「はい！そうデスよ？歩夢さんのおばあさんがラジオ体操にはちゃんと出るものだからと……。そう言うものだからとおっしゃったので、私、キチンと参加させていただいておりますデスよ」

「ババアが？」

「今日はネモも行くか？」

寝床から飛び起き、風小と並んで歩夢が言った。

「何をいまさら……」

「だって、ネモ、最初の日は朝早く居なくなっちゃったし……」

歩夢が、寂しげにそう言って口ごもると、風小が続けた。

「昨日は私が起こしに来て、起きて下さらなかったじゃないデスカあー！」

「があー！うっさい！うっさい！」

なんだか仲間はずれの理由が微妙に腹立たしい。

「勝手に行つて来なさいよん！私はやることがいっぱいあっていそがしいのよん！」

レンレンはそう言うのと、またごろりと寝転んでしまった。

「行きましよう、歩夢さん。本当に遅れてしまいますデスよ！」

風小がそう言うって歩夢の手を引くと、歩夢は力無く「うん……」と答えて風小に従う……。そして、一旦廊下に出て、見えなくなつたかと思うと、小走りに一人で戻つて来て、寝転がるレンレンの枕もとに立った。

「？」

「ネモ！お酒、飲みすぎちゃダメだぞ！」

そう言うって再び、急いで風小の後を追いかけて行ってしまった。

レンレンは寝転がったまま大きく一つ伸びをすると、ほんの数秒、けだるい脱力感に身を任せ、ぼんやりと歩夢の言葉を反芻した。

廊下側の障子戸を通し、柔らかな曙光が、漂うように部屋に注がれる中……。厳つく古めかしい柱時計が時を刻む振り子の音が、まるで、違う空間から聞こえてくるようにはっきりと聞こえる。

ゆるゆるとした時間……。

「『お酒、飲みすぎちゃダメだぞ』……。か……」  
「うー！」と唸ってたるそうに立ち上がる。

「余計なお世話よん……」

そう言ったレンレンの口元は、なぜか微かに笑っていた。

ふと、下を見ると……。枕もとに赤と蒼の朝顔の柄が入った浴衣が用意してあるのが目にとまる……。廊下からは朝食の湯気の香りが漂って来ていた……。

「お名残は着きませんが、そろそろおいとましようと思存じますですよ……」

台所で朝食の片付け物をする老婆と、下げ物を手伝う歩夢に、風小がそう言って深々と頭を下げた。

「帰っちゃうのか？風小……。お祭りまでいればいいのに……」  
歩夢が寂しそうにそう言って風小の手を取る。

「私のここでの仕事は終わりましたデスよ。本分に戻らなければなりませんのデス」

そう言つと、そのまま歩夢の手を引いて老婆のそばまで行き、また頭を下げる。

「大変お世話になりましたデスよ……。おばあさんのお料理はどれも大変おいしゅうございましたデス！とても勉強させていただきましたデスよ！中でも、お芋の煮っ転がしは天下一品でございましたー！」

「そうかい、そうかい……」

老婆はそう言つとまた洗い物を始める。

「なら、今晚は、お芋を煮ようかねえ……」

老婆の言葉に風小と歩夢が顔を見合わせる。

「あのう……。おばあさん……」

「ばあちゃん！風小は……」

その時、不機嫌そうに廊下を大股で歩く足音が段々と大きく聞こえてきたかと思うと、レンレンが台所に入って来た。

「キミ！遅い！まったく、いつまで待たせるのよん！食事が済んだならさっさと行くわよん！」

浴衣の朝顔の柄が、まるでレンレンの登場を讃えるラッパのように揺れる。

「??????」

「.....」

混乱していた風小と歩夢が、さらに困惑の表情を浮かべた。

「ハリガネの手伝いをするんでしょ！一緒に行っただげるから早くしなさいよん！」

歩夢の顔が輝き、確認するように老婆に顔を向けると、老婆は黙って小さく頷いた。

「俺！準備して来る！」

歩夢がレンレンの脇を抜けて台所を飛び出す。

「戻って来なくていいのよん！庭で待つてるわん！」

レンレンが歩夢の後ろ姿にそう叫ぶと、歩夢は振り向いて「うん！」と大きな返事をして駆けて行く。

「あのー、レンレンさん.....」

申し訳なさそうに風小が言い出す。

「私.....、そろそろ.....おいとまを.....」

「あんたも！」

有無も言わせぬ勢いでレンレンが風小を指差す。

「姫緒にはさつき了解取ったから！あんたも、少し私の手伝いをしなさいよん！」

「うええ？」

「さっさと庭に行けって言ったのよん！」

蹴り飛ばす勢いでレンレンが怒鳴りつけると、風小は怯える小動物のごとく台所を飛び出して行った。

歩夢と風小の居なくなっただけの台所.....。食器の触れる音と、水の跳

ねる小さな音だけがその場に漂う。

「ばばあ……」

水仕事を続ける老婆にレンレンが声をかける。

「どーでもいいことだけどさ、一つだけ聞きたいことがあるのよん……」

老婆の反応は無い。

「なんで、私にはラジオ体操……。勧めなかったの……」

ふと、老婆の手が止まった。

「あんたは、大人じゃろう……」

そう言っつて、再び洗い物を始める老婆の後ろ姿にあかんべをする  
と、レンレンは風小が待っている筈の庭へと向かった。

庭先で待つレンレンと風小の前に現れた歩夢は……。それが、彼の言う『準備』なのか、麦わら帽子に植栽用のシャベル、白い大きな目のウエストポーチと面白いで立ちだった。

「庭いじりでもなさるのでしょうかねえ？」

風小が小さな声でレンレンに尋ねる。

「ネモ！そのカッコでいいのか？」

歩夢がレンレンの前まで駆けて来て、彼女の服装を見回す。朝顔柄の浴衣に、赤い鼻緒のビーチサンダル……。確かに何処に行くにしても少しばかりヤバイかも知れなかった。

「いろんな意味で、ほつといて……」

どうしても言うほどでやっている格好ではないが、いまさら人に言われるのも癪にさわる。

歩夢はそんなレンレンに頷くと、納屋に向かって声を張り上げた。

「ハリガネー！行こう！」

すると、納屋の暗がりの中から、一匹のネコがのそりと現れる。

蒼灰色の体毛、ビロードの毛並み。風小の瞳のように緑色の目……。やがて、全身が暗がりから現れると、尻尾の先が頭がわへ鋭角に折れ曲がっているのが見えた。

レンレンを竜宮町へ誘い、風小に泳ぎを教えた…… はじまりのネコ……。ハリガネ。

「最初は石を掘らなきゃ！」

ハリガネが小走りに進み出すと、後を追うように歩夢が早足で追いかける。

「あ、歩夢さん！待ってくださいませデス！」

慌てて、風小も後に続いた。

何時の間にやら、そんな風小を追い抜き、レンレンがまるで普通に歩くようにして歩夢に並んで歩いていった。

「石を掘るってどういうことよん？」

レンレンが尋ねる。

「役割なんだ、ハリガネが石を見つける！俺が掘る！後は、ばあちゃんが見立てたところへ埋めなおす！久々に見つけたから掘りに行くこうつて！」

歩夢が説明してる間に、ハリガネは車の影の無い大通りに出る。そして誰もいない錆びたバス停の前で止まると、その場に座った。三人も追いつき、ハリガネの後ろに歩夢、レンレン、風小の順に並び……。

「ネコつて……。バスに乗れたっけ？」

レンレンが誰に聞くとなしに呟いた。

「ハリガネは特別なんだ！」

歩夢はそう言うとしゃがんでハリガネの咽喉をさすってやる。するとハリガネはころりとその場に横になり、歩夢の手の動きにあわせてくねくねと身体をくねらせて甘えた。

「利口なネコ様ですねえ……」

風小が関心する。そう、それは、訓練された『器用さ』では無かった、明らかに、自分の意思で行動している『利口さ』だった。

「キミ、さつき石を掘るって言ってたでしょ……」

レンレンが歩夢に尋ねた。

「うん！これだよ！こういう石！」

歩夢は、ウエストポーチから赤い巾着袋を取り出すと、口を結わえた紐を緩め、中から小指の爪ほどの大きさの、数個の輝石のようなものを掌に転がした。その石は大小の違いは有ったものの、一樣に赤い系統の色をした石だった。覗き見ていた風小の表情が見る見る驚愕の色に変わる。

「こ、これわあー！『荒石』デスよー！」

非常に強い霊力を帯びて他の霊力を持つ石と共鳴しあう名も無き石……。そんな石を、風小の姫様である姫緒の一族、鬼追師達は荒石と呼び、様々に細工をほどこし、退魔兵器として使用していた。しかし、その石は大変希少なものであり、それゆえにその使い道もおのずと制限されてしまう。そんな貴重な一品でもあった。

「間違いないの？」

「じ、尋常では無い霊波が石から放出されています！一個でもこれほどのものがこれだけあるのに……。一体どうして今まで、私は気がつかなかったのでしょうか……」

「この石は悪さをするからな……。こうして……」

そう言って歩夢は石を袋に戻すと、口を結わえてしまった。

「こうやって封じておかないとダメなんだ」

「霊波が……。止みましたデス……」

風小がそう言ってきたきよるきよると辺りを見回す。蝉の声……。山の木がざわめく葉ずれの音……。今、この世界でそれ以外の音を探すかのよう……。……。

「封じた！荒石の力を封じた！信じられませんデス！その巾着に強力な結界が施されているのですね！」

荒石はその強すぎる霊波のために、あらゆる自然の摂理に影響を及ぼす。あまりに強くなれば人の命すら削ってしまうほどの力を持っていた。ゆえに、劇薬のごとき扱いを受けることもある。その荒石を管理するために施された結界……。そんなものが存在している事を風小は知らなかった。

「ちよっと見してみ……」

そう言ってレンレンが歩夢のウェストポーチの中を覗きこむ。

「おー！」

レンレンの驚く声につられる様に、風小も恐る恐るポーチを覗き込んだ。

「あええええええ！」

ポーチの中には、色とりどり……八種類の中着袋が入っており、そのいずれもが大きく膨らんでいる。一体どれほどの数の荒石があるものなのか、予想もつかない。

「袋ごとに色分けされてるんだ。青い袋には青い石、緑の袋には緑……。あと、その中で透き通ってたり、そうでなかったりで種類分けして37種類！粹珠、紅珠、碧珠……。あと、えーと……」

「キミとハリガネが二人で集めたの？」

惚けたようにたたずむ風小を押しつけてレンレンが尋ねると、歩夢は大きく首を横に振った。

「俺のじいちゃんの、ずっと昔のじいちゃんの頃から少しずつ集めたんだ……」

『都で陰陽師との闘いに敗れ、落人となった退魔師の一族が追っ手を逃れて、その漁村へとたどり着いた……』

レンレンの脳裏に歩夢の祖母の言葉が蘇る。

「山の物……」

『退魔師達は霊波的環境浄化を行う事を条件に、村へ受け入れてもらい、追っ手からかくまってもらおう事となった』

「荒石……。見つける。掘り出す。見立てて埋め直す……。？」

それが、退魔師達の環境浄化なのか？ならば深山の者達は……。

やがて、その場の夏をかき消すような騒音を高らかにまき散らし、乾いた砂ぼこりを巻き上げながら、白い車体にブルーのラインが入った乗り合いバスがやって来て、バス停の前に止まった。

後部の扉が独りでに開くと、待っていたかのようにハリガネが乗り込む。

「いっしょー」

歩夢が乗り込みながら、二人を呼ぶ。

「レンレンさん……」

風小が怯えるようにレンレン見つめた。荒石の力を知っている風小だからこそ、踏み入れては行けない領域を、危ぶみ恐れているが判る。

「行ってみましょ」

あっけらかんとレンレンが答えた。

「行かなきゃ宿題、終わらなそうだよん」

そう言つて、レンレンがバスに乗り込むと、覚悟を決めたように、風小も続いて飛び乗った。

バスの中、左右に列ぶ椅子には、中ほどの二人がけの席に座り手招きする歩夢以外は、他の乗客の姿は無い。見回すと、ハリガネが運転席の脇の床で丸くなっているのが目に止まったが、運転手は特に気にしている様子は無なかった。レンレンは、ハリガネが歩夢の言うように、『特別』なのだろうと納得する。

レンレンが、招かれるままに歩夢の座る席の通路側に座ると、風小はその後部座席の窓際に陣取った。

「ハリガネのお使いかい……？」

運転手が振り向きもせず尋ねる。

「そうだよ！お願いします！」

歩夢が答えると……。バスはゆっくりと動き出した。

バスは進む。

蝉が鳴き立てる夏を照り返す日差しの下、白亜色に染まった竜宮町の田舎道を……。

「あ、ほら！アレがキッコの家の旅館！」

空はどこまでも青く、その果てには……。さらに青い海原がさざ波立っている。

「あの岩場の裏には俺の秘密基地があるんだ！こんどつれてってやるよ！風小もな！」

まるで遠足ではしゃぐ子供のようになり、歩夢が、いつも見慣れた町

並みをレンレンに説き明かす。

バスは、いつまでたつても客で一杯になることはなく、数人の客が乗っては降りてを繰り返し、ほとんど貸し切り状態のままだった。乗ってきた客の中には、ハリガネを見てギョツとしたり、構ったりする者もいたが、大半は「こんにちはハリガネ」といった挨拶を一言かけるだけだった。

「今は、朝が早いからな、海水浴客が動き出すと結構混むんだ！そうするとハリガネは乗せられなくなるからな！」

やがて、バスがああ病院の廃墟へ続く山道の入り口付近まで来ると、ハリガネがむくりと起き上がり、運転手に向かって『にゃあ』と鳴く。

「ここでいいのか……？」

運転手はそう言つて、バスをゆっくり停めた。

「タクシーみたいデスよ……」

停留所の影も形も無い道ばたに停まったバスに、風小が目丸くする。

バスの前側の扉が開き、ハリガネが駆け下りる。

「ありがとう！運転手さんじゃあね！」

歩夢がそう言つて降りた後にレンレンが続いた。

「おいくらかしらん？」

そう言つておもむろに後ろを振り返り、風小の取り出した小銭入れを巻き上げる。

「あつ！レンレンさん！何するんデスカあ！」

風小が慌てて取り返そうとレンレンに挑みかかった。

「うっさいわねえ！小銭が無いのよん！」

料金箱の前で二人が戯れ合いを始めたその時、運転手が口を開いた。

「いらないザンス……」

固まるレンレンと風小……。

ゆっくりと運転手の顔を覗き込む……。

「あー！！」

「タケちゃん！」

「のんのんのん！あ、な、た、の！タケちゃん！ザンスー！」  
そう言っつて、脱いだ帽子のその下は、青々としたスキンヘッドだった……。

三人と一匹をその場に降ろし、空になったバスは、エンジン音を高くして再びゆっくりと走り出す。やがて、まるで違う世界に溶け込んでいくように、陽炎の中へ見えなくなるまで、バスの後ろ姿を三人は見送っていた。

「びつくりしましたデスよ……」

風小がそう言っつて溜息をつく。

「タケちゃんはゲンクローズのOBなんだ！一昨年就職して、今は夏の大会の日だけ司会やつてる」

「恐るべし……浜茶屋源九浪……」

一筋の冷や汗とともにレンレンが呟いた。

ハリガネが、そんなレンレン達の前に一歩出て、付いて来いと言うように後ろを振り返り歩き出す。歩夢が麦藁帽子を押さえながら、一番最初に飛び出した。

「行くぞ！ネモ！風小！」

「何処へ行こうというのデスカねえ……」

訝しげに風小が言う。風小はこの先に何があるのかを知らない。だが、レンレンは知っていた。そして、多分、ハリガネの行こうとしている場所も……、そこで間違いないだろう。

「まさか、ほんとにまた戻ってくるとはねえ……」

そう言いつつ、不敵な笑みを浮かべてレンレンが歩き出す。

「？」

レンレンの言動の意味を計りかねるように躊躇しつつも、風小がそれに従った。

三人はハリガネの後について山道を進んで行った……。時々風小

が、周りの木々が風も無いのにざわめく様や、草花の色や鳥達の影に心奪われ、足取りを遅らせつつ、慌てて追いついて来る事を繰り返していたが、むしろそうしてもらおう事を望んでも居るように、歩夢は、わざわざ風小が気にかけた花や鳥の名前を教えたり、町を見渡せる見晴らしのいい場所では、自ら進んで足を止めてガイドした。

「歩夢さんは本当に何でも知ってらっしゃるのですねえ！」

お世辞ではなく、風小は心からそんな歩夢に感心している様子だった。

風小と歩夢が道草を愉しんでいる間、ハリガネは先を急ごうとはせず、その場に止まり、毛づくろいをしたり、その場に横たわり、ごろごと身体を道に擦りつけたりして時間をつぶす……。

「そうね……」

そう言っつてレンレンが道端に横たわる大きな岩に腰を降ろした。

風小を叱る理由など無い。歩夢を急ぎ立てる理由も無い。自分達はハリガネの手伝いに来ているのだ。そのハリガネが先を急がないのなら、何をかいわんやである。常日頃、あれほど惜しいと思っていた大切だったはずの時間が、今この瞬間に、それとは違う大切であるものに変わって行くのを感じた……。時間とは本来、こうやって存在している物なのかも知れない……。レンレンはふとそんなことを思った……。

「無駄なんて言葉……。ここでは最初から無いのかも知れないわねえ」

そう言っつと、座ったままで後ろに手を着き、胸を張って目を閉じる。微かな潮騒……。蝉の声……。肌にジリジリと感じる太陽の香りが、磯の香りと一緒に漂ってくるような気がした。

「ネモ！早く行かないと日が暮れちゃうぞ！」

声に驚いて目を開ける。まっしろにフラッシュバックした世界に徐々に色が戻ってきて、歩夢の顔が目の前に出現した。

「そうね……」

苦笑いしながらレンレンが答える。

「日が暮れちゃうわね……」

なぜか、そんな当たり前の会話が今のレンレンには新鮮だった。

ほどなく、レンレン達の前に、壁一面に鬱陶しくも毒々しい、蔦を蔓延らせた廃墟が現れる。ハリガネは建物の正面ではなく、敷地の周りに築かれた土手の上を通って裏手に回り込み、歩夢が後に続く。

「嫌な気が漂っておりますデスよ……」

廃墟を前にして、風小が鼻をひくひくさせながら呟く。

「止めときなさい、鼻がひん曲がるわよん……」

歩夢の後を追かけながら、レンレンがすれ違いざまに、風小の頭をこづいてそう言っていると、頭を押さえてたたずむ風小を、ついて来いと手招きした。

レンレンと風小が建物の裏側に回ったとき、歩夢は二人に背を向けるようにしてしゃがみ込み、何事かごそごそと作業している最中だった。

「この辺？」

歩夢が、傍らに寄り添うハリガネに尋ねるように言って、手に持ったシャベルで土手の中腹当たりを突つく。

すると、ハリガネは、レンレン達の方を振り向き、二人に、良く見ていると言つような視線を向けてすぐに向き直ると、折れ曲がったシツポを掲げ、ふらふらと振りだした。

「レンレンさん！あれ！」

ハリガネの前の陽だまりに、突然、木漏れ日のように透き通る光が湧きだした。それはまるで、水面がキラキラと輝く様に良く似ている。その日向の中の木漏れ日は、やがて、蛍ほどの小さな光の固まりに分かれ出して飛び交い、辺りに溢れかえった。

「レンレンさん！あやかしです！『靈狩蟲』です！」

風小が驚きの声を上げる。

「霊狩蟲……？」

「霊的エネルギーに集まり、これを増殖に使うあやかしです！」

「どうゆうことよん？」

「生き物の思考を身体に溜め込み、これを他の生き物の感情へ流し込む事によって活性化、増殖するのデス！その際、流し込む感情と引き換えに、流し込まれた生き物の思考をわずかですが身体に溜め込みます。溜め込んだものの同種の思考を持った生き物と接触すると、極たまに、霊狩蟲に溜め込まれた思考が声になって聞こえることがあり……」

「ねえ、つまりそれってえ……」

レンレンが興奮する風小の言葉を遮った。

「他人の思考が『ソラミミ』になって聞こえるってことお？」

レンレンの言葉に、風小が意外だというような顔をする。

「知ってらっしゃったのデスか？はい、そのとおりデスよ……。俗にその現象を『ソラミミ（空霊神）』と呼び、妖怪として扱われる事も有るようデスよ……」

再びハリガネが尾を振るい出すと、霊狩蟲達は蚊柱のように一カ所に集まりだし、空間に大きな日向の中の日だまりを浮かびあげた。宙に浮く透き通った日だまりは、まるで空間が裂け始めようと輝いている様に見える。

「ここだな！」

歩夢がそう言ってシャベルで陽だまりの下の土手の土を掘り出した。

「霊的エネルギーを感知する霊狩蟲を鵜飼いの鵜のように使い、荒石を探して掘り当てているのデスか！」

風小が驚きを隠せない表情のまま、霊狩蟲の柱に近づいて見つめる。触るうとして手を近づけると霊狩蟲達は弾ける様に散ってしまふが、次の瞬間にはまた集まり、柱を形作った……。

「このネコ様は、霊狩蟲を操る事が出来るのデスよ！」

風小はそう言ってハリガネを指差した。すると、ハリガネの周り

に飛び交っていた数匹の霊狩蟲が、今度は一斉に、風小とレンレンに向かつて舞って来たかと思うと、二人の周りを飛び交い出した。そして……。

「（こんにちは）（レンレン）（風小）（やっと）（おはなし）（できたね）」

「なに？」

レンレンが霊狩蟲を追い払いながら困惑する。

「レンレンさん！ダメです！」

風小が、レンレンの手を止めて制した。

「霊狩蟲の思考が流れ込んで来ているのデス！いえ、これは……」

風小の視線がハリガネに注がれる。

「あなたなのデスカ？ネコ様！」

蚊柱を作っていた霊狩蟲たちが一斉に散らばり出し、風小とレンレンの周りを飛び交い出す。二人の視線はハリガネに向けられたままだった。

「（そう）（ボクだよ）（ハリガネです）（あらためまして）（初めまして）（竜宮町へようこそ）」

ハリガネが目を細め、にやあと鳴いて見せた。

「あやかしを操るネコなんて……聞いたこと無いわよん……」

レンレンがあきれたようにそう言うと、物凄いスピードで辺りを舞っていた霊狩蟲達はゆっくりと漂うようなスピードになって辺りを漂い出した。

「霊狩蟲を操る鬼追師の話を知ったことがありますデス……。たしか……、言霊使いのお方で、お名前は『丙五郎』様……」

「丙五郎は俺の死んだ爺ちゃんだ！」

風小の呟きに答えるように、歩夢が叫んだ。その手には紫色の荒石が握られていた。

「（荒石を探す）（そして）（掘って）（見立てた場所に）（また埋める）」

霊狩蟲が漂い舞う中、レンレンと風小がハリガネの言葉に耳を傾ける。

「（そうして）（気の流れを整える）」

『氣』はどこにでも存在するエネルギーの流れ……。そのエネルギーはあらゆるものに存在し、そして影響しあう。

その影響の関係を良いものにしようとする考えが、風水を含む一連の術である。

個々の存在する物体同士の影響を調整するのは非常に難しいが、それらを囲む地形的規模の気の流れを調整することが出来れば、その、大きな良い気の流れに影響され、いずれは小さな流れも、その運氣や、固体特有のコンディションに至るまで、良い方向へと修正することが出来る。

理屈ではあるが、これは大変な困難を伴うのは言うまでも無いことだ。

手っ取り早いのは、『良い場所』を探し出し、そこに街を造ること。これが基本……。

だが、竜宮町の地形、そして、この環境の、どの位置を見立てても、その『最良』となるべき要素は見当たらない……。そこで……。

「（この）（霊的な環境浄化を）（鬼追師達は）（何百年も）（繰り返してきた）」

誤った大祭により不浄の血を流し、土地を汚し続けた竜宮町は、この鬼追師たちの新しい環境浄化により土地の気を蘇らせたのだ。た。

ゆえに、今の竜宮町の気の流れは『最良』と言えた。

海から吹きつける浄化された強い陽の気を、余すところ無く街が受け治め、錆び付いた影の如く張り付く陰の気と混ざり合い、均衡の取れた気の流れをつくり、調律するように地形のバランスを正しながら街の中を吹き抜けて、ものわけさんに張られた結界によって戻され、海に戻っていく……。

「(でも)(これは危険な事だった)(荒石は)(それを扱う)(鬼追師たちの)(寿命を)(削った)(鬼追師たちは)(どんどんと)(その数を減らしていった)」

ハリガネがチラリと歩夢の方を見てつづけた。

「(歩夢のお母さんも)(荒石の力で)(寿命を縮めた)(……)」  
「えっ？」

レンレンが声を上げる。

「婆は、産後の肥立ちだって……」

「(荒石に命を削られ)(歩夢の出産に)(耐えられなかった)(解っていた事だった)(でも)(お母さんは)(歩夢を生んだ)(それは奇跡だった)(でも)(奇跡は)(二度は起こらなかつた)」  
「おとうちゃんはもう石に触るなって言うんだ！でも、俺、約束したんだ！じいちゃんと！大きくなったら竜宮町を護るって！」

歩夢がそう言ってひとさし指の甲で鼻の下を擦って見せた。

「俺は平気さ！おかあちゃんも、じいちゃんも、町を護ってきたんだからな！おとうちゃんだってほんとは町を護りたいんだ！でも、俺のために山の物を止めたんだ……」

「(歩夢が生まれてすぐ)(ボクは)(じいちゃんに拾われた)(そして)(じいちゃんを手伝いながら)(勉強した)(荒石の使い方覚え)(霊狩蟲の使い方を覚えた)」

ハリガネが目を閉じる。

「(やがて)(歩夢が『大きくなったら』)(……)(歩夢を)(お手伝いできるように)(じいちゃんが護ったこの町を)(一緒にまもれるように)(……)」

ハリガネがゆっくりと歩夢の足下へ移動すると、歩夢はハリガネを抱き上げた。ハリガネは「くう」と息を吐くと歩夢の頬を舌でペるペるとなめ回す。

「霊狩蟲による精神交換で動物と会話するなんて……。こんな方法が……。あつたこと、私、初めて知りましたデスよ」

だがそれは、勿論、言葉の意味を極めた『言霊使い』鬼追師の丙

五郎だからこそ出来た技であることはいうまでも無いことだった。

風小は傍らに立って話を聞いていたレンレンに視線を向ける。

「なんか、結構つままない話ねん……」

レンレンが言いながら歩き出す……。

「ネモ！何処に行くんだ！」

歩夢が尋ねると、レンレンは振り返りもせずには答える。

「源九浪行つて呑んでくる……。夜には帰るわん！」

軽く手を上げてそう言うと、その止まるうともせずに行ってしまった。

「ネモ！！」

慌てて後を追おうとした歩夢の肩を、風小が捕まえて止める。

「そつとしておいてあげて下さいませ。色々複雑なのだと思いますよ……」

「？」

腑に落ちないような顔をする歩夢に風小が続けた。

「山の物が鬼追師の末裔と知ってしまったのです……。本来、レンレンさんと鬼追師は敵同士なのですよ……」

「え！？」

歩夢は驚きの表情で風小を見たが、すぐにレンレンの消えた方角に視線を移す。

「あつ、でも、でも……。勘違いなならないで下さいませ」

そう言いつと風小は後ろから歩夢の両肩に手を置いて、歩夢と同じ方角に目を向けた。

「レンレンさんは、鬼追師のことが嫌いでは無いのですよ……」

旅館の中が静かだ……。静か過ぎた……。部屋の中には人の気配があつたし、大声で騒ぐものこそ居なかつたが、会話する声もそこかしこから聞こえていた。今日は行儀のいい客ばかりなのだ、キツコは初めそう思っていた。

「こんばんわ……。生川さん……」

キッコが生川の部屋の格子戸の前で声をかける。返事は無い……。外は暗かったが、そんなに遅い時間でもない。だから本来なら、まだ宴会のお客や、食事が終わって、お風呂や町に繰り出そうとする客で館内がごった返していてもおかしくない……。

昼間のうちに、美土里がキッコの自宅に尋ねて来て、『見せたいものがあるから部屋にきて欲しい』と生川・ルークから伝言されたと伝えられた。

誰にも見つかからないようにして欲しいとの事だったので、最初は静かな旅館の中は好都合であり、期待に胸を高鳴らせていたせいもあって、そんなにおかしいとは思わなかった。誰にも合わないようにしながら離れへ向かう廊下まで来る間に、徐々に異変に気がついた。旅館の仲居さんはおるか、一人の客ともすれ違わない……。

何か、普通でない兆しを感じたが、それであるからなおの事、生川の部屋に向かうこと以外、キッコには考えつかなかった。

「こんばんわ……生川さん……入っていいですか？」

再び……、今度は少し大きめな声でキッコが声をかける。すると……。本館の方から、足音が近づいてくるのが聞こえた。

「美土里さん？」

キッコが小さな声で確認する。ひたひたひたと近づいて来ていた足音は、段々と大きくなり、裸足でびたびたと板の間を歩いてくる音だと気がついた。

美土里ではない。美土里なら足袋を履いているはずだった。裸足で歩くものがあるとすれば……。客か？

キッコは、部屋の前で下を向いてやり過ごそうと身を硬くした。やがて、足音が自分の前まで来た時に、廊下に視線を落としたキッコの目に映ったものは……。『手』だった……。下を向いているキッコの目に……。なぜ……。？その気持ちが無意識に反射して、ゆつくりと顔を上げる。程なくその足音の主と目が合った……。『それは、正座をした格好で足が宙に浮いている薄汚い坊主だった。前に突き出した自分の手を、足のようにつかつかって廊下をぺたぺたと後

る向きに進んでいる。逆立ちをしているのは違う……。坊主の身体は斜めに浮いており、まるで、身体を手で押し出すように歩いているのだ。その坊主の、廊下に近いところに浮いている顔が上目づかいにキッコを睨んだ。

「美土里さんじゃあ、ないよ……」

「いやあああああー！」

キッコは叫んで、格子戸を開けると中に飛び込む。

「生川さん！生川さん！」

キッコが生川を呼びながら部屋を見渡した。部屋の中は蛍光灯が点いて明るかったが、中央に描かれた、方陣の周りに置かれた蠟燭にも火が燈っていた。蠟燭はしかし、そのほとんどが燃えかけて、弱々しく揺らいでいるのが見える。

生川の姿は無かった。

「キッコ……こちゃん……。キッコちゃん」

声がる。聞き覚えのある声……。

「美土里さん？」

キッコが部屋の中へと一歩踏み出す。声のする方へ視線を向けるが、美土里の姿が無い。

声がる……。

「キッコ……ちゃん……」

恐る恐る中へ進み、談話スペースのある奥へと向かう……。途中で……。襖の百鬼夜行図が怖くて、目を合わせないように進んだ。だが……。

「きつ……こ……ちゃ……」

呼ばれた気がして、キッコは意識しないまま、声のする方向……。襖に視線を泳がせていた。

絵が変わっていた……。そこには、昨日の晩に見た、あの薄気味悪い異形の物達の姿は無く、沢山の、苦悶の表情をした人間の墨絵が、あの、一筆書きのタッチで描かれているのだった。その中に……。



「たすけて！たすけてください！美土里さんが！みんなが！……」  
そう言って部屋の中を見回したキッコが、そのまま一步後ろへ下がる。

其処に居たのは、客ではなかった……。いや、正確には、客もいた。ただし、客たちは全て、襖や畳に描かれた墨絵に変わり果て、客たちが宴会して居たであろう据え膳には、角の生えた物や、狸の顔をしたものや、青い顔や、口しかない顔、顔の三つついているものなど……の、ヒトデナイモノが着いており、酒を酌み交わし、肴を食らっているのだった。

「妖怪！」

キッコが叫ぶと、妖怪たちは一斉に笑い出し、ひとしきり笑った後でキッコを見つめて一時しばらくに口を開いた。

「……なんか、ようかい？」「……」

再び宴会場に大爆笑が巻き起こる。

一步、二歩、前を向いたまま静かにキッコは下がった……。後ろを向いた途端、襲い掛かられそうな気がして……。だが……。  
『ぼん』

と何者かに肩を掴まれ、振り向いて、大声を出しそうになった口を手で塞がれる。

「大丈夫ですか？お嬢さん！」

見覚えのある顔が其処に有った。旅館の支配人。稲田の神経質そうな七三分けの顔が今は頼もしい。

「静かに……。あいつらを刺激しないように……」

塞いでいた口から手を離しながら、稲田がキッコの肩を庇うようにして廊下へ引き戻した。

「稲田さん……これって！」

「しっ！」

稲田はそう言っ人差し指を口に当ててキッコに注意すると、声をひそめてしゃべり出した。

「女将さんは無事です。私は今、お嬢さんのところへ行くところ

でした」

そう言って微笑んだ稲田の両肩にひよっこりと手が現れたかと思うと、次の一瞬……。肩越しに、あの手押し坊主の顔が現れてニタリと笑う……。

「美土里さんじゃないよお……」

そう言つと、動けなくなった稲田の身体をぺたぺたと叩きだす。

すると、稲田の身体はどんどんと薄くなっていき、遂には廊下に張り付いて、そのまま墨絵に変わってしまった。

「いやー！」

キツコが大声を出すと、今気づいたと言つように、宴会場に居た妖怪たちがのそりのそりと廊下に溢れ出してきた。恐怖のあまり足が張り付いて動けない！

角の生えた物、狸の顔をした物、青い顔や、口しかない顔、顔の三つについている物……、手押し坊主！それらが、のそりのろりとキツコに迫ってくる。

「天来地帰つつつつー！」

突然の叫び声とともに大量の液体が妖怪たちを襲った！辺りに酒の匂いが充満する！

「おかあさん！」

振り返ったキツコに、たすき掛け姿で、日本酒『海亀』のピンを振り回す母親……、旅館豊玉の女将の姿が写った！

「天！来！地！帰ー！」

再び妖怪たちに見舞われる日本酒『海亀』！

「がああああああああああ！」

妖怪たちが溶けていく！

「まっずい酒じゃあああああああああああ！」

「まっずいにも程があるうつつうつつうつつーん！」

逃げ出す妖怪たち！

「竜宮町山の物！特攻隊長！竜神の令子！近くば寄って目にもみよー！」

撒き散らされる日本酒『海亀』の威力！逃げ遅れた妖怪たちが次々に消滅していく！

「どうだい！ものわけさんの御神酒の威力！物の怪風情の出る幕じやないよ！」

女将はそう言つと一升瓶を脇に置いてキッコを抱き寄せ、涙ぐみながら何度も娘の名前を呼んでかたく抱きしめた。

「お母さん……。稲田さんが……。みんなが……」

「ああ……。出遅れちゃったねえ……。何がなんだかわからないうちに、あつという間の出来事だったんだよ……。一体、どこからこれだけの物の怪が……」

涙を指で拭いながらそう言つて。女将は「焼きが回ったねえ……」と自嘲した。

「お母さん、物の怪じゃないよ！妖怪だよ！」

「？」

「生川・ルークだよ！あいつがやったんだ！やるつて言つてたんだ！」

「どういうこと？キッコ！お母さんに話してちょうだい！」

キッコは母親に美土里と生川・ルークの部屋に行った時のことを全て話した。

話の難しいところは良くわからなかったが、生川・ルークが妖怪を作ろうとしていたということだけは伝えることが出来た。

「何てことを……」

女将が絶句する。

「りっぱな退魔師様かと思つて優遇してあげたのに……。恩を仇で返す畜生野郎だったとは……」

「えらい言われようでちねー！」

妖怪たちの消えた去った方向……。廊下の暗がりから、ぶくぶくとした巨漢を紫色の紋付はかまに詰め込んだ男……。生川・ルークが現れた。

「えーい！悔しい！生川！さつさと妖怪たちを引っ込めて、お客さ

んたちを元に戻しなさい！」

女将がキッコを庇うように前に出て生川に啖呵を切ると、キッコにそつと耳打ちした。

「キッコ、いいかい……。山の物の血が薄いお母さん一人では、もうこれが限界だ。深山のばあちゃんに……」

そう言つてキッコを静かに突き放すと、叫んだ！

「深山の家に行つてこの有様を伝えなさい！」

目交ぜし間、戸惑うような素振りを見せたキッコが次の瞬間には走っていた。

「早く！」

女将は叫ぶと向き直り、生川を睨んで酒瓶を構えた。

「大丈夫でちよ……。娘さんには何もしませんでちよ……」

生川がそう言つて薄汚い無精髭の生えた口元をぶつぶつと歪めた。

「娘さんには、語り部になつてもらつのでちよ」

「語り部？」

女将が聞き返す。

「そうでち！妖怪は恐怖から生まれるのでち！あなたの娘さんには、此処で起こつた事をどんどん世間に広めてもらつのでちよ！その恐怖が！新たなる妖怪を世界に生み出すこととなるのでちー！」

「なんて事を！大体！何でうちのキッコなんだい！」

女将が怒鳴りつけたが、生川は怯む様子も無く、それどころか、興奮で頬つぺたを真っ赤にして、潤んだ瞳で天井を仰ぐと、声のトーンを高くして叫んだ！

「貧乳の語り部！！萌ええええええー！」

他人事ではあつたが、聞くだけでもあまりに恥ずかしい生川のその心の叫びに……。

「こーの！ど変態やろー！」

羞恥心で顔を真っ赤にしながらそう叫び、女将が酒瓶の中身を生川にぶちまけた。生川はつぶぬれになつたが、まったく意に介さぬようにその場に立ち尽くす。

「わたちは何ともないので……」  
そう言って女将ににじり寄る。

「わたちは何ともないのでち！」  
女将の顔が恐怖で引きつる。

「な・ぜ・な・ら・ば！わたちは人間だからあ！あつ！人・間・だ  
からあ！」

「きやあああああああああ！」

旅館に、女将の悲鳴がこだました！

「ひんぬうううー！もええゝえゝえゝえゝー！」

生川の叫びもこだました……。

最終章 ACT 8 大喜利！この町のために！

走った、闇雲に走った！

見慣れたはずの町の暗がり、すべて別の世界に繋がるトンネルの入り口のように見える。すれ違う人たちが皆、自分にはわからないよくない事を考えているように思えた。

何人かの知った顔がキッコの名前を呼び、事情を聞こうと寄って来たが、その人たちの背中が怖かった、何かが突然飛び出してくるのではないかと思うと、思わず大声を上げて逃げ出した。

見上げた空には、何か、得たいの知れないものの影が、何匹も飛んでいた。

日の落ちた真つ暗な空に、鳥は飛ばない……。蝙蝠にしては大きすぎる。フクロウだろうか？人の大きさほどの……。

「きゃー！」

突然、前を歩いていた女性が叫び声とともに、へたへたとその場にしゃがみ込んだ。

彼女の前に、辛うじて人の形をした、どろどろに溶けた肉の塊が踊っていて、そいつが、女性の悲鳴で踊るのをやめたかと思うと、両手で自分の腹の辺りの肉を、シャツを捲るようにめくり上げた。其処には充血した大きな目があって、その目がぎよりと女性を確認すると、首の辺りが横に割れて口が現れ、大きくて黄色い歯をむき出して、楽しそうに『げげげ』と笑った。

再び、女性が悲鳴をあげた！キッコが、つられて叫び出しそうになった自分の口を両手で押さえ、目を潤ませる。妖怪は、女性とキッコを一瞥したが、それ以上構うことなく、そのまま「とんつく、てけてん、とんつく、てけてん」とお囃子しを口ずさみながら踊って闇に消えていった

それを皮切りに、あちこちで悲鳴が上がり出す。女性の声、男性の声、若い声、年取った声！声！声！声！

走った……。走るしかなかった。

どこへ……。

ふと、足を止める……。街中を抜けて、田んぼ道に出ていた。何事も無かったようにカエルの輪唱が辺りに溢れかえっている。いつもの竜宮町がそこにあつた……。旅館のみんな……。絵になつても自分を心配してくれた美土里さん……。身を挺して守ってくれた、支配人……。おかあさん！

あれは、何だったのか？夢であつてほしい……。悪夢であつて欲しい！

自然と涙が流れてくる。正面には『ものわけさん』のある山が見えた。『どこへ……？』あの麓……。そうだ！そこには、歩夢が居る！走り出そうとしたキッコの前に、牛ほども有る大きさの、胎児のように頭の大きな坊主が『降つて』来た。坊主の皮膚の表面はかさかさに乾いて、土気色をしており、まるで、樹木の皮のような皮膚をしている。

坊主は、立ち上がる事が出来無いらしく、四つん這いで腹を擦つたまま、ジャリジャリと道の砂利を鳴らしながらキッコ方へとゆっくり這つて来る。今さつき、走り出そうとして折角入れた足の力が、硝子が砕けるように崩れていき、キッコはその場にへたり込んでしまった。

坊主が、嬉しそうにかさかさと皮膚の音を立てて、手を叩きながら微笑み「きゃっ、きゃっ」と笑つた。

突然、妖怪の後方……。黒い空間に、縦長の瞳孔、翡翠のように輝く両眼が見開かれた。その瞳が空に舞つたかと思われた瞬間！巨大な妖怪は、信じられないようなスピードで身をよじり、岩のような拳を瞳の主目がけて繰り出す！

瞳の主が空中で軌道修正したかに見えたが、妖怪の腕の長さが、驚くことに三倍ほどに延長し、さらに数力所から折れ曲がつたかと思つと、瞳の主を追いかけ方向を変える！

妖怪の拳が獲物を捕らえた！弾かれるように飛ばされる瞳の主は、

空中でバランスを取り戻すと両足を開いて着地し、力を入れて踏み堪え、そのまま後ろに引きずられるように砂利の上を滑走して止まった！

「あなたは、あやかしでは無いようでございますねえ。すると物の怪……。或いは……。妖怪でございますデスカ？」

涼やかな声でそう言いうと、瞳の主が灯りの中に進み出る。月明かりの中、ぼんやりと浮かび上がったその姿は……。

「風小！」

キツコが瞳の主に呼びかける！

妖怪の乏しい表情は、それでも明らかに怒りを顕わにしていたが、きやつ、きやつと言う笑い声は相変わらず続いていた。

「あなたには何の遺恨もございませんが、この娘さまには私、少々所縁がございますのデスよ」

風小はそう言ってその場にしゃがみこみ、地面に人差し指で円を描いた。すると、風小の足下にマンホールのような、黒い空間が出現する。すかさず左手を突っ込むと、探るような仕草をし、再び引き出した彼女の左腕に装着されている風水板のような物は、鬼追い師の必殺兵器……。風水銃！

「キヤラクタル！（属性石）フラッパー・ストーン！（遊光石）」

風小が叫ぶと、彼女の額が輝き出す！その光の圧力が、額を隠していた亜麻色の前髪をさわさわと湧き上げ出すと、光りは額の中心に集中しだし、やがて……。小指の爪ほどの大きさの、深い緑色の中に小さな七色の光りが小刻みに輝く石となつて、そこに固定された。

「属性は！『奇蹟』！」

本来、風水銃は『あやかし』撃退用の兵器である。あやかしは木・火・土・金・水、いずれかの属性を持っており、その属性の相反する属性をぶつける事によって相殺して退治する。この風水銃はその相殺の属性を、『属性石』と呼ばれる五種類の輝石を媒体として発生させ、打ち出すことが出来るのだった。

しかし、今回、風小の額に輝く『属性石』はあやかし撃退用の属性石とは違う。

その石は、風小自身が、おのれの霊力を高めるために身に付ける『パワー・ストーン』のそれだった！

キャラクターの属性が風水銃に流れ込み、上部の回転盤が高速で回りだす。

「お覚悟デスよ！」

幾重にも同心円を描いている風水銃の上部回転盤は、各々盤の回転速度の違いから、火花を散らし、やがて銃そのものが火の粉で包まれる。

「くらうがいいデスよ！破魔の風！」

叫び声とともに、風水銃と属性石によって強化された風小の霊力が、轟音と共に光りとなって妖怪に向けて放たれた！光りに包まれた妖怪は、まるで岩が風化していくようにぼろぼろと崩れて行き、ついには、跡形もなく消滅する！

「すごいー！」

目の前の出来事に驚き、目を大きく見開いたキッコが思わず呟いていた。

「大丈夫ですか？キッコさん？」

風小がそう言っただ道端に座り込むキッコを抱き起こして、埃を払ってやる。

嬉しさのあまり、風小に抱きつこうとしたキッコが、急に疑心暗鬼になり躊躇う。

「風小……どうして此处に……」

「はい！レンレンさんを源九浪までお迎えにあがるところでございませすよ！レンレンさん、今日は色々ご機嫌よくなって……。朝から源九浪に入りびたりなのデスよ……」

風小がそう言いながら、海の方角へ思いを向ける視線を移すと、突然、キッコが抱きついてきた。不意をつかれてよろけながらも、風小はキッコを受け止める。

「風小！風小！風小！」

「怖かったでございますよう……。あ、でもでも！心配はいりませんデスよ！こいつら怖がらなければどーってことないレベルの下っ端でございますデスから！」

そう言いながら風小はキツコの震える背中を抱きしめてやる。

やがてキツコは、にわかになんか何事かを思い出したように風小から身体を離すと、彼女を見つめて手を握った。

「風小！お願い！私を歩夢くんの所へ連れてって！」

「わかりました……」

風小が握り返したキツコの手は、恐怖の為かまだ小さく震えている。

「道中、お守りさせていただきますデスよ！」

あたりの浜茶屋は店じまいを始めていた。だが、浜茶屋源九浪がただ一軒、そんな様子を微塵も感じさせずに営業している。

客は、レンレンただ一人……。

いかに察しの悪い酔っ払いと言えども、この状況では、頼杖をついていつもの席に座り、海を見ながら茶碗酒をあおるレンレンに店が気を使ってくれていると言うことは押して知るべしだったろう。

しかし当のレンレンは、むしろ追い出される事をきっかけに退散しようとしていたために、すっかりじきを外してしまい、今更どうしたものかと考えあぐねっていた。

「あらよお、まだやるのかい？」

そんなレンレンの心の中を見透かすようにおばちゃんが声をかける。

「あら？閉店のお時間かしらん？」

やれやれと言った口調でレンレンが答えた

「あらよお、うちは客がいる間は店を開けとく主義だよ」

おばちゃんはそう言うのとレンレンの隣の席に腰掛ける。

「何があったか知らないけど……。酒はそんな風に呑むもんじゃな

いって、お譲ちゃん、良く知ってる人だとおばちゃん思ってたけどねえ……」

おばちゃん言葉にレンレンがチラリと視線を送り、すぐ戻した……。

「ねえ……おばちゃん……」

真つ暗な海を見ながら酒の入った茶碗を口に運ぶ……。

「あらよお、なんだね？」

苛立ち、不安、憔悴感……。なぜ……。答えはわかっていた。

竜宮町……。人と鬼追師がつくった町……。その町を……。

レンレンにとって絶対超えなくてはならない敵。鬼追師！その鬼追師たちのつくった町を、レンレンは……。

「私……は……」

レンレンが言いかけたその時、しげちゃんが電話の子機を持って飛んで来た。

「おばちゃん！電話っス！深山のばあちゃん……いえ、山の物から電話だつて言えつていつてるッス！」

しげちゃん言葉に、おばちゃんの顔色が変わった。立ち上がり、奪い取るように電話を掴むと、挨拶もなしに話し出す。

「何があつたんだい！」

おばちゃんは、話を一言も聞き逃すまいとするかのように電話を両手で握り、耳に強く押し当てると、大きな目をぎよるぎよるさせて頷きもせずに話しに聞き入っていた。

しばらくした後、「わかったよ！」とだけ言って電話をしげちゃんに返すと店中に聞こえる大声で叫ぶ！

「今残っているあんちゃん達！ケータイで他のあんちゃん達を呼び出しとくれ！ゲンクローズ緊急召集だよ！」

たちまち、店の中に居た四、五人の『あんちゃん』達が電話をかけまくり出したのを確認しておばちゃんがレンレンに言った。

「あらよお。舌の根の乾かないうちで悪いんだけど、今日はもう店じまいさせてもらっしょ……」

「何が、あったの？」

レンレンがゆっくりと立ち上がりながら尋ねる。  
「あらよお……。あんた……。妖怪信じるかい？」

以下口上。

動き始めた生川・ルークの企み……。

復活し、町にあふれ出した妖怪達を、

竜宮町の守護団、海の物、山の物達が迎え撃つ！

町を守るものは誰か？

雷神の御符の覚醒は？

しっかりしろネモ・レンレン！

アンタ主役だろ（笑）

竜宮町で祭りが始まる！

この続きは、ぜひ、本編でお楽しみください！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8895s/>

---

悪夢の降る町

2011年5月10日11時56分発行